

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第24集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅳ
(環濠等状況調査 3)

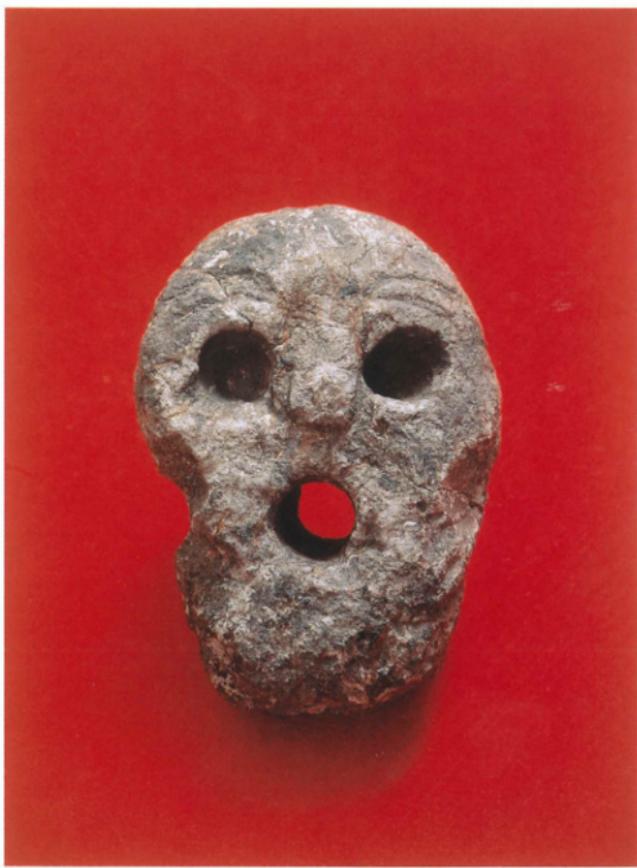
2002

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第24集

はる つじ
原の辻 遺跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書IV
(環濠等状況調査 3)





発刊にあたって

本書は、原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した、平成13年度の原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は、「魏志倭人伝」に登場する、「一支岡」の「王都」として特定されている遺跡です。「魏志倭人伝」に登場する国々の中で唯一その所在地が特定されているのが原の辻遺跡です。その重要性が認められ、平成9年9月に国の史跡指定、さらに平成12年11月には特別史跡の指定を受けました。弥生時代の集落遺跡としては静岡県登呂遺跡・佐賀県吉野ヶ里遺跡に次いで全国で3番目ということで、弥生時代を解明していくうえで稀有な遺跡として高く評価された結果であると思います。

平成10年度から平成12年度に実施された特定調査は遺跡の北西低地部を中心に行われ、弥生時代前末期の溝、弥生時代中期の環濠や弥生時代後期の濠、旧河道などが確認され、北西低地部の状況を明らかにすることができました。

今年度は南西低地部の調査を行い、台地を取り巻く環濠を3条確認するとともに、「人面石」や「三耳付三輪系瓦質上器」など貴重な遺物も発見しました。

今回の調査成果を学術的な資料として活用し、また文化財の保護のために役立てていただければ幸いです。

平成14年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木 村 道 夫

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した、平成13年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡の調査地区は、長崎県佐世保市芦辺町深江鶴亀触字八反に所在する。
3. 調査は長崎県教育委員会が主体として、原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織　所	長　高　野　晋　司
課	長　安　楽　勉
主任文化財保護主事	町　田　利　幸（現場担当）
文化財保護主事	藤　村　誠（現場担当）
文化財保護主事	小　玉　友　祐（現場担当）
文化財保護主事	中　尾　篤　志（現場担当）

4. 本書で使用した遺物と造形の実測および製図は、原の辻遺跡調査事務所が行った。
5. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、原の辻遺跡調査事務所に保管している。
6. 本書の写真は、町田利幸が撮影した。
7. 本書の執筆担当者は本文目次に（ ）で示した。
8. 本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではMNの略字を使用した。
9. 本書の総編集は、町田利幸が行った。

本文目次

I 地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	1 (中尾)
2. 歴史的環境	2 (タ)
II 調査の経緯	5 (藤村)
III 調査	
1. 調査概要	7 (藤村)
2. 土層	7 (藤村)
3. 遺構・遺物	10 (町田・藤村)
IV まとめ	77 (町田)

挿図目次

第1図	老岐島地質図	1
第2図	老岐島内弥生時代主要遺跡分布図	3
第3図	原の辻遺跡概要図	6
第4図	調査区位置図	8
第5図	台地西側主要遺構配置図	9
第6図	遺構配置図	11~12
第7図	中央区西壁・北壁土層図	13
第8図	S D 1・S D 3 土層図	14
第9図	S D 1 I層（上図）・II層（下図）遺物出土状況	15~16
第10図	S D 1 II層・III層遺物出土状況	17
第11図	S D 1 II層出土土器	19
第12図	タ	20
第13図	タ	21
第14図	S D 1 II層・III層出土土器	23
第15図	S D 1 III層出土土器	24
第16図	S D 1 I層出土石器	25
第17図	S D 1 IV層	26
第18図	S D 1 II層出土石器	27
第19図	S D 1 III層出土石器	28
第20図	S D 2 I層（上図）・II層（下図）遺物出土状況	29~30
第21図	S D 2 III層遺物出土状況	31~32
第22図	南区 S D 2 報告書掲載遺物出土状況	31~32
第23図	南区南壁・西壁・北壁土層図	33
第24図	S D 2 I層下	38
第25図	S D 2 I層出土石器	39
第26図	タ	40
第27図	S D 2 I層下出土石器	41
第28図	S D 2 II層出土土器	42
第29図	タ	43
第30図	タ	45
第31図	タ	46
第32図	タ	47

第33図	タ	49
第34図	S D 2 II層出土石器	50
第35図	S D 2 III層出土土器	51
第36図	S D 2 III層出土石器	52
第37図	北区 S D 3 I層（上図）・II層（下図）遺物出土状況	53～54
第38図	北区西壁・北壁土層図	55
第39図	中央区 S D 3 遺物出土状況	56
第40図	S D 3 I層出土土器	58
第41図	タ	59
第42図	タ	60
第43図	S D 3 I層出土石器	61
第44図	タ	62
第45図	S D 3 II層出土土器	64
第46図	タ	65
第47図	タ	66
第48図	S D 3 II・III層出土石器	67
第49図	S D 3 III層出土土器	68
第50図	S D 4 遺物出土状況及び断面図	69
第51図	S D 4 I層出土土器	70
第52図	S D 4 I層出土石器	71
第53図	その他の層及び遺構出土遺物	72
第54図	タ	73

表 目 次

表1	P番号取り上げ遺物 レベル表①	34
表2	P番号取り上げ遺物 レベル表②	35
表3	P番号取り上げ遺物 レベル表③	36
表4	出土石器一覧表①	74
表5	出土石器一覧表②	75

図版目次

- 図版1 満布区遠景（南から）・中央区SD1・SD4検出状況
- 図版2 中央区SD1Ⅱ層遺物出土状況・中央区SD1Ⅲ層遺物出土状況
- 図版3 中央区SD1横断土層・中央区SD1横断土層
- 図版4 中央区SD1・SD3検出状況・南区SD2検出状況
- 図版5 南区SD2Ⅰ層下遺物出土状況（南から）・南区SD2Ⅰ層下遺物出土状況（西から）
- 図版6 南区SD2Ⅰ層下遺物出土状況（西から）・南区SD2遺物出土状況
- 図版7 南区SD2埴溝検出状況（南から）・南区南壁SD2土層
- 図版8 南区SD2遺物出土状況・中央区SD1・SD3・SD4検出状況（西から）
- 図版9 中央区SD3調査風景・中央区SD3遺物出土状況
- 図版10 北区SD3縄群検出状況（北から）・北区SD3縄群検出状況（南から）
- 図版11 北区SD3遺物出土状況・北区SD3遺物出土状況
- 図版12 中央区SD3横断土層・中央区SD3横断土層
- 図版13 中央区SD2・SD3検出状況・北区SD3検出状況
- 図版14 中央区SD4遺物出土状況・南区Ⅲ層刀子出土状況
- 図版15 中央区SD4検出状況（南から）・中央区SD1・SD4検出状況（南から）
- 図版16 調査区全景

I. 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

壱岐は、玄界灘に浮かぶ東西約15km、南北約17km、面積約140km²の島である。全体が低平で起伏が少なく、最も標高の高い岳ノ辻でもわずかに212mを測るにすぎない。壱岐島の基盤層は、古第三紀に形成された泥岩・砂岩からなる勝本層群で、その上に新第三紀～第四紀にかけて形成された壱岐層群・芦辺層群・郷ノ浦層群と呼ばれる玄武岩が順次堆積し、島全体を覆っている(第1図)。これらの玄武岩は、縄文時代から弥生時代にかけての礫石器や石植材のほか、巨石墳と称される古墳時代的巨大な横穴式石室の石室材などに利用されている。また、黒曜石の産地も4ヶ所知られており、旧石器時代以降の剥片石器の素材として頻繁に利用されている。

壱岐の河川は、低平な地形のため流域も広く、島内東半部を中心に広大な平野が発達している。島内最大の河川である轆鉢川は流路延長8953mで、この川によって形成された深江田原と呼ばれる沖積平野は県内第2位の広さを持つ。沿岸部は屈曲した海岸線が展開し、北岸と南岸には大規模な海蝕崖が発達している。また、西海岸は渦れ谷による入り口の激しい海岸線になるが、東海岸の海岸線は平穏で海岸砂丘が形成されている。

気候は、対馬暖流の影響で全国的にみると遅い温暖な海洋性気候である。しかし、同じ長崎県に属する長崎市や佐世保市と比較すると、年間を通して気温は低い。氷点下になることは少なく、降雪や



第1図 壱岐島地質図

積雪もまれである。降水量は6～7月の梅雨期と9月の台風、秋雨時期に多い。年間降水量は県内県本土に比べると少ない。

原の辻遺跡は、岳ノ辻から派生する郷ノ浦層群の玄武岩台地上を中心に展開しており、幡鉢川によって形成された沖積平野に向して、約100haの広がりを持つ。

2. 歴史的環境

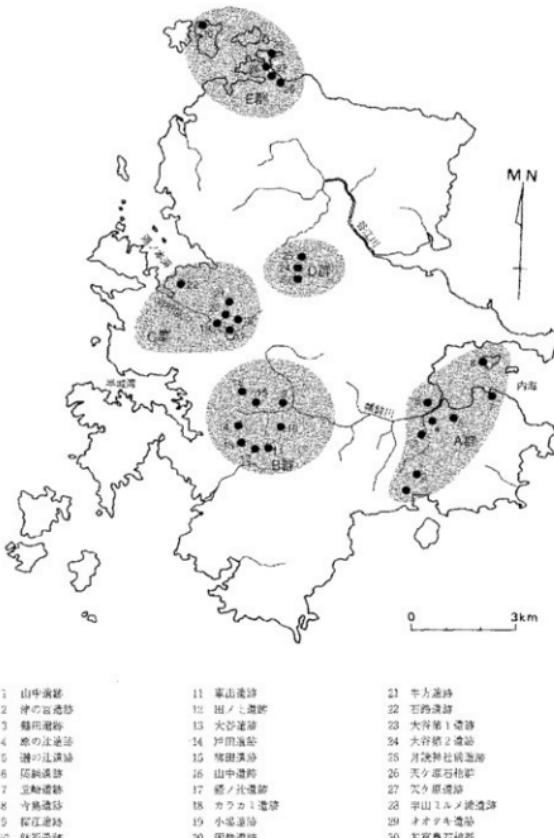
壱岐島における人類の足跡は、後期旧石器時代まで遡ることができる。壱岐島内においては、原の辻遺跡をはじめ、興触遺跡・カラカミ遺跡・圓柳遺跡などで、ナイフ形石器・台形石器・槍先形尖頭器・細石刃核などが出土している。発掘調査による出土例は多くないものの、いずれも後期旧石器時代のうちでも始良丹沢火山灰（A T）降灰以降の石器群として位置づけられる。これらの石器群の中でも、特に台形石器は、A T降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と称されている。また、朝鮮半島とのつながりが指摘されている洞片尖頭器も出土しており、対外交流の歴史がこの時期に始まる 것을 物語っている。なお、原の辻遺跡では絶滅動物であるナウマンゾウの臼齒が数例出土している。旧石器との共伴は現在のところ確認されていないが、絶滅した動物化石とそれを狩猟した人工遺物が共伴した例は、長野県野尻湖遺跡や岩手県花泉遺跡などがあるにすぎず、今後の調査の進展によってこれらの例に加わる可能性は大きい。

縄文時代には、沿岸部での遺跡立地が目立ってくる。特に、沿岸部でも満潮時には海中に没する潮間帶付近に立地する場合が多く、壱岐における縄文時代の遺跡立地の大きな特徴である。従来、縄文時代の遺跡分布は島の西半部に偏る傾向があったが、近年では石田町大久保遺跡をはじめ、東半部でも縄文時代の遺跡が発見・調査され、徐々に内容が明らかになりつつある。縄文時代の遺跡が形成されるのは、縄文時代前期の森B式からである。この時期は、今から約6,000年のいわゆる「縄文海進」と呼ばれる海面上昇期に相当し、現在の海況ができ上がった時期にあたる。したがって、壱岐島内の縄文遺跡の形成と展開は、水域環境への適応を前提としたものであったことが推測される。このことを示すように、郷ノ浦町名切遺跡では、銛頭鋸先や石錐等の漁撈具が出土しており、外海への積極的な働きかけがうかがえる。一方で、同遺跡で発見されたドングリピットと呼ばれる堅果類の貯蔵施設の存在は、海産・陸産の資源を網羅的に活用して、安定した生活を営もうとした意図を反映したものであろう。なお、朝鮮半島とのつながりを示す資料としては、勝本町松崎遺跡において、朝鮮半島南岸地域の櫛目文上器が採集されており、海を越えての交流が縄文時代にも行なわれていたことがうかがえる（木村1997）。

弥生時代になると、壱岐島内の遺跡数が急激に増加する。分布は島内全域に及ぶが、これらの遺跡はいくつかのグループに分けることが可能である（第2図）。武末純一氏によれば、壱岐島内の弥生時代遺跡は、原の辻遺跡を中心とする深江印通寺周辺（幡鉢川下流域）の遺跡群（A群）、車出遺跡を中心とする郷ノ浦柳田触周辺（幡鉢川上流域）の遺跡群（B群）、カラカミ遺跡を中心とする館伏周辺（刈田院川上流）の遺跡群（C群）に分けられるが（武末1983），このほかにも、銅鉢の埋納で知られる天ヶ原遺跡をはじめ丸尾遺跡など、内容については不明な点が多いものの、島北部の遺跡群もD類としてまとめられそうである。A群の原の辻遺跡、C群のカラカミ遺跡については、弥生時代

前期後葉に遺跡の形成が進み、中期から後期にかけて環濠の掘削をおこない、古墳時代前期まで存続するもののその後急激に衰退しており、遺跡の消長がほぼ一致する。B群の車出遺跡からは中期から後期の資料が出土しており、A群・C群の遺跡と比較すると一時期遺跡の形成が遅れる。これについては、同じ轟鉢川水系の原の辻遺跡からの集団分岐によって、遺跡の形成が始まった可能性が指摘されており（宮崎2002）、聚落構造の解明と合わせて今後の検討課題である。これまでの発掘成果から推定される各遺跡の規模は、カラカミ遺跡が5ha、車出遺跡も数haであるのに対して、原の辻遺跡は100haの広がりを持つ。一方で無文土器や三輪系瓦質土器、楽浪系土器など朝鮮半島系の土器が流入している点が特筆される。このことは、弥生時代以前からみられた朝鮮半島との交流が、弥生時代にいたってより活性化したことを探る。朝鮮半島系土器の流入と歩調を合わせるように、各種鉄製品や青銅器をはじめとする朝鮮半島系・中国系の遺物が各遺跡で出土している。まさに、魏志倭人伝が伝える「南北市羅」の実体を如実に反映しているといえるであろう。

古墳時代には、現



第2図 呂岐島内弥生時代主要遺跡分布図

在確認されているだけで256基の古墳が存在する。この数は、長崎県全体の約半数に相当し、いかに集中して壱岐島内に古墳が築かれたかがうかがい知れる。寛保2年(1742)の『壱岐国統風土記』には、338基の古墳の存在が知られており、実際にはより多くの古墳が存在していたことは確実である。

これらの古墳の特徴としては、①大半が円墳であること、②分布が島中央部の国分地区に集中すること、③築造時期が6世紀後半から7世紀初頭に集中すること等があげられる(横山1990)。③については、現在確認できる最古の古墳は5世紀後半の芦辺町大塚山古墳であるが、初期の古墳群が深江田原を中心とする平野を中心に分布しており、断続ははさむものの、原の辻遺跡の系譜につながる有力集団が被葬者である可能性が強い。一方で、6世紀後半には分布の中心が国分地域に移り、古墳の密度や墳丘の規模、副葬品の内容を比較しても、それ以前の古墳とは大きな隔たりがある。また、墳形においても、笠塚古墳や鬼の窟古墳・掛木古墳などの大型円墳のはか、双六古墳や対馬塚古墳など大型の前方後円墳が築かれるのもこの時期の大きな特徴である。これらの古墳には、共通して長大な横穴式石室が伴っており、いずれの石室も玄室と複数の前室からなる複室構造で、平面プランや規模においても共通する点が多い。副葬品では、笠塚古墳から金銅製の杏葉をはじめとする馬具や帶金具、双六古墳からは車輪頭大刀柄頭・主頭大刀柄頭・金銅製八雲鈔などの武器のはか、金銅製鞍金具・辻金具などの馬具、空玉やトランボ玉などの装飾品が出土している。これらの副葬の入手にあたっては、畿内の勢力との結びつきが不可欠であったと考えられ、実際にカジヤバ古墳では畿内系の上師器も出土している。壱岐における古墳の築造と副葬品のあり方からは、朝鮮半島に通じるルートとして、畿内勢力によって壱岐が重要視されていたことがうかがえる。一方で、双六古墳からは新羅土器も出土しており、弥生時代と同様、朝鮮半島との結びつきも深かったようである。

古代には、古墳の集中していた国分地区に壱岐鶴分寺が建立される。『延喜式』によれば、壱岐直という豪族の氏寺を国分寺に転用したとの記述があり、また、考古学的にも古墳の集中する国分地区に国分寺が建立されたことは、その背景に古墳時代以降この地をおさめた地方豪族の影響が読みとれる。また、鶴分寺出土の軒丸瓦は平城宮と同範であることが明らかになり、地方豪族を基盤として成立しつつも、中央との結びつきの強さもうかがえる。このほか、原の辻遺跡では古代の道路状造構のほか、木簡や初期貿易陶磁が出土し、近隣の椿遺跡からも建物跡のはか、7世紀後半から8世紀代の瓦・石帯が出土しており、壱岐の南東部にも官衙や寺院などの公的な施設が存在した可能性が強い。

以上のように、壱岐の歴史は、地勢的特性から朝鮮半島や中国大陸との結びつきが一貫して存続するとともに、国内の勢力からも時代によって意味合いを変えつつ重要視されていたことがうかがえる。

【参考文献】

- ・唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆編1992『日本の地質9 九州地方』共立出版
- ・木村幾多郎1997『交易のはじまり』『考古学による日本歴史』10対外交渉 雄山閣
- ・武末純一1983『壱岐・対馬』『三世紀の考古学』下巻三世紀の日本列島 学生社
- ・宮崎貴夫2002『原の辻遺跡における歴史的契機について』『西海考古』第4号
- ・横山順1990『壱岐の古代と考古学』『海と列島文化』第3巻玄界灘の島々 小学館

II. 調査の経緯

平成5年度に実施した圃場整備事業に伴う緊急発掘調査で台地東側部分で弥生時代中期から後期の環濠3条の他、様々な遺構・遺物が確認された。その結果とそれまでの調査結果を踏まえて原の辻遺跡は旧石器時代から中世に至る複合遺跡で、中でも弥生時代前末期から古墳時代初頭にかけて形成された大規模多重環濠集落であることが明らかになった。また範囲確認調査により遺跡中央の台地を複数の濠が取り囲んでいることもわかった。

平成6年度の調査は、遺構の北側一帯の緊急発掘調査を実施し、環濠等の遺構を検出した。また、台地頂上部の調査で大型の建物跡と思われる柱穴群や火を使った跡などが確認され、この場所に祭儀場跡があったこともわかった。そしてその南側では弥生時代中期に掘られた弥生時代後半から古墳時代初頭に埋没した濠2条を確認した。この濠は台地を取り囲む環濠とは違い、環濠内部を区画する性格のものと思われる。また、原の辻遺跡調査指導委員会において、これまでの調査結果に検討が加えられた結果、当該遺跡が「魏志倭人伝」中の「一支國」の王都として特定された。

平成8年度の調査では東アジアを含めても最古となる弥生時代中期の船着き場跡が検出された。台地西側の船着き場跡には幡鉢川の支流が流れ込んでいたと考えられ、この発見によって海上交易の拠点として注目を集めた。実際、出土遺物にも朝鮮半島系の土器や大陸製の舶載遺物が多いこと、国内的にも北部九州にとどまらず瀬戸内・山陰・近畿など多くの土器が搬入されている。この点でも、当時の南北市様子が十分に伺える。

平成10年度からの特定調査事業は船着き場周辺の状況を明らかにすることを目的に、遺跡の北西低地部を中心に調査を行った。その結果、弥生時代中期の環濠を台地下の北西低地部で初めて確認するとともに、複雑に中継し合う弥生時代後期の濠も確認した。また平成11年度には、弥生時代中期前半の環濠2条が確認された。濠の出土遺物等から、弥生時代前末期に居住が始まったことは過去の調査で明らかであるが、弥生時代中期前半、須玖I式土器占段階の時期に多重環濠が成立し遺跡の中央に位置する台地を中心に本格的な拠点集落として整備されたことが明らかになった。さらに、平成10年度の調査で確認した弥生時代中期の濠も含めてこれらの環濠が旧河道の手前で止まり、台地西線を流れる旧河道が天然の要害として途切れた環濠を補完していたこともわかつてき。平成12年度の調査では、11年度に確認した弥生時代後期の濠が、他と同様に途中で止まり、北西低地部が濠が縱横に張り巡らされている状況が明らかになった。このように3年間の調査で北西低地部の様子はかなりの部分が明らかになった。

そこで本年度は原の辻遺跡の中核、祭儀場跡の西側部分、遺跡の南西低地部の状況を面的に明らかにするために、昨年調査した農道に並行に1,100m²の調査区を設定し、平成13年5月14日から平成13年10月3日の期間、長崎県教育委員会を主体に、原の辻遺跡調査事務所が担当して調査を行った。

また原の辻遺跡調査事務所主体の国庫補助事業の芦辺町域分は本調査区の北側に650m²、さらに原の辻遺跡保存等協議会主体の調査はさらにその外側に1,100m²を設定した。



第3図 原の辻遺跡概要図 (1/8000)

III. 調査

1. 調査概要 (第4図, 第5図, 第6図)

調査区は平成7年度の調査で祭儀場跡と見られる柱穴群が確認された台地頂上部から西に約100m離れた、遺跡西側低地部(現水田面)の非農用地に、南北55m、東西20m、合計1,100m²を設定した。調査区は、北側から北区(300m²)・中央区(500m²)・南区(300m²)とし、土層ベルトで区分している。

この調査区周辺の調査は過去に幾度か行われ、弥生時代中期から古墳時代初頭の溝や濠、旧河道跡、弥生時代中期から後期の掘立柱建物跡、弥生時代中期から古墳時代の水田跡など確認されていたが、広い所でも幅5mの調査でその全容は不明瞭であった。

今年度の調査区内から過去の範囲確認調査のトレンチを北区で2箇所、南区で3箇所、合計5箇所確認した。範囲確認調査の結果、ここには2条の濠が想定されていた。祭儀場という集落の中核部からわずかしか離れていない場所だけに、幾重かの濠が掘られていることは容易に想像がつくが、その形状・時期等については不明な点が多く、今回の調査である程度明らかにすることを目的とした。また今年度の調査区の西側に約11m離れた昨年度の農道・県道調査では、南東から北西方向に伸びる弥生時代中期から古墳時代前期までの溝3条を確認していた。しかし、今回の調査では、この溝に関連する遺構を検出することはできなかった。

調査区は遺跡中央台地の西側裾部にあたり、緩やかに傾斜していた台地東側と比べ、傾斜は比較的急であったと思われる。しかし度重なる水田化により傾斜地は大きく削平を受けたようで、調査区の東崖際は現在の耕作面から約20cmで弥生時代の遺構を検出した。また中央区・南区の東側半分は遺構の上面がかなり削平されていたが、北区は舌状の台地のくびれた部分に当たり、比較的削平をうけていなかった。

中央区から南区では、西側に向かって人為的な掘り込みがみられるとともに、その掘り込みに沿うような形で杭列を確認した。出土遺物の状況から近世以降の水田化によるものと思われる。

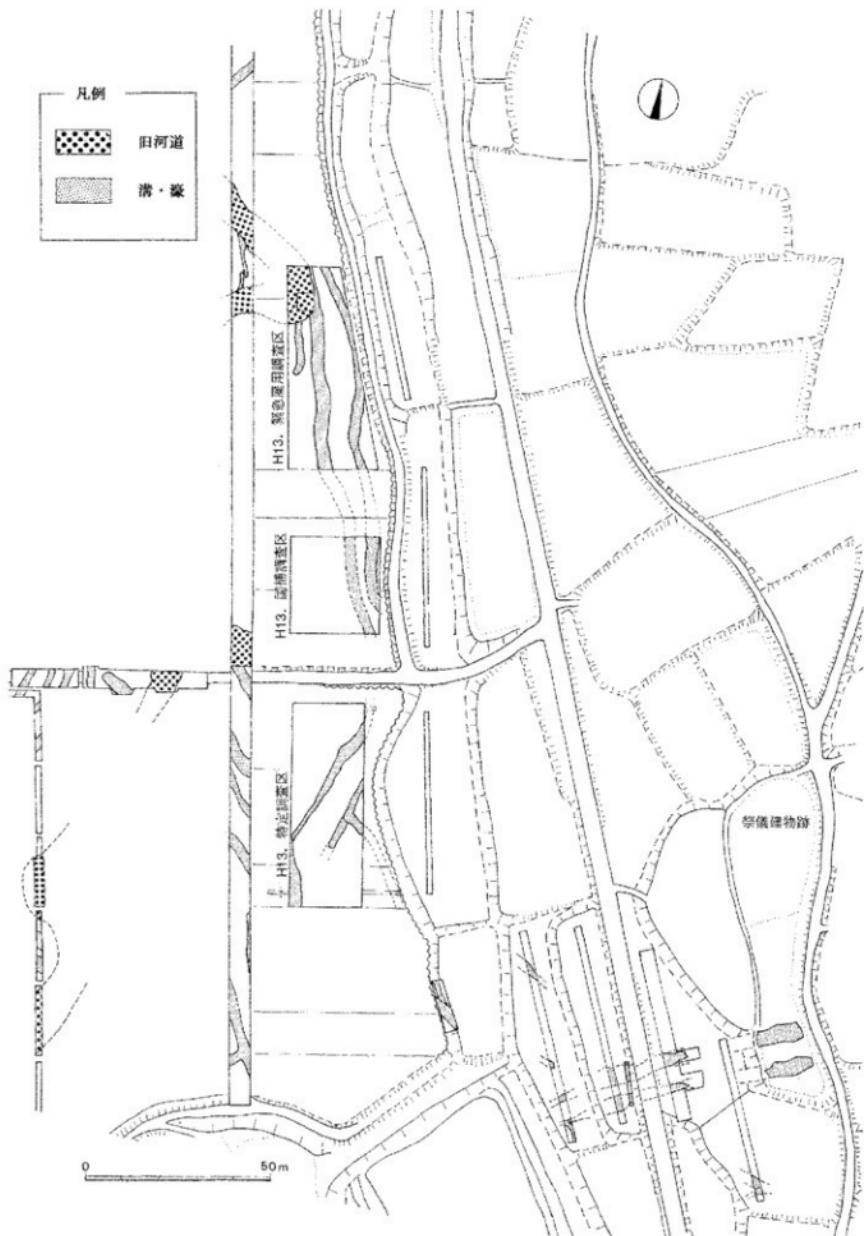
また中央区北西隅から北区にかけて自然な落ち込みも見られ、その中に大量の礫が投棄してある状況が確認された。堆積した黒褐色の土層は他に比べて遺物が少なく、古墳時代の鍛造鉄斧が出土した。また下の灰白色の地山層と混ざり合った状況も確認されたことから、古墳時代以降の水田化にあたって、耕地を平らにするために落ち込み部分に礫を投げ込んだとも考えられる。また、この状況は特定調査区の北側に設定した国庫補助事業調査区でも確認されている。

2. 土層 (第7図, 第8図, 第23図, 第38図)

基本土層は若干の色の違いはあるものの、各区で共通し大きく4層に分けられる。



第4図 調査区位置図 (1/2,500, 約1/10,000)



第5図 台地西侧主要遺構配置図

1層は表土、現在の水田面にあたる。2層は明黄褐色上で、近世の染付け陶器が出土しているので、近世の水田面の下面と思われる。3a層・3b層は中世の青磁・白磁・須恵器が出土している。特に南区のSD2の直上の3b層には大量の礫が投棄されていた。この層からは製作者銘の入った刀子が出土した。また3c・3d層からは須恵器や鍛造鉄斧が出土しているが、他と比較すると出土遺物の量が極端に少なくなることから、古墳時代の水田層と考えられる。4層は地山で、南区では青灰色粘質土・中央区では灰白色粘質土・北区では灰オリーブ色粘質土であった。この層を掘り込んで弥生時代の遺構が確認された。

遺物の取り上げ層位と土層の関係は、SD1は取り上げ層位Iが第8図(最上図)の1に層位IIが2・3に層位IIIが4・5に層位IVが6に相当する。SD2は取り上げ層位Iが第23図(最下図)の4にI下が5に相当し、II層が8・III層が9に相当する。SD3は取り上げ層位Iが第8図(最下図)の1~7に相当し、層位IIが8・9に、層位IIIが10・11に相当する。SD4は溝が浅かったため土層の大きな変化は見られず、すべてI層で取り上げた。

3. 遺構・遺物

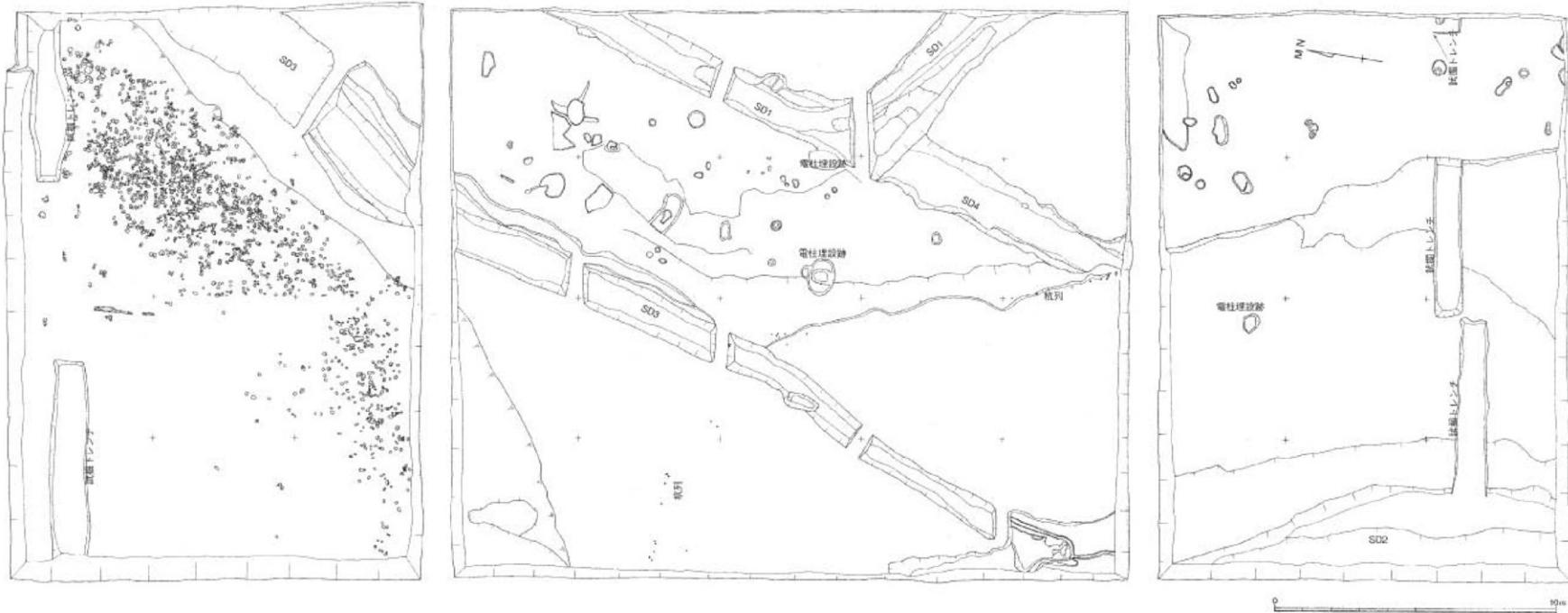
● SD-1 (第6図、第9図、第10図)

中央区東側で長さ約20m、最大幅2.8mを確認した。台地の張り出し部分に合わせたかのように北東から南西方向に延びていた溝が南東方向に大きく曲がっていく。耕作土直下で検出され、遺構の上面はかなり削平されている。現存する部分で溝の北側部分は断面U字型で最深が約60cm、南側部分はU字型の溝の中央部が更に深く掘り込まれ最深約60cmを測る。掘り込まれた部分には上器が詰まっていた。また大きく曲がった部分の外側は一段深くなり深さ約80cmを測る。土層を観察すると、まずSD4が北東から南西方向に直線的に掘られ、それが埋まった後、SD1が掘り直されたようである。直線的であった溝がほぼ直角に曲げられた理由として、遺跡中枢部の祭儀場跡の西側傾斜地の環濠の張り出し部分に物見やぐら的な施設の存在を想定したが、この周辺は地山まで大幅に削平を受けていて、柱穴等を確認できなかった。

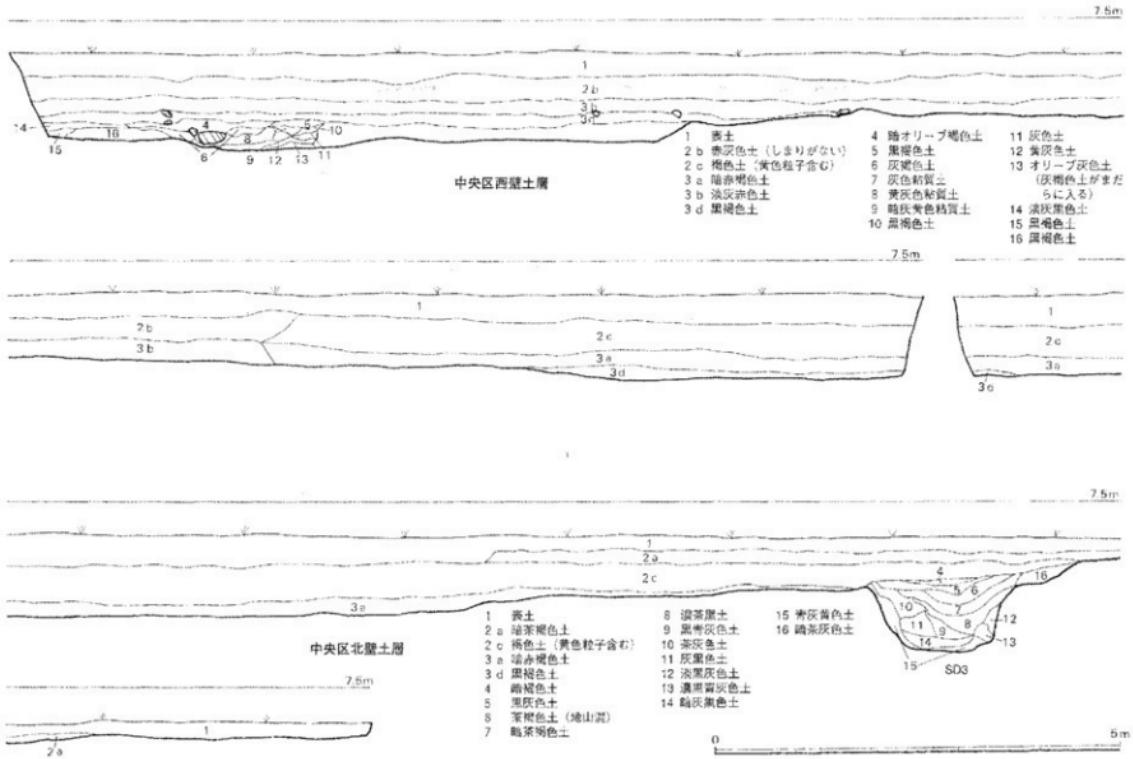
覆土は大きく4層に分けられ、I層は褐色土で、遺物はほとんど見られなかった。II層は黒色土で、大量の土器が破棄されていた。出土遺物の時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものが多く見られ、榮浪系土器も含まれていた。III層は暗灰褐色土で、下層には炭化物の層が見られた。弥生時代後期初頭から弥生時代後期後半の土器が多く見られた。IV層は灰茶褐色土で、弥生時代後期前半の土器が見られたが、II・III層に比べれば遺物の量は少なかった。

平成5年度の範囲確認調査で、今年度調査区南端の東側にこの溝の延長が確認されている。溝は南南東の方向へ延び、平成4年度の芦辺町の調査で確認された2号・3号溝の方向に向かっていく。この溝は原の辻の台地を取り巻く多重環濠の内濠にあたると思われる。

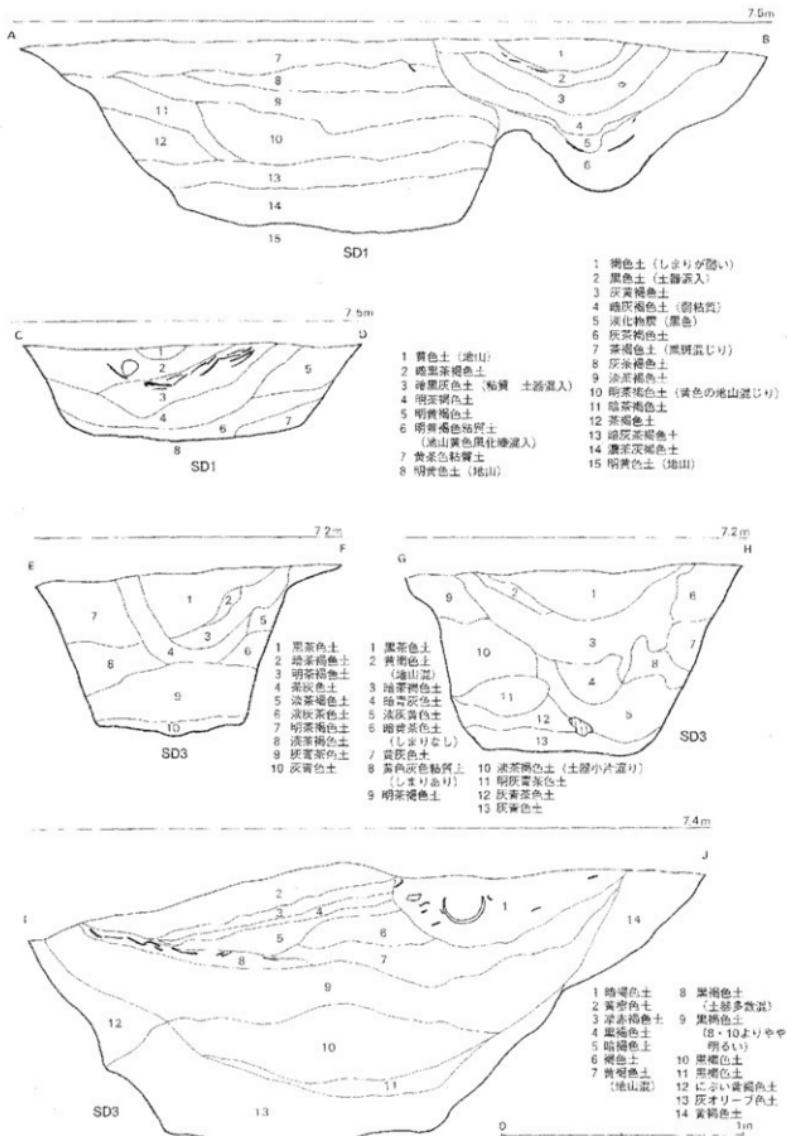
SD-1 II層土器



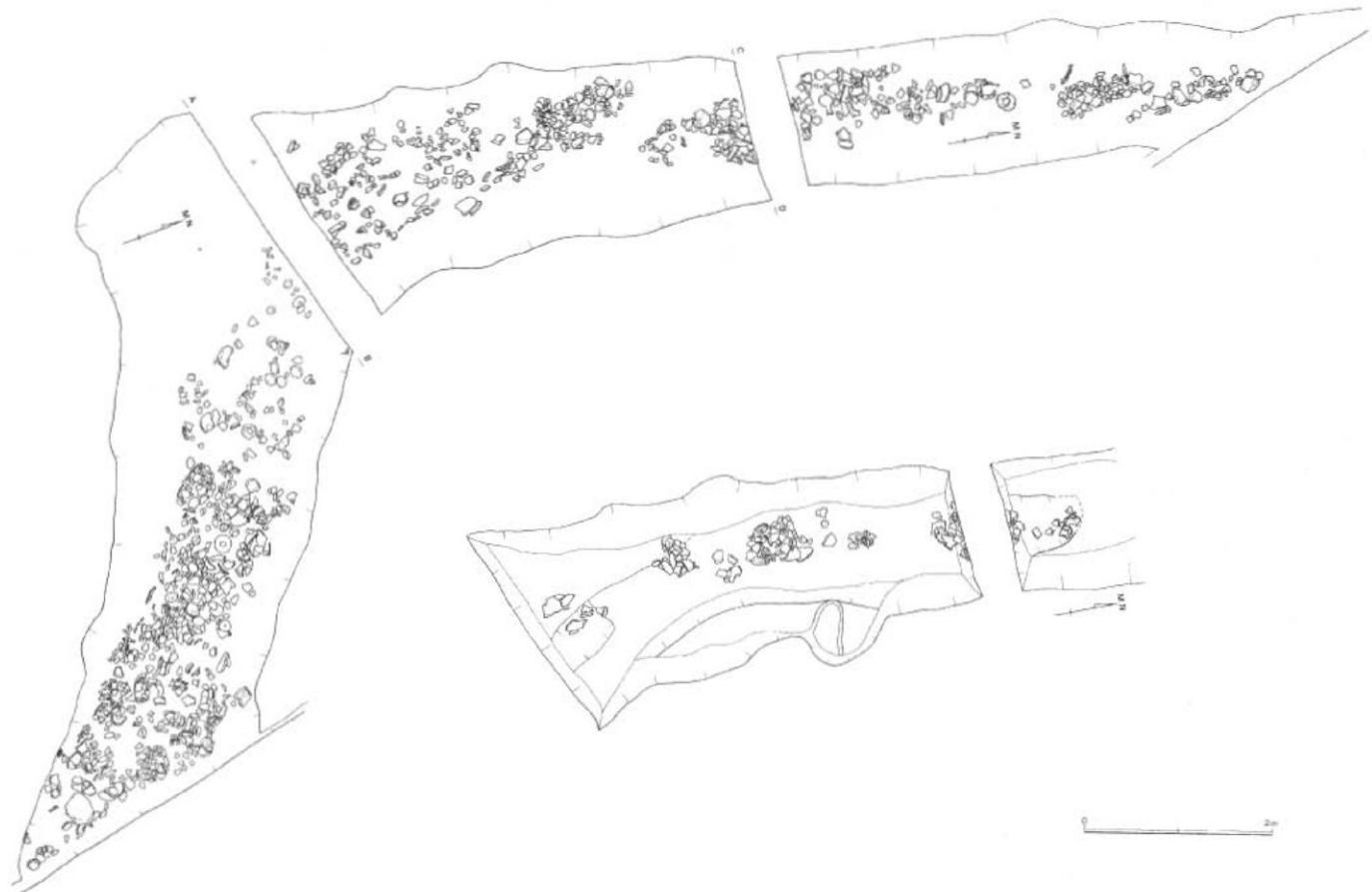
第6図 造景配面図 (1/120)



第7図 中央区西壁・北壁土層図 (1/60)



第8図 SD1・SD3 土層図 (1/20)



第9図 SD1 I層(上図)・II層(下図)遺物出土状況(1/40)



第10図 SD 1 II層・III層 遺物出土状況 (1/40)

変形土器類（第11図、第12図 1~12）

1は弥生時代中期の須玖II式土器で鶴形口縁部が垂下気味となることを特徴とする。2は口縁部を平坦となす中期後半の遺物である。3~12はくの字形口縁をなす弥生時代後期の資料である。

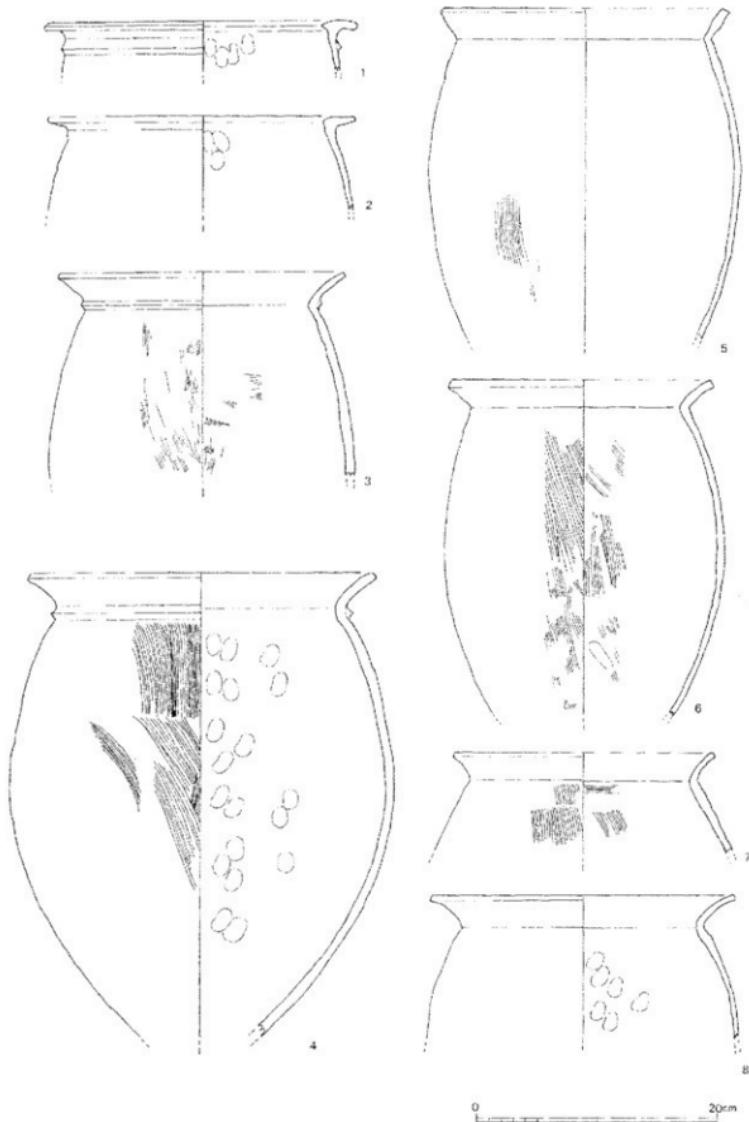
3は頸部付け根に一条の凸帯を付し、頸部から口縁部へ大きく外反する。口縁端部は平坦となす。4も同様に頸部に一条の凸帯を付している。頸部から口縁部にかけ大きく外反し、端部はやや丸味を持つ。土器の姿形は内面は指押さえで外面は刷毛目による器面調整をおこなっている。5は頸部がしまり、やや厚味のある口縁部がくの字に立ち上がり端部は平坦となす。外面にわずかに刷毛目整形が残る。6は頸部が縮まり口縁部は大きく外反する。胴部は長くなり最大径は胴部の中位にある。刷毛目調整が内外面に観察される。7は頸部で縮まり、口縁部がやや薄手となって外反する。8は頸部が縮まり、薄での口縁部が大きく外反する。9は頸部が縮まり口縁部がくの字をなす。内外面に刷毛目調整のあとを残す。10は頸部から口縁部が直線的に伸び端部をやや搞み上げた整形をとる。11は頸部で縮まり、大きく口縁部が外反する。12は、如意形口縁を思わせる要部の脛曲をなす。口縁端部はやや丸味をもつ。

変形土器類（第12図、第13図 13~25）

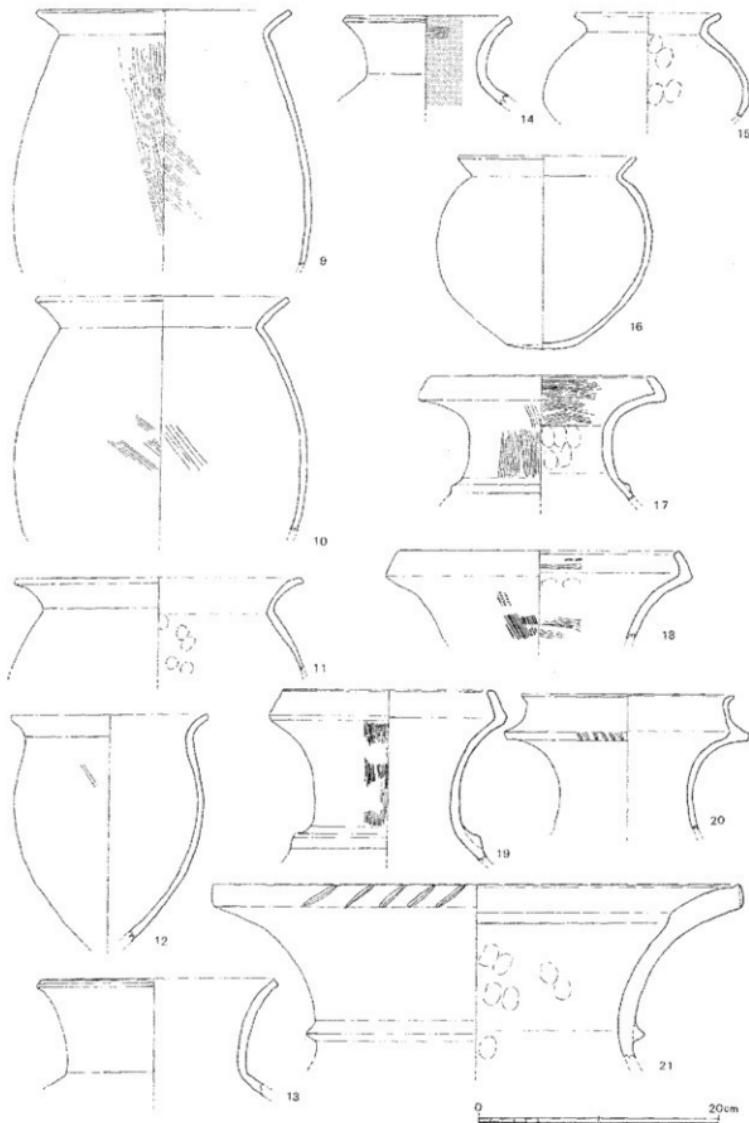
13は頸部から直立して口縁部中位で外反する。口縁端部に一条の沈線を巡らしている。14は、頸部の立ち上がりから大きく外反する。15は頸部が縮まり口縁部の立ち上がり中位で外反する。内面に指押さえ整形の跡が付く。16は凸レンズ状の底部から、胴部やや上位に最大径をもって頸部に移行する。頸部は縮まり、直線的な口縁部へ移行する。口縁端部は丸味をもつ。17は弥生中期の袋状口縁から脱した弥生後期の複合口縁の壺である。頸部下端に断面三角形の凸帯を有して立ち上がり、口縁部で大きく外反し、反転して口縁端部へ移行する。口縁部にやや丸味をもち、端部は平坦となす。18は口縁部の反転がやや直立気味となる。19は頸部下端に断面三角形の凸帯を付し、太い頸部が外反し口縁部は反転して直線的に上方へ移行する。口縁端部は平坦となす。20は頸部上端に刻目を付け、口縁端部がS状に脣曲する。21は大型壺で頸部に一条の三角形凸帯と口唇部に斜位の刻目を有する。内面口縁の下端に段ができる、内面整形に指押さえ痕がのこる。22は小型の壺頸で底部が平坦からやや上げ底気味となる。23は頸部が縮まり、口縁部が内済気味に伸びる。口縁端部は丸く納める。24は長頸の姿頃である。底部はほぼ平坦となし、胴部やや上位に最大径がある。頸部で縮まり口縁部は直線的に外方へ伸びる。口縁端部は平坦となす。25はレンズ状の作りをして安定感にかける。胴部中位に最大径がある。

鉢形土器類（第13図 26~31）

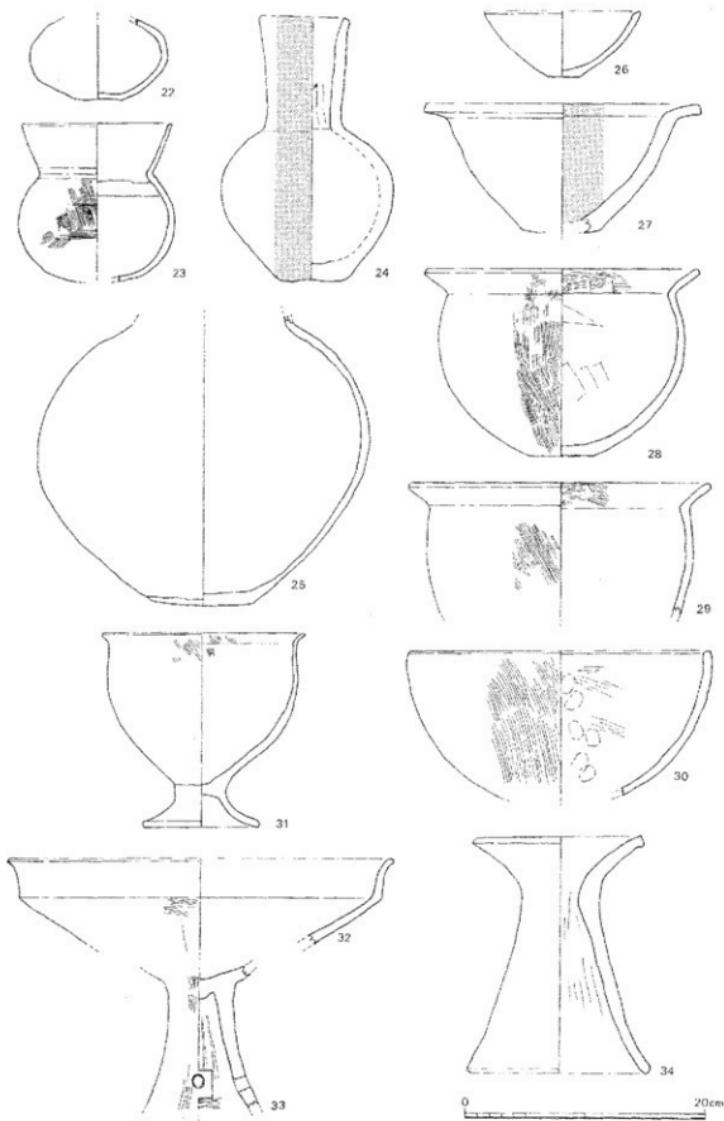
26は小型の鉢形土器。底部はほぼ平坦とし、内済気味に口縁部へ伸びる。口縁端部はやや尖り気味となる。27は胴部から内済して口縁部に移行する。口縁部は平坦からやや立ち気味となる。28は底部がやや上げ底ぎみとなし、胴部は丸く、頸部で縮まり口縁部は直線的に外方へ伸びる。29は頸部で縮まり口縁部が直線的に外方へ伸びる。内面は口縁部を刷毛目調整し、以下はナテ整形としている。また、外面は刷毛目調整としている。30は内済する胴部から直接口縁部にいたる鉢。口縁端部は丸く納



第11図 SD 1 II層出土土器



第12図 SD 1 Ⅱ層出土土器



第13図 S D 1 II層出土土器

める。外面は刷毛目調整し、内面の整形は指押さえ後に刷毛目調整としている。31は台付鉢類である。脚は外反した裾部の立ち上がりに体部は、内湾器形から胴部中位で直立し、口縁部で外反する。

高坏類（第13図 32・33）

32は高坏の坏部で立ち上がりは直線的に伸びて口縁部で外反する。口縁端部は丸く納める。33は高坏の脚で、上部の坏部と裾部を欠損する。内面はナデと裾部辺を刷毛目で調整し、外面は刷毛目調整としている。

器台類（第13図、第14図 34～39）

34は器台で裾部から直線的に内径し、頸部で厚味を持って屈曲し口縁部へ移行する。口唇部は平坦とする。35は内面頸部に明瞭な突きだしのある器台。裾部端を丸く納め上位で直立し頸部から口縁部外反する。外面は刷毛目整形を行う。36は口縁部に厚味をもつ器台。頸部で強く屈曲する。37は中位から器内に厚味が増してくる。頸部で屈曲し、口縁端部は丸く納める。38は裾部と口縁部径の大きさが約1／2程度の比率となる器台。器形は裾部から外反しながら口縁部に移行する。

39は杏形容器で、中心部に径4cmの円孔を製作当初から設けている。

舶載品（第14図 40～43）

40は口縁部に断面方形の粘土紐を貼り付け、頸部上端から緩やかに外反し下方へ移行する。器面は内外面ともに指整形後に刷毛目調整を行っている。器形状は樂浪系を意識した遺物と考えられる。41は口縁部に厚味をもった平坦口縁を製作している。整形は辘轳使用によって行っており、辘轳痕が胴部にのこる。非常に薄い器肉で2mm内外とし、色調は灰色を呈する。42は41と同様の鉢形瓦質上器である。辘轳整形痕が明瞭に付く。43は瓦質上器で底部中央がやや上げ底ぎみとなり、明瞭な辘轳痕を残す。41～43はいずれも樂浪系の遺物である。

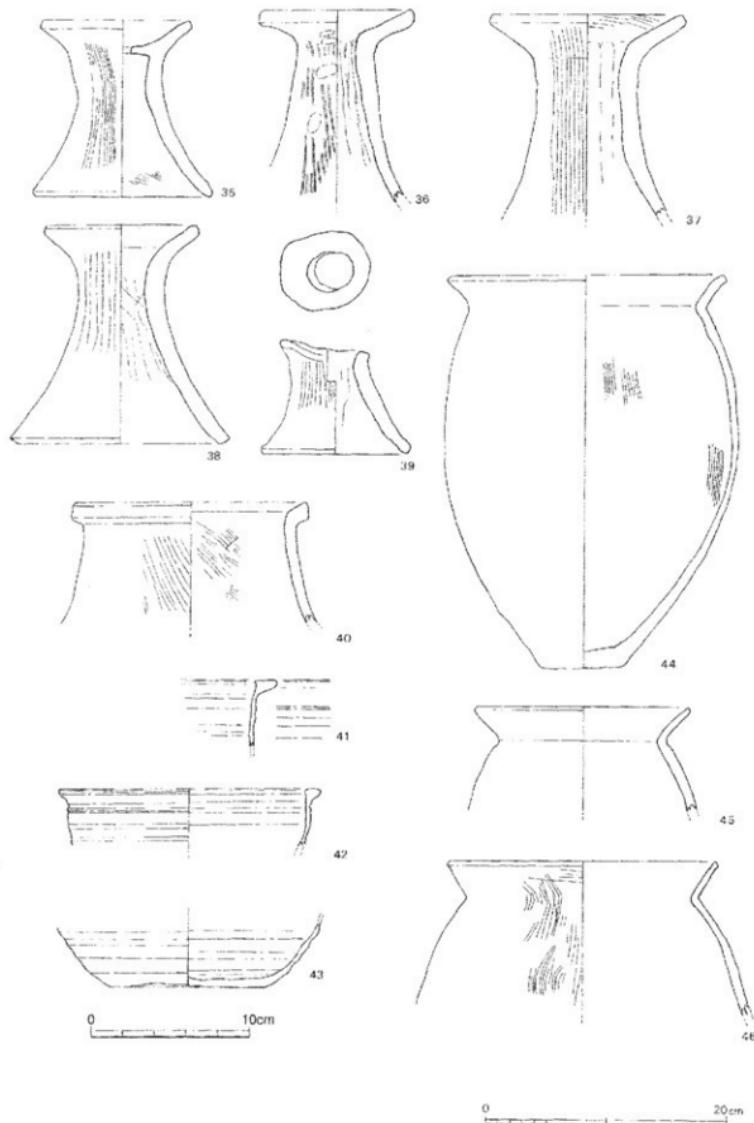
S D - I III層土器

壺形上器類（第14図 44～46）

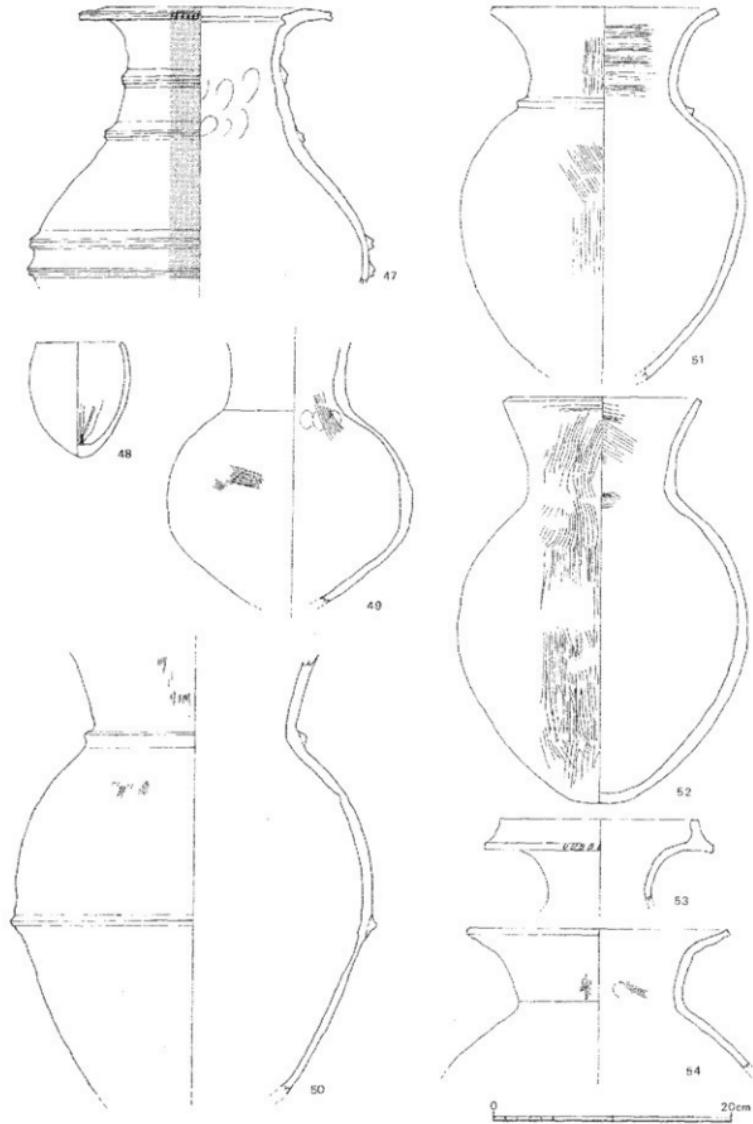
44はくの字口縁の壺である。底部がレンズ状に丸味を帯び始めている。胴部中位から上位部に最大径があり、頸部で締まり口縁部は頸部から直線的に外反する。45は口縁部の中位からやや屈曲して伸びる。46は頸部で締まり、口縁両端部に厚味をもつ。

壺形上器類（第15図 47～54）

47は弥生中期の丹塗り壺。肩部に丸味をもって頸部に移行し、口縁部は内面端が突きだした動形口縁で垂下気味となっている。M字凸筋が肩部・頸部にそれぞれ二条付している。口唇部は刻みと沈線を巡らしている。48は尖り底の底部を有する小壺、尖り底から内湾して口縁部に移行する。口縁端部は丸く納める。49は胴部中位に最大径のある壺。頸部の器肉が厚く外反気味に口縁部へ伸びる。50は頸部中位と頸部に断面三角形の凸筋をそれぞれ一条巡らす土器。51は頸部に断面三角形の凸筋を一条巡らす土器。レンズ状の底部になるとと思われるが消失している。形状は、胴部の上位に最大径があり頸部で締まり、頸部から外反しながら口縁部に移行する。口縁部の内面は横位の刷毛と外反胴部に斜位の刷毛目を観察する。52はレンズ状の底部をなし、胴部中位上に最大径をもつ壺。頸部で締ま



第14図 SD 1 II・III層出土土器 (40~43は1/3, その外は1/4)



第15図 SD 1 Ⅲ層出土土器

直線的に口縁部が外反して伸びる。口縁端部は平坦としている。53は二重口縁壺。口縁部が直立し端部は平坦としている。頸部上端に刻目を付けている。54は頸部から外傾気味に立ち上がり口縁部でさらに外反する器形となる。口縁端部は平坦としている。

器台類（第17図 55~60）

55は頸部で屈曲する器台。肩曲部が上位にあり口縁端部はコ字状となし裾部端は丸味をもつ。56は屈曲部が上位にあり、裾部半位から頸部にかけて器内に厚味を増す。57は裾部から頸部に内傾し上位で器内に厚味を増し、外反して口縁部へ移行する。58は裾部に膨らみをもって内傾し脚部中位で直立し頸部上位で外反しだす。59は頸部に厚味をもち口縁部は薄手にし、口縁端部は摘み上げ整形の形状となる。60は裾部端に厚味をもって立ち上がり外反して口縁部を丸く納める。

舶載品（第17図 61）

61は平底の瓦質土器。底部からの立ち上がり内湾して胴部上位で直線的に立ち口縁部へ移行する。口縁部は平坦となしている。軸縫整形痕が明瞭に残る。

SD-1 IV層土器

兜形土器類（第17図 62~64）

62は胴部上位に最大径のある土器。器形は胴部の丸味から頸部で縮まり直線的に口縁部へ移行する。

63は頸部で縮まり口縁部が直線的に伸びる。口縁端部がやや摘み上げ整形の形状に近い。64は平底の底部から胴部上位で最大径となり、頸部で縮まり直線的に口縁部へ移行する。口縁端部は丸く納める。

SD-1 I層石器（第16図 1）

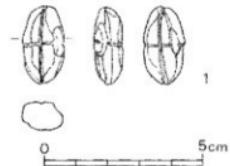
1は頁岩製の石錐。正面表面を縱位と横位に切り込みを入れて組掛かりを作出し、紐が取れないよう加工をしている。

また正面の上面は平坦に仕上げている。

SD-1 II層石器（第18図 2~13）

2は仕上刃用の砥石。きめの細かい粒子の砂岩を用いている。図の左側面のみがスペースに研ぎ出されていてその他は未使用である。3は正面と右側面を使用した砂岩製の楕石。

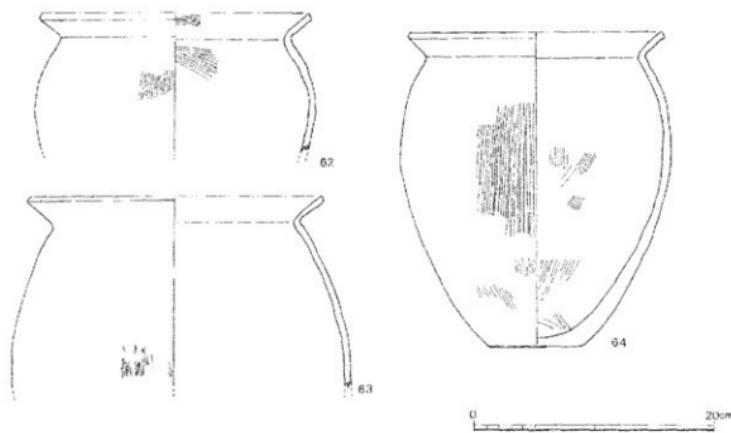
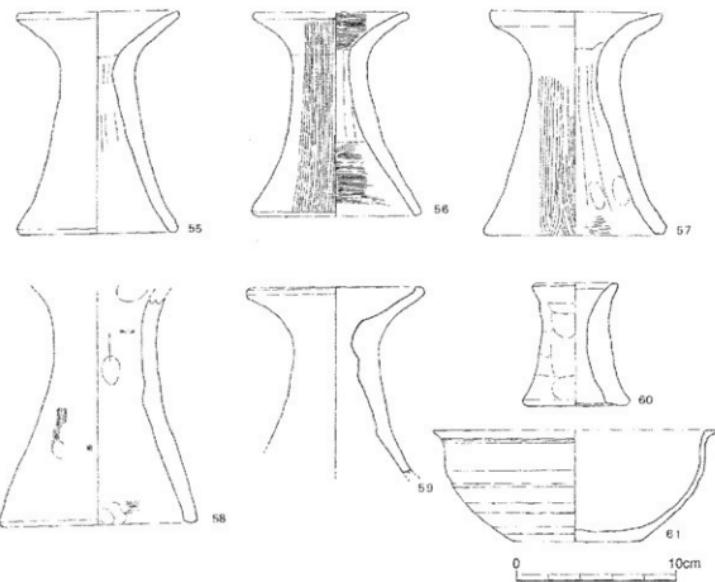
右側面の使用頻度がたかく外溝し中央が鞍部となっている。砂岩の粒子はやや粗い。4は正面を凹石として使用し裏面はスリ石として用いている。玄武岩製。5は正面を凹石、裏面を叩き石として使用している。玄武岩製。6は正面を凹石として使用する。玄武岩製。7は正面及び上下端・左右側面を叩き石として使用。8は正面をスリ石として使用し、裏面を叩き石として使用している。9は正面の中央が鞍部となっているスリ石。裏面は敲打痕があり叩き石として使用したと考えられる。10は正面を叩き石として使用し、裏面をスリ石として使用している。11は正面をスリ石として使用している。12は正面を凹石として使用し、裏面は叩き石として使用している。13は取手付きの支脚石。火を受けているためか表面が赤味を帯びている。下部は接地面を考慮して平坦に作り、正面・側面・取手部分は入念な整状工具による加工を施している。上部は欠損している。



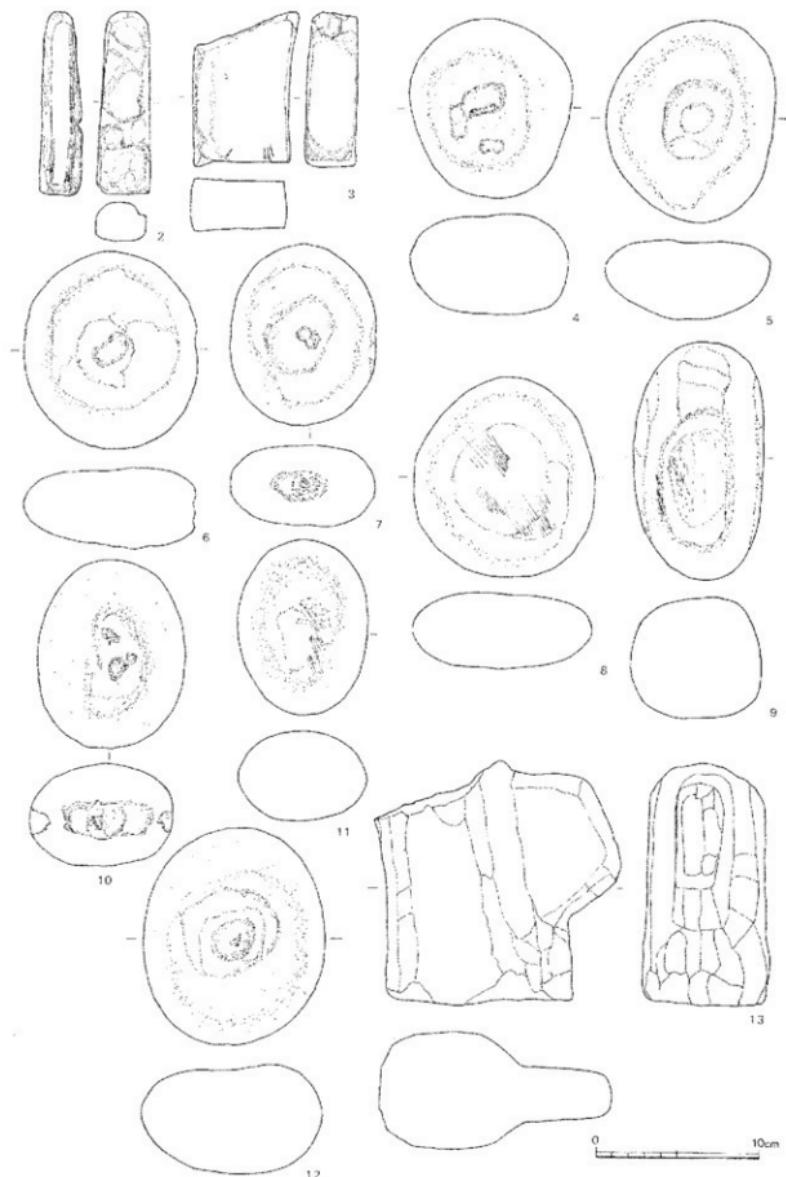
第16図 SD-1 I層出土石器



第6図 造構配置図 (1/120)



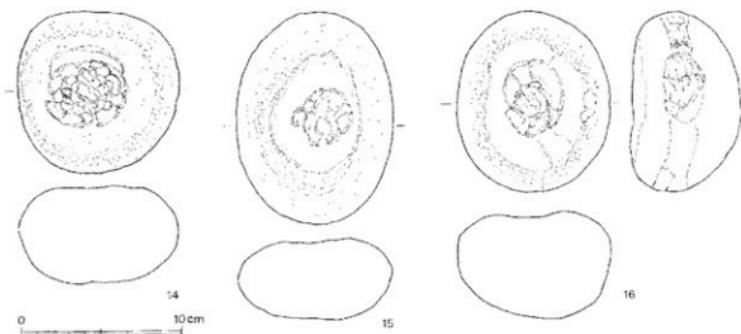
第17図 SD 1 M層 (61は1/3, その外は1/4)



第18図 SD 1 II層出土石器

SD-1 III層石器 (第19図 14~16)

14は正裏面ともに叩きによる凹痕が観察される。15は正面の中央に約3.9cmの凹が残り、裏面は叩き石として使用している。16は正面中央部を凹石として使用し、側面全周を叩き石として使用している。



第19図 SD-1 III層出土石器

●SD-2 (第6図, 第20図, 第21図)

南区西壁にそって溝の東岸を長さ約13m確認した。南区北側で溝は北西の方向にゆるやかにカーブしていく。今年度の調査で溝の幅は確認できなかったが、平成5年度の範囲確認調査の結果ではこの溝の幅は約6mである。溝は東岸からゆるやかに傾斜し、途中で一段深くなる。確認できたところで深さ約1mを測る。覆土は大きく3層に分けられ、I層は上面が淡灰黒色土で比較的遺物は少なかった。1層下面は黒色土で上に布留式土器・土師器などの古墳時代初期の土器が出土した。また切子未製品や鍛造鉄斧も出土した。II層は黒色砂質土で弥生時代終末期から古墳時代前期の土器に混じって三輪系瓦質土器や人面石も出土した。III層は茶褐色の腐植土で、流木に混じって弥生時代後期中期から弥生時代終末の土器が出土している。遺物の出土状況から古墳時代前期にこの溝は埋まったと思われる。また、遺物状況・覆土の堆積状況からはこの溝を濠とすべきか旧河道とすべきか判然とせず、その点の判断は今後の調査の結果にゆだねたい。しかし、大量の土器が破棄されている状況から、外濠としての機能を持っていた可能性も何える。

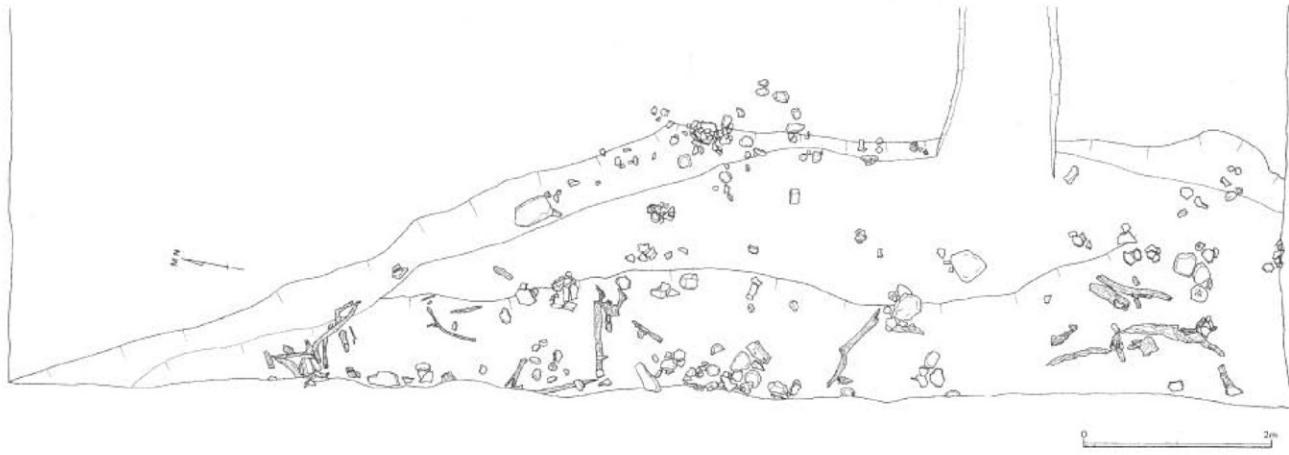
SD-2 I層下土器

臺形上器類 (第24図 1~6)

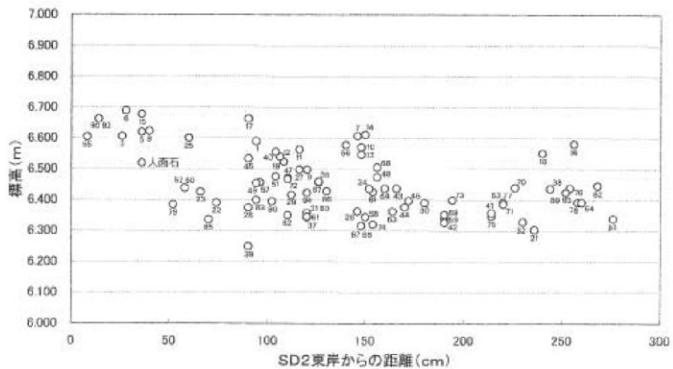
1は胴部の中位から上位にかけて最大径のある土器。頭部から口縁が外反し、端部は丸く納める。器向は内外面共に刷毛目の整形を施す。2は胴部の上位に最大径があり、頭部で繋まり口縁部は直線



第208 SD 2 1層(上图)・2層(下图)遺物出土状況(1/40)

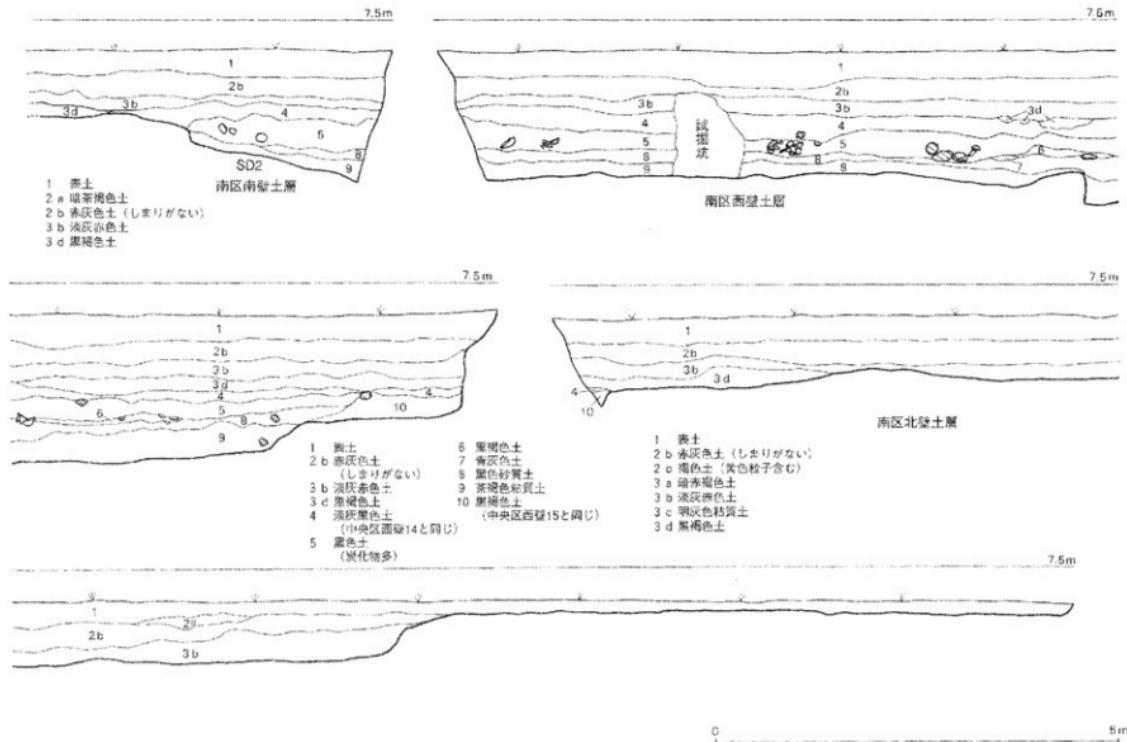


第21図 SD2 Ⅲ層 遺物出土状況



※図22中の番号はP35表2中報告書番号に対応。

第22図 南区 SD2 報告書掲載遺物 出土状況



第23図 南区南壁・西壁・北壁 土層図 (1/60)

中央区 SD 1

取上 部位	P番号	年令 性別	レベル	取上 部位	F番号	横行番 号	レベル	取上 部位	P番号	年令 性別	横行番 号	レベル
1	7,149		54		7,271	101	45	7,002	151	2	7,048	
2	7,140		52		7,252	102		6,928	152		7,020	
3	22	7,058	53	29	7,285	103		6,904	153		7,035	
4	30	7,122	51		7,168	104	49	6,929	154		7,122	
5		7,015	56		7,254	105	58	7,027	155	46	7,165	
6		7,140	56	18	7,272	106		6,938	156	53	7,130	
7	16	7,152	57		7,424	107	51	7,116	157		7,165	
8	37	7,130	58		7,393	108		7,012	158		7,055	
9	24	7,203	59	32	7,150	109	57	6,930	159		7,130	
10		7,195	60		7,308	110		6,948	160		7,120	
11		7,108	61		7,374	111		7,006	161		7,150	
12		7,177	62		7,297	112		6,917	162		7,173	
13		7,112	63	28	7,185	113		6,932	163		6,924	
14		7,040	64		7,206	114	62	7,013	164		7,193	
15	36	7,267	65		7,512	115		7,115	165		7,144	
16		7,190	66		7,350	116		7,200	166		7,160	
17	38	7,266	67		7,373	117		7,165	167		7,155	
18	31	6,936	68		7,187	118		6,985	168	63	7,041	
19	25	6,910	69		7,152	119		7,095	169		6,972	
20	15	6,990	70		7,162	120		6,997	170		6,980	
21	20	7,235	71	27	7,411	121		6,963	171		7,000	
22		7,216	72		7,250	122		6,990	172	62	6,989	
23		7,300	73		7,158	123		7,062	173		6,959	
24	50	7,241	74		7,158	124		7,165	174		6,984	
25	25	7,094	75	24	7,242	125		7,190	175		7,085	
26	9	7,190	76	59	7,310	126	25	7,038	176		7,038	
27	15	7,050	77		7,305	127		7,055	177		7,055	
28	4	8,700	78		7,258	128		7,085	178		7,020	
29	6	7,215	79		7,317	129		7,020	179		7,080	
30	21	7,150	80		7,285	130		7,080	180		7,110	
31		7,120	81		7,576	131		7,110	181		7,150	
32	26	7,172	82		7,342	132		7,145	182		7,145	
33	12	7,090	83	24	7,206	133		7,145	183		7,105	
34		8,700	84		7,349	134		7,105	184		7,117	
35	39	7,059	85		7,342	135		7,117	185		7,117	
36	14	7,190	86	33	7,404	136		7,119	186		7,132	
37		7,099	87	5	7,240	137	48	7,136	187		7,136	
38	17	7,109	88		7,390	138		6,965	188		7,027	
39		7,110	89		7,389	139		7,027	189		7,027	
40	13	7,180	90		7,380	140		7,170	190		7,170	
41	3	7,113	91		7,378	141	56	7,190	191		7,190	
42		7,295	92		7,392	142		6,965	192		7,190	
43		7,188	93		7,392	143		7,132	193		7,132	
44	8	7,165	94		7,390	144		6,905	194		7,165	
45	11	7,139	95		7,340	145	47	6,860	195		6,905	
46	7	7,178	96		7,423	146		6,505	196		7,178	
47		7,220	97		7,425	147		7,077	197		7,175	
48	1	7,184	98	19	7,215	148		7,165	198		7,165	
49		7,250	99		7,148	149		6,947	199		7,148	
50	40	7,186	100		7,083	150	44	7,082	200		7,082	

中央区 SD 4

取上 部位	P番号	横行番 号	レベル
		2	7,062
		4	7,319
		7 / 8	7,390
		4	7,409
		5	7,517
		3	7,265
1	7	2 / 5	7,291
	8		7,250
	6	6	7,087
10			7,192
11	1	1	7,275

表1 P番号取りあげ遺物 レベル表①

南区 SD 2

取上 番号	移動番 号	レベル	取上 番号	P番号	移動番 号	レベル	取上 番号	P番号	移動番 号	レベル	取上 番号	P番号	移動番 号	レベル	
1	3	6,695	51	6,501	26	6,571	76	27	6,498	126	6,520	158	6,270		
2	6,573	52	—	6,490	27	6,453	77	80	6,395	127	6,456	149	6,229		
3	6,553	53	—	6,531	28	6,426	78	74	6,320	128	6,415	150	6,554		
4	—	6,519	54	18	6,551	29	6,454	79	6,420	129	6,473	161	6,490		
5	6,507	55	—	6,537	30	6,523	80	42	6,320	130	6,437	162	6,431		
6	6,483	56	—	6,562	31	6,525	81	54	6,391	131	6,626	153	6,543		
7	6,651	57	—	6,531	32	6,456	82	—	6,469	132	6,480	154	6,254		
8	6,562	58	—	6,600	33	6,415	83	—	6,425	133	6,451	155	6,374		
9	6,498	59	12	6,569	34	6,400	84	82	6,446	134	6,518	156	6,626		
10	6,636	60	—	6,610	35	6,347	85	—	6,420	135	64	6,457	—		
11	6,619	61	—	6,626	36	6,347	86	83	77	6,302	136	86	6,428	—	
12	6,467	62	8	6,623	37	63	87	—	6,416	137	6,418	—	—		
13	8,171	63	15	6,677	38	6,397	88	70	6,440	138	6,198	—	—		
14	6,446	64	9	6,689	39	6,496	89	—	6,434	139	6,337	—	—		
15	6,685	65	—	6,638	40	6,470	90	—	6,357	140	6,417	—	—		
16	8,171	66	—	6,620	41	6,328	91	—	6,416	141	87	88	6,316		
17	6,633	67	—	6,597	42	6,414	92	—	6,452	142	6,264	—	—		
18	6,369	68	17	6,663	43	68	93	73	6,346	143	6,242	—	—		
19	6,573	69	—	6,588	44	25	94	—	6,353	144	6,258	—	—		
20	6,665	70	5	6,619	45	49	95	21	6,203	145	6,048	—	—		
21	6,623	71	—	6,622	46	79	96	71	6,386	146	6,370	—	—		
22	6,610	72	—	6,653	47	83	97	—	6,384	147	6,272	—	—		
23	6,584	73	—	6,663	48	67	98	41	6,368	148	6,204	—	—		
24	6,561	74	—	6,760	49	49	99	—	6,450	149	6,280	—	—		
25	11	6,565	75	—	6,642	50	50	100	69	6,352	150	6,380	—	—	
26	6,638	—	—	6,377	51	6,422	101	—	6,332	151	6,317	—	—		
27	1	6,591	2	39	6,249	52	73	102	22	6,390	152	6,389	—	—	
28	7	6,807	3	—	6,270	53	6,440	103	28	6,375	153	6,422	—	—	
29	6,516	4	—	6,433	54	50	104	—	6,484	154	6,228	—	—		
30	6,561	5	—	6,347	55	6,432	105	—	6,521	155	6,339	—	—		
31	6,590	6	37	6,343	56	57	106	—	6,372	156	6,302	—	—		
32	6,569	7	—	6,657	57	6,465	107	—	6,338	157	6,346	—	—		
33	16	6,581	8	—	6,495	58	76	108	—	6,493	158	6,362	—	—	
34	6,550	9	—	6,366	59	78	109	47	6,471	159	6,572	—	—		
35	6,564	10	—	6,599	60	24	110	—	6,483	160	6,579	—	—		
36	6,596	11	92	6,350	61	6,362	111	38	6,496	161	90	92	6,662		
37	10	6,371	12	—	6,307	62	6,386	112	48	6,474	162	6,477	—	—	
38	14	6,611	13	31	59	6,358	113	72	6,467	163	6,569	—	—		
39	6,607	14	26	6,363	63	6,393	114	—	6,474	164	6,388	—	—		
40	19	6,523	15	81	6,425	65	55	115	51	6,476	165	6,357	—	—	
41	1	6,590	16	—	6,387	66	6,495	116	56	6,378	166	6,490	—	—	
42	—	6,651	17	—	6,346	67	6,431	117	49	6,353	167	6,544	—	—	
43	6,625	18	—	6,351	68	23	118	—	6,487	168	6,601	—	—		
44	1	6,633	19	—	6,386	69	52	119	—	6,496	169	6,374	—	—	
45	13	6,547	20	30	6,390	70	6,434	120	—	6,577	170	93	89	6,424	
46	6,633	21	44	6,376	71	6,489	121	45	6,531	171	6,202	—	—		
47	6,650	22	58	6,345	72	6,415	122	—	6,498	172	6,414	—	—		
48	6,828	23	29	6,416	73	6,497	123	45	6,437	173	6,498	—	—		
49	6,567	24	36	6,427	74	6,525	124	—	6,419	174	6,278	—	—		
50	6,523	25	—	6,473	75	6,530	125	—	6,475	175	6,462	—	—		

表2 P番号取りあげ遺物 レベル表?

北区 SD 3

取上 店番	料金 身号	レベル	取上 店番	料金 身号	レベル	取上 店番	料金 身号	レベル	取上 店番	料金 身号	レベル
1	7,184	51	7,306	101	7,100	151	27	6,861	201	7,042	
2	7,084	52	7,326	102	7,254	152	6,927	202	6,948		
3	7,160	53	7,372	103	7,124	153	6,889	203	6,948		
4	7,250	54	7,272	104	7,044	154	6,932				
5	7,170	55	7,272	105	7,247	155	7,038				
6	7,184	56	7,240	106	7,120	156	6,967				
7	7,124	57	7,286	107	7,278	157	25	6,746			
8	7,123	58	7,331	108	7,179	158	6,805				
9	7,158	59	7,362	109	7,179	159	6,749				
10	7,161	60	7,184	110	22	7,066	160	47	6,882		
11	7,078	61	7,098	111	7,065	161	38	6,724			
12	7,152	62	7,272	112	7,013	162	37	6,752			
13	7,256	63	7,004	113	7,157	163	20	6,717			
14	7,108	64	7,145	114	7,176	164	6,783				
15	7,086	65	7,106	115	13	7,152	165	36	7,023		
16	7,077	66	4	116	12	7,021	166	28	6,894		
17	7,052	67	7,203	117	16	6,927	167	44	6,888		
18	7,092	68	7,265	118	5	5,913	168	7	7,057		
19	7,090	69	7,288	119	6,949	169	6,804				
20	7,096	70	7,257	120	1	6,979	170	1	6,867		
21	7,098	71	7,327	121	6,903	171	31	6,903			
22	7,220	72	7,280	122	6,974	172	—	7,024			
23	7,124	73	7,076	123	10	6,928	173	—	6,987		
24	7,076	74	7,284	124	6,997	174	—	6,931			
25	7,23	75	7,262	125	6,940	175	50	6,870			
26	7,088	76	20	7,220	126	105	176	—	7,173		
27	7,241	77	7,196	127	6,935	177	34	7,076			
28	7,154	78	3	7,250	128	6,906	178	26	6,953		
29	7,062	79	7,185	129	6,905	179	—	6,928			
30	7,971	80	7,062	130	5,950	180	—	6,953			
31	7,069	81	7,104	131	5,880	181	24	7,017			
32	7,160	82	7,082	132	6,908	182	—	6,968			
33	7,090	83	7,044	133	6,957	183	—	6,971			
34	7,026	84	21	7,076	134	6,934	184	32	6,997		
35	7,423	85	7,236	135	7,318	185	41	7,120			
36	7,067	86	7,042	136	6,945	186	—	6,991			
37	7,200	87	7,323	137	6,958	187	—	7,078			
38	7,053	88	7,288	138	6,967	188	46	7,172			
39	7,137	89	7,333	139	33	6,910	189	30	7,157		
40	7,248	90	7,305	140	6,790	190	—	6,944			
41	7,292	91	7,295	141	6,801	191	—	7,106			
42	7,245	92	5	7,318	142	6,676	192	—	7,007		
43	7,321	93	7,275	143	6,943	193	48	7,013			
44	7,260	94	7,237	144	6,727	194	—	6,925			
45	7,361	95	7,260	145	6,830	195	49	6,983			
46	7,358	96	14	7,235	146	6,919	196	—	6,947		
47	7,295	97	—	7,254	147	6,723	197	—	6,968		
48	7,284	98	7,143	148	35	6,918	198	—	6,988		
49	7,239	99	18	7,132	149	6,789	199	—	7,004		
50	7,330	100	—	7,251	150	6,786	200	45	7,081		

表3 P番号取りあげ遺物 レベル表③

中央区 SD 3

取上 店番	料金 身号	レベル	取上 店番	料金 身号	レベル	取上 店番	料金 身号	レベル
1	6,900		2	6,908		3	6,966	
4	7,070		5	7,098		6	6,988	
7	6,984		8	7,071		9	7,016	
10	7,042		11	6,944		12	6,939	
13	6,961		14	7,014		15	7,062	
16	6,926		17	6,935		18	6,932	
19	6,945		20	6,928		21	7,019	
22	6,966		23	6,890		24	7,000	
25	6,974		26	6,885		27	6,913	
28	6,986		29	6,834		30	6,862	
31	6,910		32	6,706		33	6,720	
34	7,041		35	7,004		36	5,718	
37	5,700		38	5,692		39	5,692	

的伸び端部は丸味を帯び、内面はヘラケズリを行う。3は頭部で縫まり口縁部は直立気味に立ち上がり外反する。口縁端部は尖り気味である。4は頸部の縫まりが弱く、口縁部は丸味を帯びて外反する。端部は丸味をもつ。5は布留系の壺。胴部から内湾し頸部で縫まり口縁部が内湾する。口縁端部を摘み上げ整形としている。また、胴部上位に浅い沈線三本が途切れがちに引かれている。内面の整形はヘラケズリ調整を行う。6は胴部の内湾が強く、頭部で締まる。口縁部は頭部からの立ち上がりが内湾して口縁端部で摘み上げ整形を行う。口唇部に浅い沈線一条を巡らしている。

壺形土器類（第24図 7～10）

7は二重口縁の壺。土師器誕年のⅠ期で口縁が頭部から大きく外反し、さらに直線的な口縁を積み重ねて端部を丸く納めている。8は丸底の底部から、内湾する胴部へ移行し頸部で締まる。口縁部の下端に断面三角形の凸帯を一条付して外湾しながら口縁部を形成する。口縁端部は丸味をもって尖り気味である。9は胴部上位に最大径のある壺。10は丸底の底部から頭部へ移行し、口縁部が長く直線的に伸びる。口縁端部は尖り気味としている。

鉢形土器類（第24図 11～15）

11は内湾気味に胴部が移行して口縁部にいたる。口縁端部は尖り気味となっている。12は丸味をもった胴部から頭部で縫まり口縁部は外反する。13は丸味をもった胴部から頭部で縫まり、薄手の口縁器肉が内湾気味に外反する。14は脚台付の鉢。脚部は欠損するが短い脚が付くと見られる。鉢の部分は、薄い器肉が内湾して口縁部にいたる。口縁端部は尖り気味となる。15は台付鉢の脚の部分と考えられる。鋸部端を丸く納め、直線的に背の低い脚が伸びる。脚部の外側と鉢体部の内面を暗文により整形している。

高坏類（第24図 16～18）

16は坏部が深い高坏。口縁部が長く外反し口縁端部は尖り気味となる。17・18は高坏の脚。17は短い脚の下位に、18は短い脚の中位にいずれも円孔を設けている。

器台類（第24図 19）

19は裾端部を四角に納め、裾部上位で緩やかに外反しつつ内傾して茎部へ移行。頭部内面に稜を付けて口縁部は大きく外反する。

鉢載品（第24図 20）

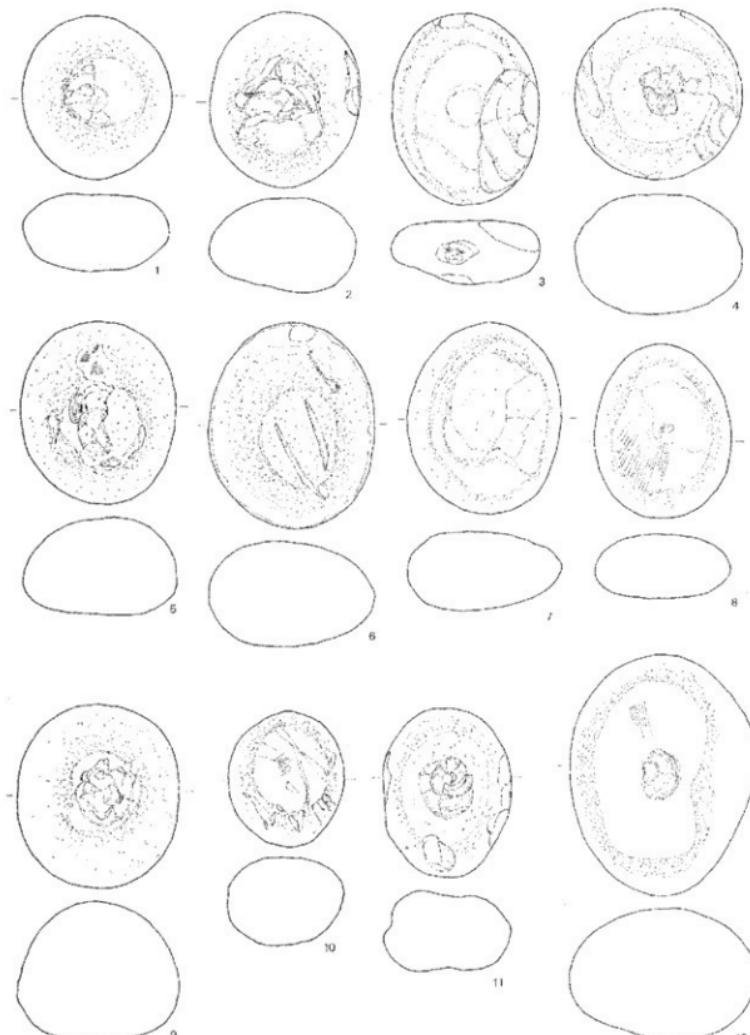
20は高坏と考えられる器種である。器形は緩やかに内湾して口縁部に移行し端部を丸く納めている。内面は刷毛目調整の痕を残す。色調は灰色を呈する瓦質土器。

S D - 2 I 層石器（第25図、第26図 1～16）

1は正面をスリ石として使用する。2は裏面に擦りとしての使用痕が認められる。3は側面を利用しての叩きの痕跡が認められる。正面の側縁の欠損は使用時のものとみられる。4は正面の中央部に凹と側縁全周に敲打痕の痕跡が残る。5は裏面に擦りの痕跡がみられる。6は裏面の擦りの痕跡と側縁全周にわたる敲打痕が残る。7は正面の擦りの痕跡と側縁全周にわたる敲打痕が認められる。8は正裏面全面の擦り痕と側縁全周にわたる敲打痕が残る。9は正裏面に敲打痕が残る。10は正裏面の擦



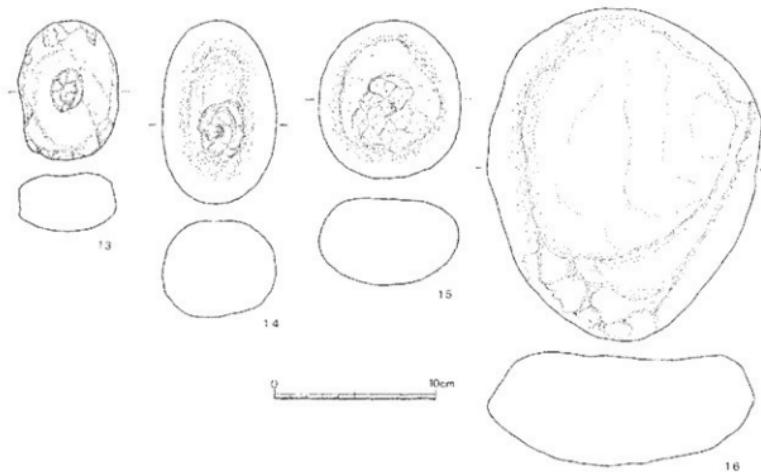
第24図 SD 2 I層下



0 10 cm

第25図 SD 2 I層出土石器

りが認められる。また、正裏面に金属による溝状の傷が付く。11は正裏面を凹石として使用し、上部端は叩き石としても利用している。正面にわずかな叩きの痕跡と裏面に擦りの痕跡が認められる。13は正面を凹石として使用し、偶縁を全周にわたり敲打している。14は正裏面を凹石として使用する。15は擦りの後に叩き具として正面と右側縁を敲打している。16は石圓。正面の約2/3ほどが滑らかに凹む。



第26図 SD-2 I層出土石器

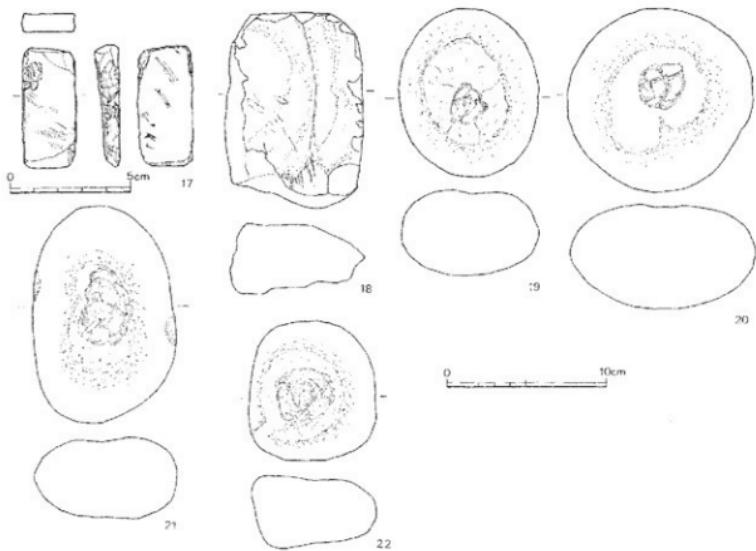
SD-2 I層下石器 (第27図 17~22)

17は扁平片刃の石盤。正面と上面・左側面を研ぎだしている。右側面は敲打仕上げで終えている。刃部の研ぎ出しが左から右側へしだいに刃部幅を増している。裏面も左から右側へ最大2mm幅で研ぎだしている。粘板岩を使用する。18は砥石。正面中央に稜があり2回に分けて使用している。裏面も2回に分けて使用を行っている。やや粗い砥石を使用する。19は中央に凹があり、凹石として使用している。20は中央部を凹石として使用し、右側縁を叩き石として利用している。21は正面を凹石とし、表面と両側縁を叩き石として使用している。22は正裏面を凹石として使用している。

SD-2 II層土器

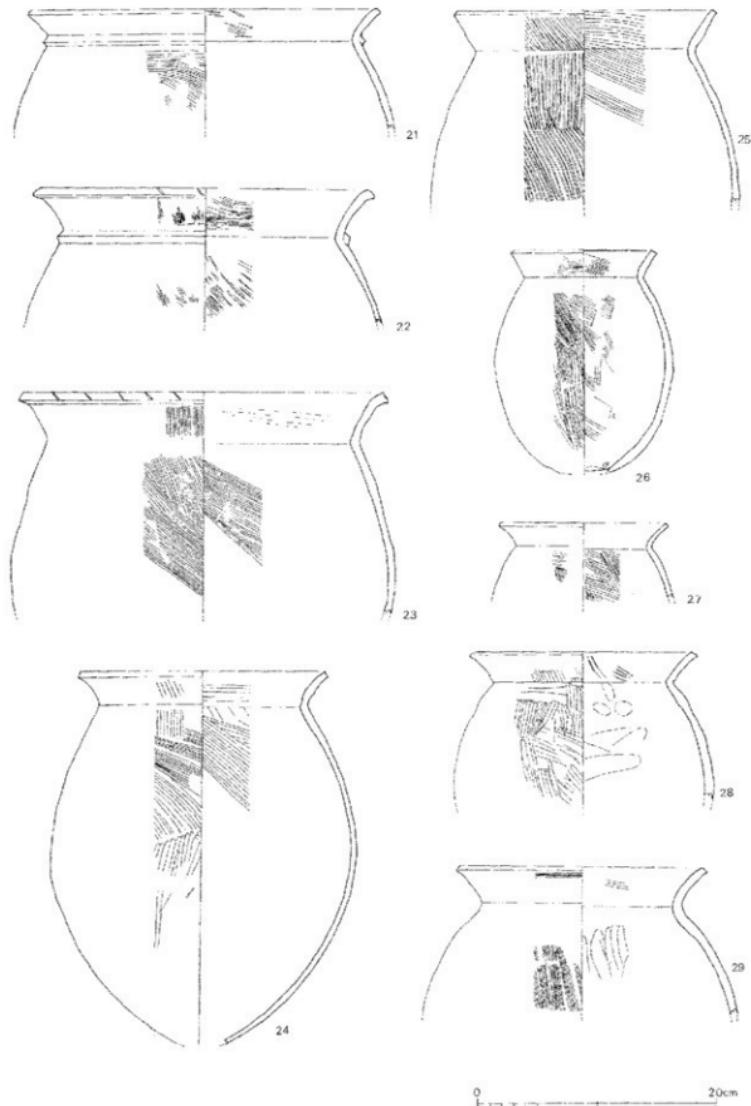
兎頭 (第28図、第29図、第30図、第31図 21~51)

21は頸部に三角形の凸帯を一条巡らす弥生後期の土器。口縁は頸部から外反し口縁端部は四角に納める。22は頸部に三角形の凸帯を巡らす。長めの口縁部は頸部から大きく外反する。口唇部に刻み目を付している。器面の調整は内外面とともに刷毛目整形を行っている。23は頸部上位に最大径があり頸

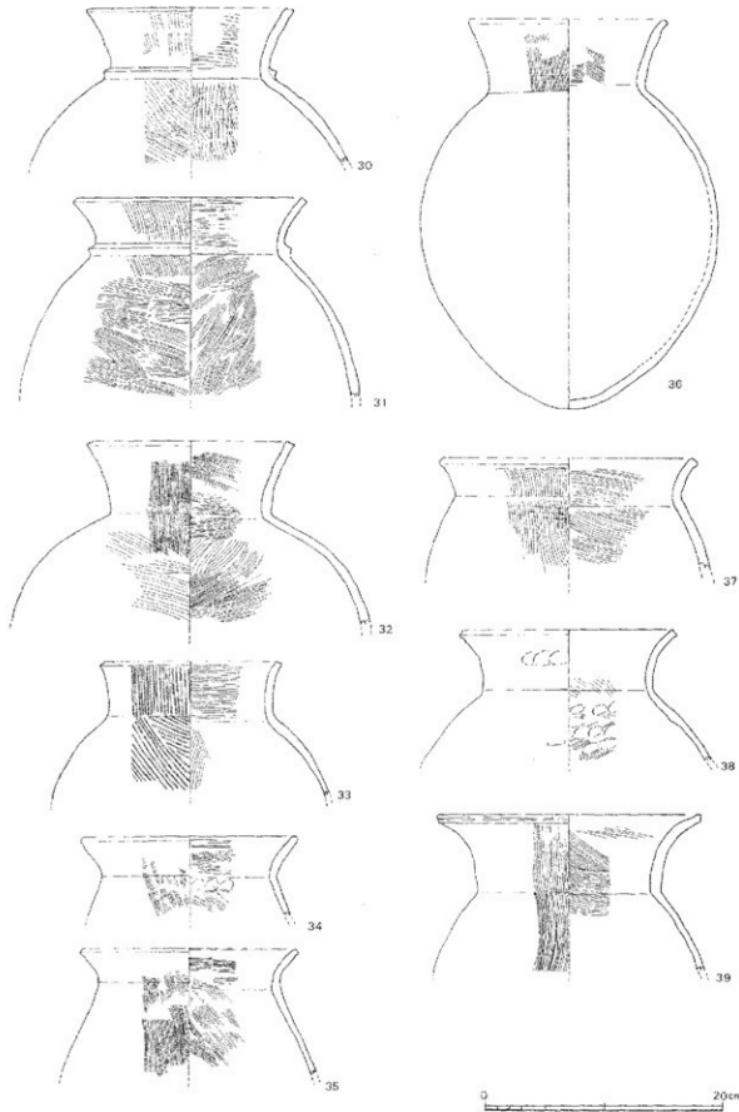


第27図 SD 2 I層下出土石器 (17は1/2, その外は1/3)

部で縮まり口縁部は直線的に外反する。口縁端部に厚味をもたせ口唇部に刻み目を付している。器面は内外面ともに刷毛目調整をしている。24は胴部中位に最大径をもち、頭部で縮まり口縁部は外反する。内外面に斜位と縱位の刷毛目調整を行っている。25は頭部で縮まり、口縁部は直線的に外方へ伸びる。口縁端部は浅い沈線が巡る。26は胴部の中位に最大径をもち頭部で縮まり口縁部は外反する。器面の調整は内外面ともに斜位の刷毛目としている。27は頭部で縮まり口縁部は大きく外反する。28は頭部で縮まり外湾した口縁部となる。口縁端部に厚味がある。29は頭部で縮まり、外湾した口縁部となる。内面はナア、外面は斜位の刷毛目で器面の調整を行っている。30~39については毫とも毫ともとれる資料でいずれも、刷毛目調整を施している。便宜上臺で記載する。30は頭部に断面三角形の凸帯を一条付し口縁部は大きく外反する。内外面ともに刷毛目整形のあとが観察される。31は頭部に断面三角形の凸帯を一条設けている。口縁部は外反し端部を四角に納めている。32は頭部で縮まり口縁部で外反する。口縁端部は四角に納め、刷毛目調整を内外の器面に施している。33は頭部で縮まり口縁部が直線的に伸び端部で外反する。34は口縁部が外反し厚味をもつていて。35は頭部に厚味をもつて口縁部が外反する上器。36は尖り気味の底部から胴部中位に最大径をもち頭部で縮まり口縁部が直線的に外反する。口縁端部を四角に納める。37は頭部で縮まり口縁部で外反する。17縁端部は下端に厚味をもつ。38は頭部で縮まり外反して口縁端部へ移行する。口縁端部の断面は四角をなす。39は頭



第28図 SD2 II層出土土器



第29回 S D 2 II層出土土器

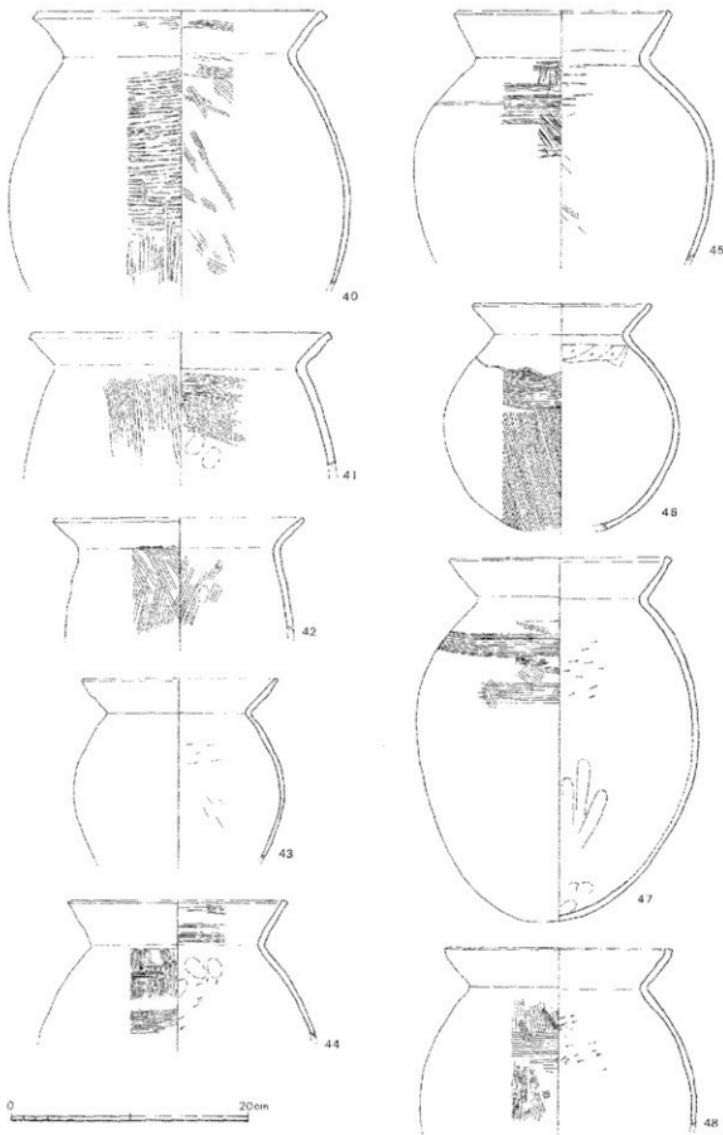
部が縮まり、口縁部は厚味をもって外反する。40は頸部で縮まり、口縁部が屈曲気味に端部へ移行し、口縁端部は両端に厚味をもつ。器面の調整は外面が叩きで内面は刷毛目整形としていて庄内併行期の上器と比定される。41は頸部で縮まり口縁部が屈曲気味に口縁端部へ移行する。口縁端部は下端に厚味をもつ。42は直線的に伸びた胴部から頸部で反転し、外反する口縁となる。43は頸部中位に最大径をもち頸部で縮まり、口縁部は中位に厚味をもって直線的に伸びる。44は頸部で縮まり口縁部は屈曲しつつ端部へ移行する。口縁端部は内端部を擒み上げの整形としている。45は丸い胴部から頸部に移行し、口縁端部を擒み上げた整形をしている。46は頸部の中位に最大径をもち頸部で縮まり口縁端部を擒み上げた整形を施している。器面の整形は内面がヘラケズリ、外面は波状の沈線と刷毛目で器面を整えている。47は丸底の底部から長い胴部へ移行し、頸部で縮まり口縁部は湾曲して口縁端部へ移行する。また、端部は擒み上げ口縁としている。器面の調整は内面がヘラケズリとし、外面は横位の浅い沈線を胴部上位に配置している。48は頸部で縮まり、口縁部は内湾しつつ端部で直立する。内面はヘラケズリとし外面を刷毛目調整としている。49は長胴のやや上位に最大径をもち頸部で縮まり口縁部は屈曲して口縁端部へ移行する。端部は擒み上げの整形としている。器面の調整は内面がヘラケズリ、外面を刷毛目としている。50は丸い胴部から頸部で縮まり口縁部は内湾し、端部へ移行する。器面の調整は内面がヘラケズリとし外面を刷毛目調整としている。51は直線的に伸びた胴部から頸部で縮まり、内湾した口縫をなし端部は丸く納める。

壺類（第31図、第32図 52～66）

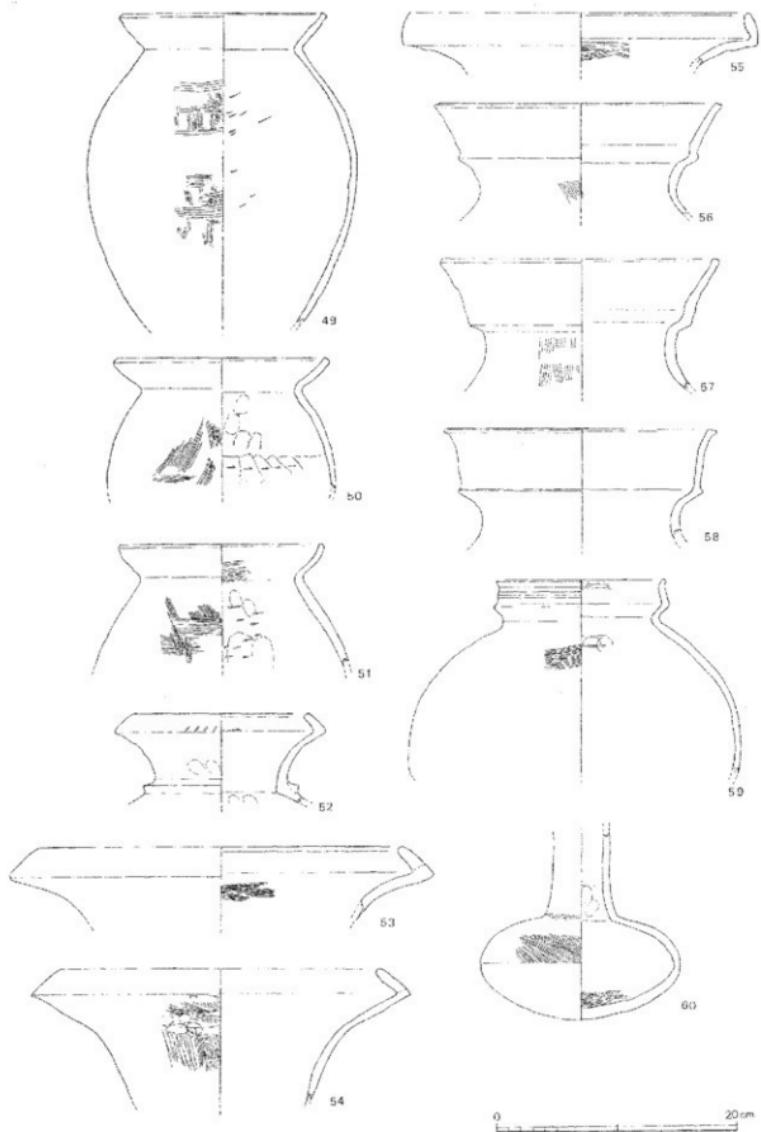
52は複合口縁の壺で、頸部が縮まり頸部下端に断面三角形の凸帯を巡らしている。頸部は下端から外反し、口縁部で反転し内側へ屈曲させて厚味のある口縁を形成している。53は複合口縁の大型品で大きく外反する頸部に反転内傾する口縁部を乗せている。54は外反する頸部に内傾する口縁部を乗せている。55は外反する頸部に直立気味の口縁部を乗せている。56は二重口縁壺で外反した頸部に直線的に外方へ伸びた口縁部を付けている。口唇部は浅い沈線が巡る。57は外反する頸部に湾曲した口縁部が付き口縁端部を擒み上げの整形としている。58は外反する頸部に直立気味の口縁部を付け端部に厚味をもつ。59は丸い胴部から頸部でしまり口縁部は直立しつつ屈曲する口縁としている。60は丸底の底部から楕円形の胴部に移行し頸部で縮まり長い頸部が伸びる作りとしている。61は丸底の底部で胴部上位に最大径をもち頸部から外反する口縁部が付く。62は丸底の底部で胴部の中位に最大径をもち頸部で縮まり口縁部は直立気味に外反する。器面の調整は内面が刷毛目で外面は胴部下位は風化で調整痕不明であるが上位は刷毛目調整としている。63は頸部で縮まり口縁部は直立気味にやや外反する。口縁端部は尖り気味としている。64は薄い器肉に丸味のある胴部から頸部へ移行し、口縁部は長めで屈曲している。口縁端部は尖り気味としている。65は丸底の底部から頸部に移行し、直線的に伸びる薄手の口縁部を形作っている。口縁端部は尖り気味となっている。66は内瀬戸内系の壺片。肩部に断面三角形の凸帯を付し、肩端部に重弧文と重沈線で外面に装飾を施している。

鉢類（第32図 67～77）

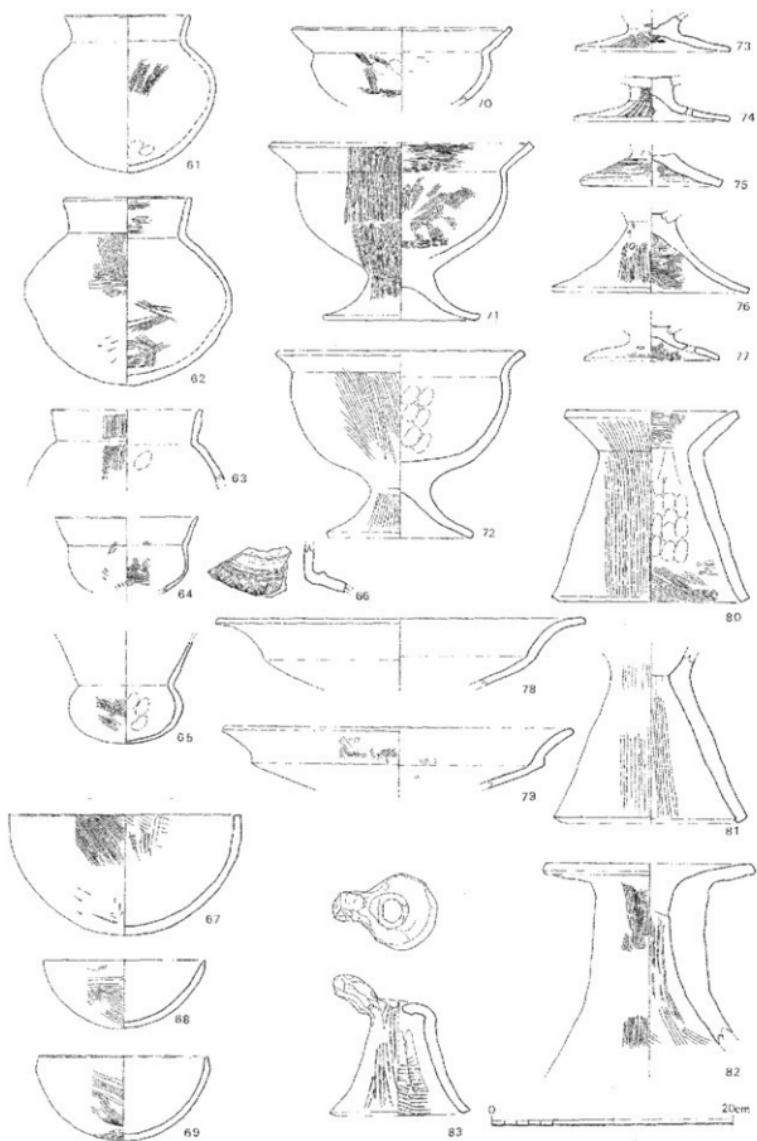
67は椀形の鉢で丸底から内湾した胴部へ移行し、口縁部で直立し端部は平坦としている。器面の調



第30図 SD 2 II層出土土器



第31図 SD 2 II層出土土器



第32図 S D 2 Ⅱ層出土土器 (66のみ1/3, 外は1/4)

整は内面が刷毛目、外面は胴部下位をハラケズリと上位を刷毛目としている。68は碗形の鉢で丸底から内湾して口縁部へ移行する。口縁端部が尖り気味となる。70は丸味をもった胴部から屈曲して直線的に外方へ伸びる口縁部を形成する。口縁端部は丸く納めている。71は台付鉢で低い脚に丸味をもつ胴部が乗り口縁部は直線的に外方へ伸びている。器面は内外面ともに刷毛目調整をしている。72は台付鉢で脚は外反し鉢と接続している深く丸味のある胴部から頸部で屈曲し外方に伸びた短い口縁部を形成している。口縁端部は丸く納めている。胴部の内面は指押さえとし、外面は刷毛目調整を胴部と脚部に施している。73から77は台付鉢の脚部として取り上げている。いずれも背の低い脚で、73は脚部を刷毛目調整のあと暗文でさらに整形している。また、小孔を穿つものが74・76・77である。

高坏（第32図 78～79）

高坏の坏部片で、体部と口縁部の長さの比率は2：1程度となっている。78は体部から口縁部にかけて屈曲し口縁部が外湾する形状となる。口縁端部は丸く納めている。79は体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は外方に伸びる。

器台類（第32図 80～83）

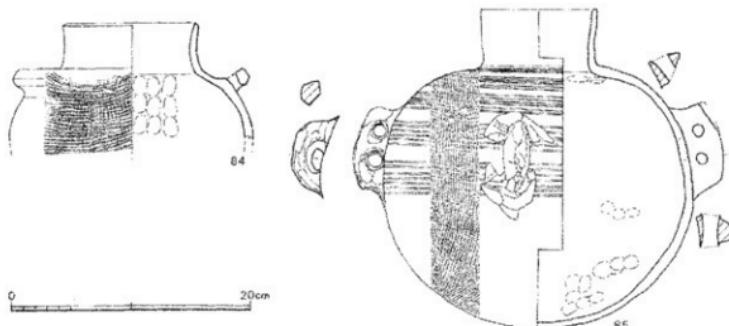
80は脚部から直線的に内傾し、頸部で縦まり直線的に口縁部が外方へ開く器形となっている。両端部は断面四角形としている。器面の調整は内面を指ナデと刷毛目で上位と下位を調整し、外面を縦位の刷毛目調整を行っている。81は直線的な脚を内傾させて頸部で屈曲させている。器面は内外面ともに刷毛目調整をしている。82は舟形器台である。上端に約3.5cmの穿孔を設けている。端部は手すべくねの突起を接続させている。

舶載品（第33図 84～85）

84は丸味のある胴部から頸部へ移行し、やや外傾直立する口縁部となる形態の三輪系瓦質土器である。肩部には把手を貼り付けて二穴としていたと思われるが、半分を消失している。器面の調整は外面を格子目の叩きで頸部下端から胴部にかけて施し、内面は指ナデとしている。口縁部には櫛編水引の模が巡っているのが観察される。85は三輪系瓦質土器。丸底の底部から丸い胴部へ移行し、頸部で縦まり直立気味の口縁部を形成する。胴部上位に把手を三箇所設けて、内二箇所は二穴とし、一箇所については一穴としている。器面の調整は外面の胴部下位から頸部までを縦位の叩きとし、胴部下位以下を格子日の叩きを施している。また、内面は当て具重をナデ消し調整している。色調は灰色を呈する。

S D - 2 II層石器（第34図 23～31）

23は水晶製の切子玉。形状はそろばん玉形を呈している。研ぎ出し面は上面が1面、下面が2面上部は自然面、下部1面の4面の研ぎ出しを行っている。穿孔は上部中央に径3mmの孔が深さ約14mm螺旋状に穿たれている。穿孔行程で下部にヒビが入り完成にいたらず放棄したと考えられる。24は正面裏面を凹石として使用し、側縁全周に敲打を行っている。25は正面を凹石として使用し、裏面は擦り石としての機能を有している。26はスリ石として使用し、側縁を叩き石としている。27は上部と下部に敲打痕のある叩き石。28は正面及び右側部を凹石として使用している。29は正面中央部に敲打痕が



第33図 SD 2 II層出土土器

若干観察される。30は正面の中央部に敲打痕が認められる。31は正面に2箇所の凹と右側の抉り及び表面の2箇所の凹が認められる。32は正面の中央部に鞍部があり、紐擦の痕跡とも考えられる。33は裏面を門石として利用している。34は正面を凹石とし、上部・下部・左右侧面をスリ石として使用している。

SD-2 III層

壺類（第35図 86~89）

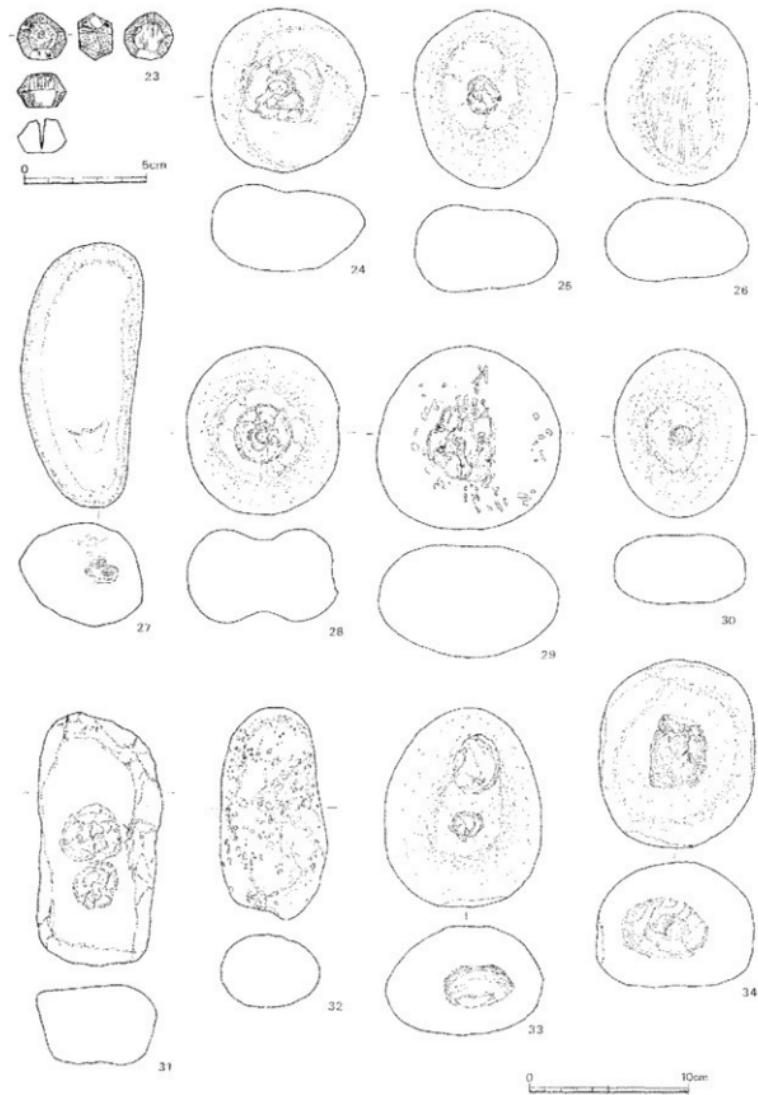
86は大型の壺。頸部に断面台形の凸帯を巡らし、口縁部は直線的に外方へ開く。口縁端部が肥厚し口唇部に斜行する刻目を付けている。内外面ともに刷毛目調で器面を整えている。87は胴長の壺で、頸部で縮まり口縁部は直線的に外方へ開く。口縁端部はやや尖り気味である。器面の調整は内外面ともに刷毛目としている。88は胴長の体部から頸部で縮まり、口縁部はやや屈曲して端部へ移行する。端部は尖り気味となる。89は頸部で縮まり口縁部が屈曲して端部は四角に納めている。

壺類（第35図 90~94）

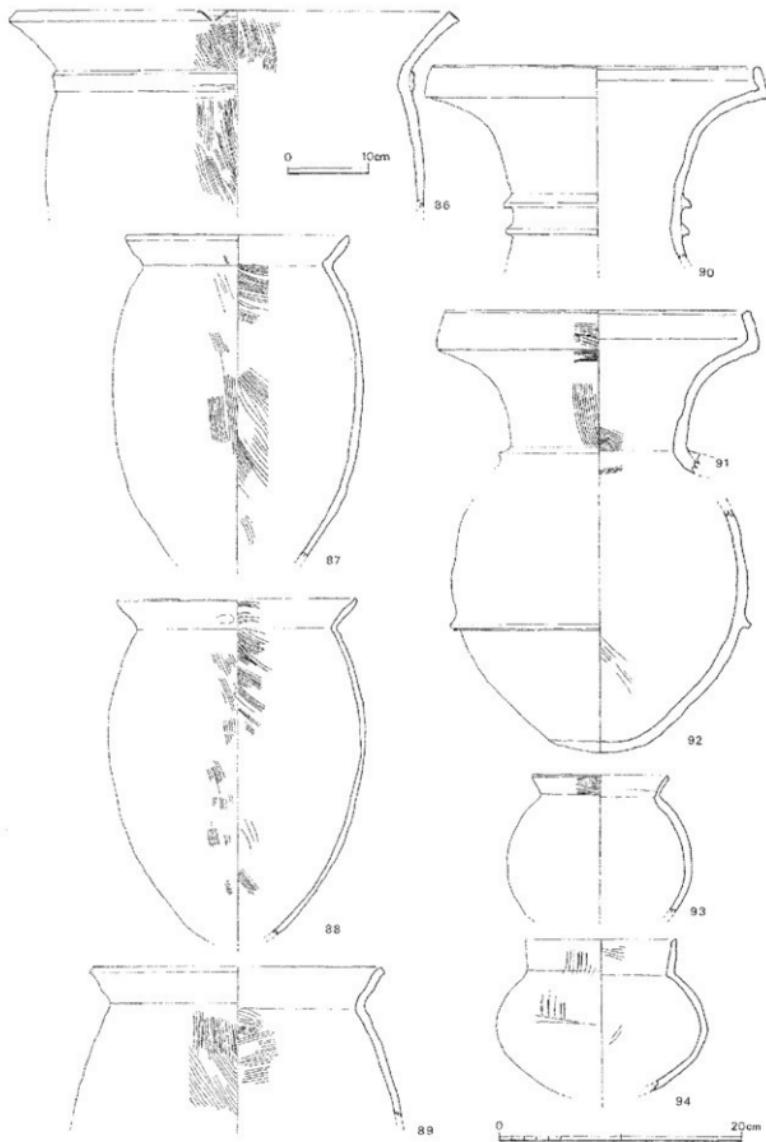
90は複合口縁の壺。長い頸部に断面三角形の凸帯が二条巡る。頸部上端は外湾し、直立気味の短い口縁部が付く。口縁部はやや厚味をもって端部を丸く納める。91は頸部下端に断面三角形の凸帯を付し大きく外湾する。口縁部は内傾し、端部は平坦としている。92はレンズ状の底部から立ち上がり胴部下位に断面四角形の凸帯を一条巡らす。凸帯から上位は丸味をもつ。93は胴部中位に最大径をもち頸部で縮まる。口縁部は直線的に外方へ開く。94は胴部中位に最大径があり頸部から口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納める。

SD-2 III層石器（第36図 35~42）

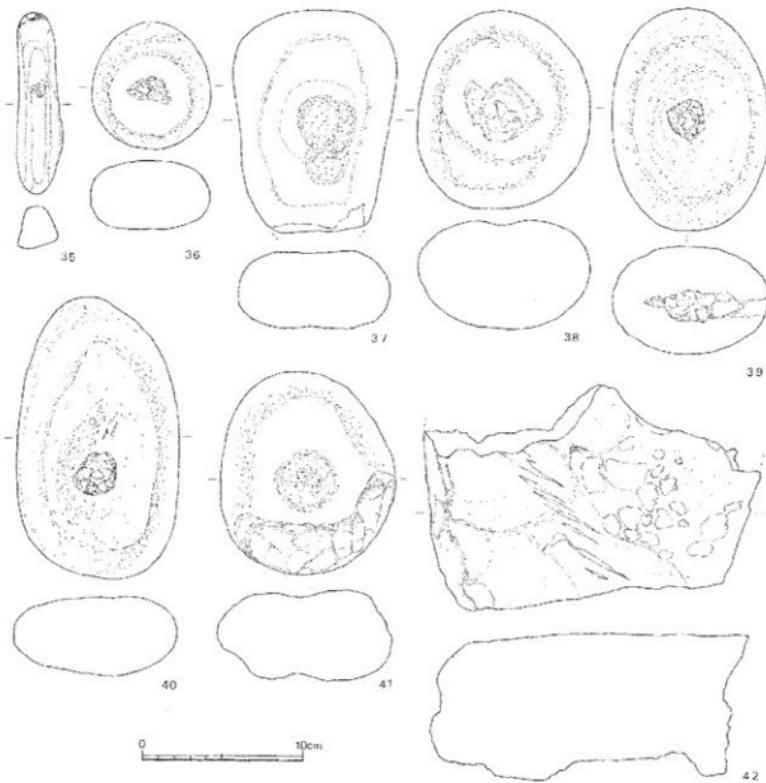
35は上部を叩き石として使用している。36は正面に擦りを行い、正面のみを後から叩き石として使用している。37は正面を凹石として使用している。下部を欠損する。38は正面を凹石として使用する。39は正面を門石として利用し、上下部は叩き石として使用している。40は正面を凹石として



第34図 SD 2 II層出土石器 (23は1/2, その外は1/3)



第35図 SD 2 III層出土土器 (86は1/6, その外は1/4)



第36図 SD 2 Ⅲ層出土石器 (42は1/4, その外は1/3)

使用し、裏面はスリ石として使用している。41は正裏面を凹石として利用していた石器を正面下部を打撃加工することによって、礫器としての機能を持たせようとしたと考えられる。42は正面を研ぎ出しによって滑らかな溝底をしている。使用目的としては、台石が考えられる。

●SD-3 (第6図、第37図、第39図)

北区北東隅から中央区南西隅に向かって約36mを確認した。北東部は調査区東壁に入り込むが、平成5年度の範囲確認調査でその延長を確認している。台地から離れるにしたがって地山が削平を受けた浅くなり、特に中央区では近世以降の水田耕作で造構上面が大幅に削平され北区に比べると遺物の量も格段に少なかった。また南西隅でSD 2に切られている。断面は逆台形型で、北区で最大幅約3.5



第37図 北区 SD 3 I層（上図）・II層（下図）遺物出土状況 (1/40)

7.5m



試験坑

7.5m



北区北壁土層



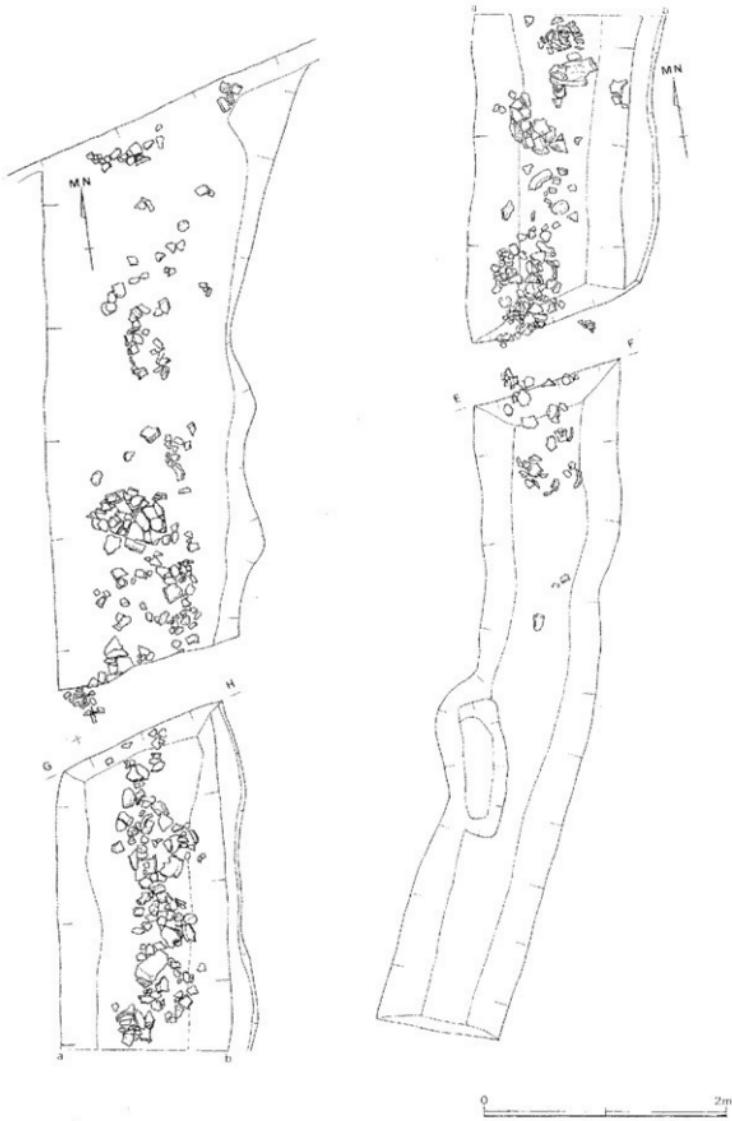
北区西壁
1 表土
2 c 黄褐色土 (黄色粒子含む)
3 a 紫赤褐色土
3 c 明灰色粘質土
3 d 黑褐色土

北区北壁
1 表土
2 c 黄褐色土 (黄色粒子含む)
3 a 紫赤褐色土
3 c 明灰色粘質土
3 d 黑褐色土

0

5m

第38図 北区 西壁・北壁土層図 (1/60)



第39図 中央区 SD 3 遺物出土状況 (1/40)

m、最深1.15mを測る。覆土はおおきく3つに分けられ、I層が褐色土、II層が黒褐色土、III層が茶褐色土である。I層出土の遺物は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が見られる。中央区ではI層は削られてしまっていた。II層の遺物は弥生時代中期丹塗土器から弥生時代後期の土器、鉄鍊などが出土している。III層出土の遺物は少ないが弥生中期の壺が出土している。上層断面からは時期は明確でないが、漆の掘り直しのあとが観察される。また北区では濠の覆土の中に濠の内側から崩れたような形で地山の上（黄褐色土）が混入していることから、濠の内側に濠を掘った土を積み上げた土堤が築かれていた可能性も想定される。また濠の上層では広範囲にわたる焼上も確認した。この漆は、多重環濠の中濠の可能性が高く、濠の形状・出土遺物の状況から、今年度の国庫補助事業調査（芦辺町城分）で検出したSD5につながると思われる。

SD-3 I層

壺類（第40図 1～5）

1は尖り気味の底部から胴部下位に最大径をもつ体部へ移行し、頸部で屈曲して口縁部が直線的に聞く。2は胴部の中位に最大径をもち、頭部の断面三角形凸帯で締まる。口縁部は外方へ直線的に伸び端部は両端が肥厚する。3は胴部中位に最大径をもち頸部に断面三角形の凸帯を巡らしている。II縁部は大きく外反し、端部は四角に納める。4は頭部で締まり、口縁部は外反して口縁端部へ移行する。口縁端部は四角をなす。5は径の狭い平底からやや丸味をもって、長胴へと移行していく壺形土器。器面調整は内面を指ナデとし外面を斜位の刷毛目としている。

壺類（第40図、第41図 6～11）

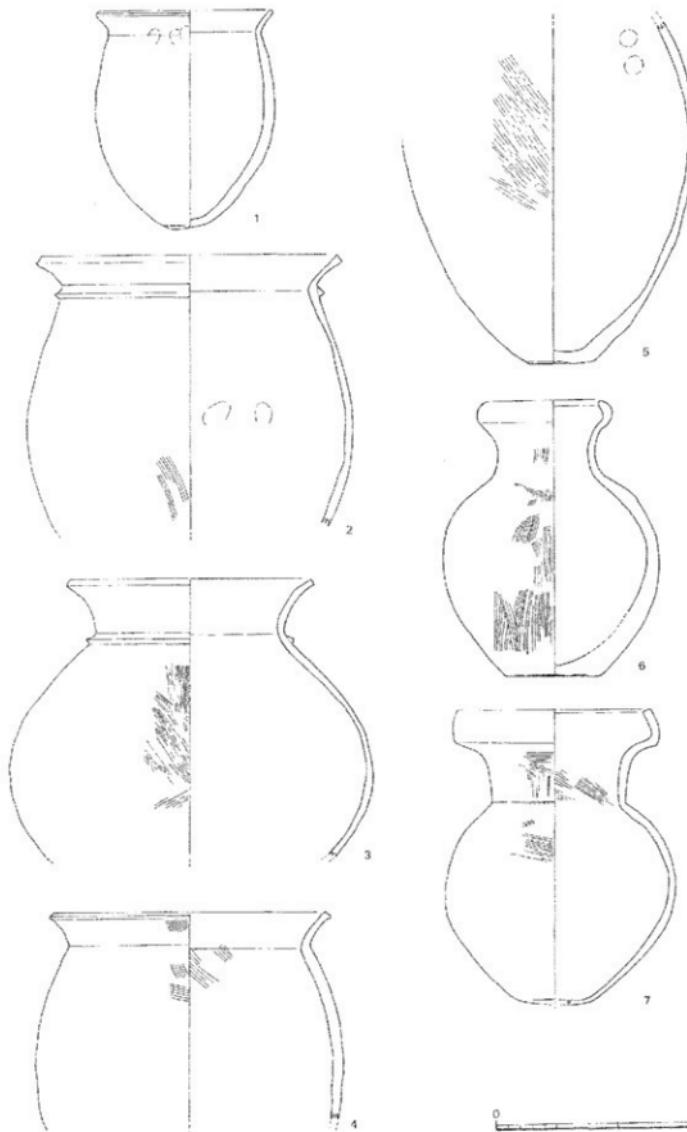
6は袋状II縁の最終末期。平底の底部から角をもって立ち上がり最大径をもつ胴部中位へ移行していく。頭部は直立気味に外反し、口縁部で反転内済し膨らみを有する形態としている。7は複合II縁の壺。底部が丸味をもち頸部径が広くなる。頭部は外反し口縁部は内傾気味に丸味をもち口縁端部は四角をなす。8は頭部下端に断面三角形の凸帯を配し、大きく外反する頸部から内傾したII縁部が付く。口縁端部は平坦としている。9は外反する頭部に直立気味に内傾した口縁部が付き、境目は接が明瞭につく。口縁部は平坦となる。10は大きく外反する頭部から内傾したII縁部がS字状となる。頸部上端の境目に断面四角の稜がつく。器肉が薄く胎土が灰色で瓦質土器の焼成、質とも類似している。11は無頸壺。直線的に内傾する胴部がII縁部へ移行し、II縁部でやや外反気味の器形となる。焼成・胎土とともに10と類似する。

鉢類（第41図 12・13）

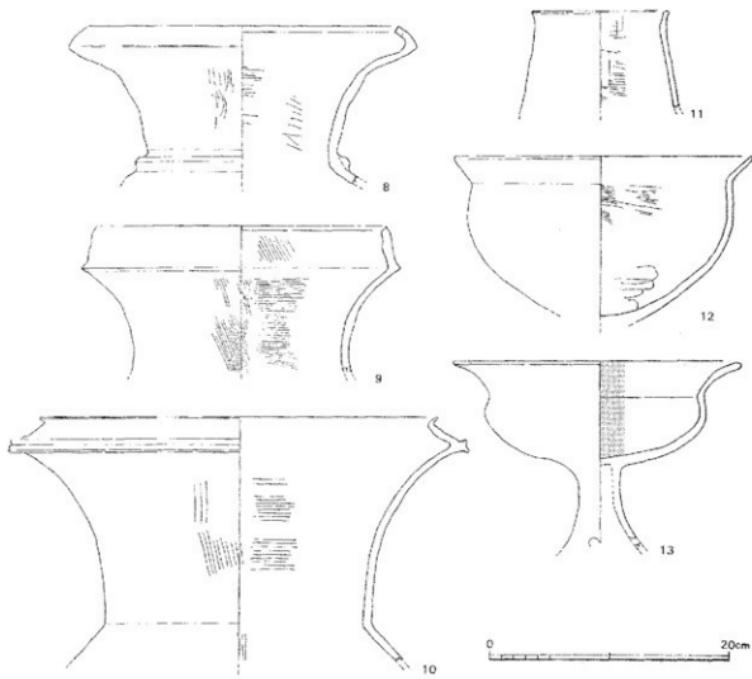
12は胴部上位に最大径をもち頭部へ移行し、直線的に外方へ聞く口縁部をなす。口縁端部は平坦に納める。13はやや長めの脚が付き穿孔を底部上端に施している。鉢部は丸味を持って立ち上がり頭部で屈曲し、II縁部は外反して上方へ聞く。口縁端部は丸味を持つ。内面に丹塗りの痕を残す。

器台類（第42図 14～23）

14は脚の外反部位が中位にある器台。15は脚の外反が上位にあり、断面の中位から上位が最も厚味を増している。16も15と同様の形態をなしている。17は脚部が直線的に内傾し、頭部で外反する。ま



第40図 SD 3 I層出土土器

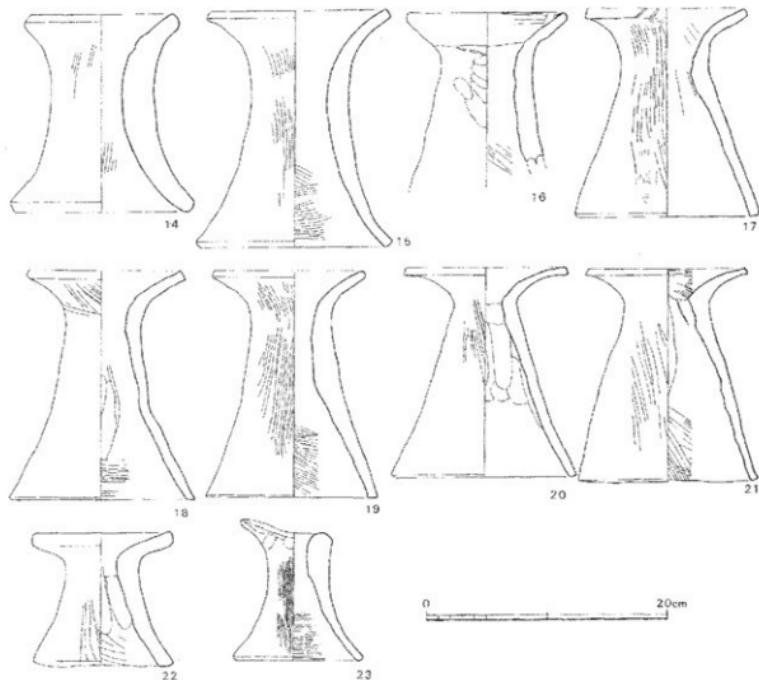


第41図 SD 3 I層出土土器

た、口縁端部に刻目を付けている。18は裾部が直線的に内傾し、頸部下端で立ち上がり上端で口縁部の外反と接続する。19は裾部で直線的に内傾し、頸部下端で器肉の厚みを増す。頸部の上端は口縁部の外反と接続する。20は裾部から頸部に直線的に内傾し、頸部内面に稜をもって口縁部が外反する。21も20と同様の形態をなしている。22は小型の器台。脚部は外反気味に頸部へ移行し、頸部で器肉を厚くし、口縁部は直線的に外方へ開く。23は杏形器台。上端部に嘴上の突起を付けている。

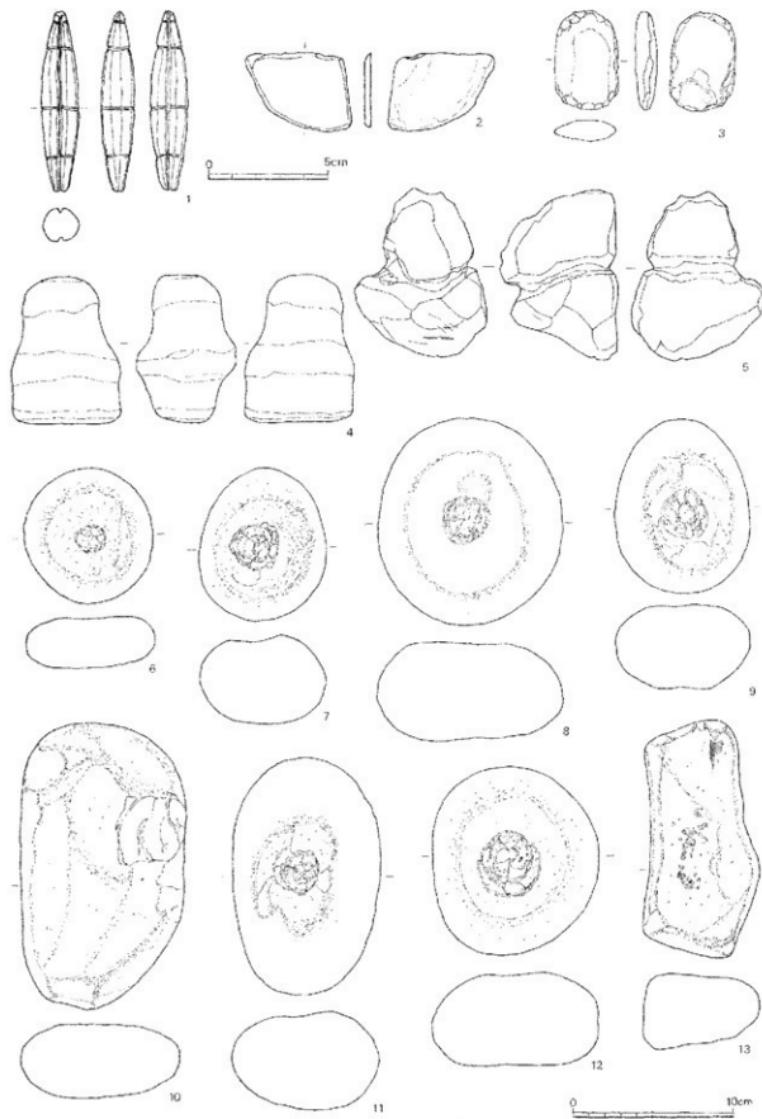
SD-3 I層石器（第43図、第44図 1~17）

1は頁岩を素材とした石錐。正面と裏面の長軸に幅1mm、深さ1mmの溝をそれぞれ1条上下端部から彫り込み、短軸は1周するように幅0.5mm、深さ0.5mmの溝を4条上端・上位・中位・下位に彫り込んでいる。2は石庖丁片。正面上面にわずかに穿孔痕が残る。裏面は剥落している。正面の3縁に研ぎ出しのエッジがあり石包丁の転用が考えられる。頁岩を素材とする。3は砂岩を素材としており実用的な石斧ではない。本来は石剣であったものを転用した可能性が考えられる。4は糸紡用の錐と考

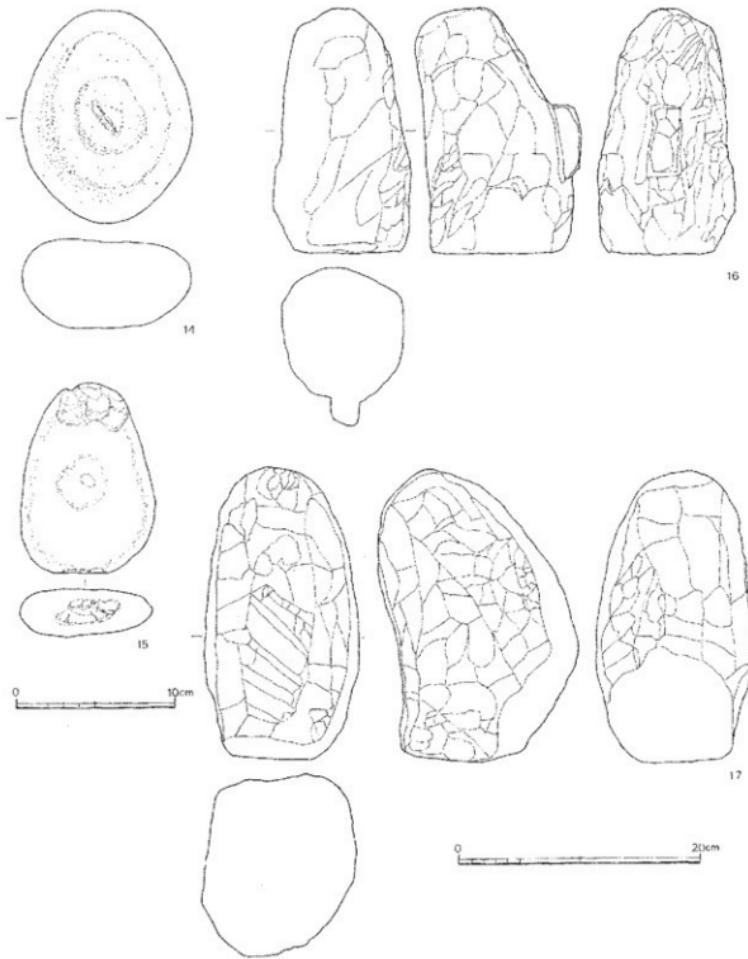


第42図 SD 3 I層出土土器

えられる。中央部の稜を境に上部と下部に浅い抉りが全周に回る。表面は非常に滑らかとなっている。5は軽石を素材とした浮きである。石材全面を粗くケズりだし中央部の短軸を幅13mm、深さ0.8mmの溝を一周させている。6は浅い敲打痕の凹を正裏面に残し、側縁は叩きを全周に行っている。7は中央に深い凹を有する凹石。また右側縁は半周にわたり叩き痕が認められる。8は正裏面に浅い凹がある。また、裏面は擦りの使用も残る。9は正裏面を凹石として利用している。10は上部を擦りに下部を叩きに使用している。11は正面を凹石として使用し、裏面は凹石とスリ石兼用としている。12は正裏面を凹石としているが、裏面はスリ石の兼用としている。13は裏面に浅い凹みがありスリ石として使用している。14は正面を凹石として使用し、裏面はスリ石として使用している。15は正面に浅い叩き痕が残るが、上下端を加熱による剥離を行っており、石錘を意図して製作されたと考えられる。16は支脚。側縁に把手を作出している。形状は縦断面が三角形をなし、横断面は楕円形となっている。下部は接地面を考慮して平坦とし、体部は全面に撃の加工痕が残る。また、上部は三角形の頂点をカッ



第43図 SD 3 I層出土石器 (1, 2は1/2, その外は1/3)



第44図 SD 3 I層出土石器 (14, 15は1/3, 16, 17は1/4)

トして平坦面を作出している。17は側面下端を欠損している。下部は平底となし、体部は全面に鑿の加工痕が残る。把手を作出しかけた彫り込みが縦縁に見られる。上部は尖り気味に製作している。

SD-3 II層

壺類（第45図 24~30）

24は頸部に断面三角形の凸帯を巡らす壺形土器。口縁部は直線的に外方へ開く。口唇部はやや丸味をもって平坦としている。25は凸レンズ状の底部から長胴となる壺。胴部上位に最大径をもち頸部で縮まり外反して口縁部へ移行する。口縁端部は平坦となす。26は平底状で胴部中位に最大径をもち頸部から外方へ口縁部が外反する。口縁端部は平坦となす。27は頸部で縮まり直線的に口縁部が上方へ伸び、口縁端部は平坦となす。28は丸い胴部から縮まった頸部に移行し、口縁部で屈曲して口縁端部を擒み上げた形状となす。29は丸味のある底部から最大径をもつ胴部中位へ移行し、頸部で縮まり直線的に口縁部が上方へ伸びる。口縁端部を丸く納める。器面の調整は外面に斜位の刷毛目調整を施している。30はレンズ状の平底から丸味を持って立ち上がり、最大径をもつ胴部中位へ移行し、頸部で縮まり長めの口縁部が外反する。口縁端部は厚味をもつ。器面は外面に刷毛目調整を行っている。

壺類（第46図、第47図 31~42）

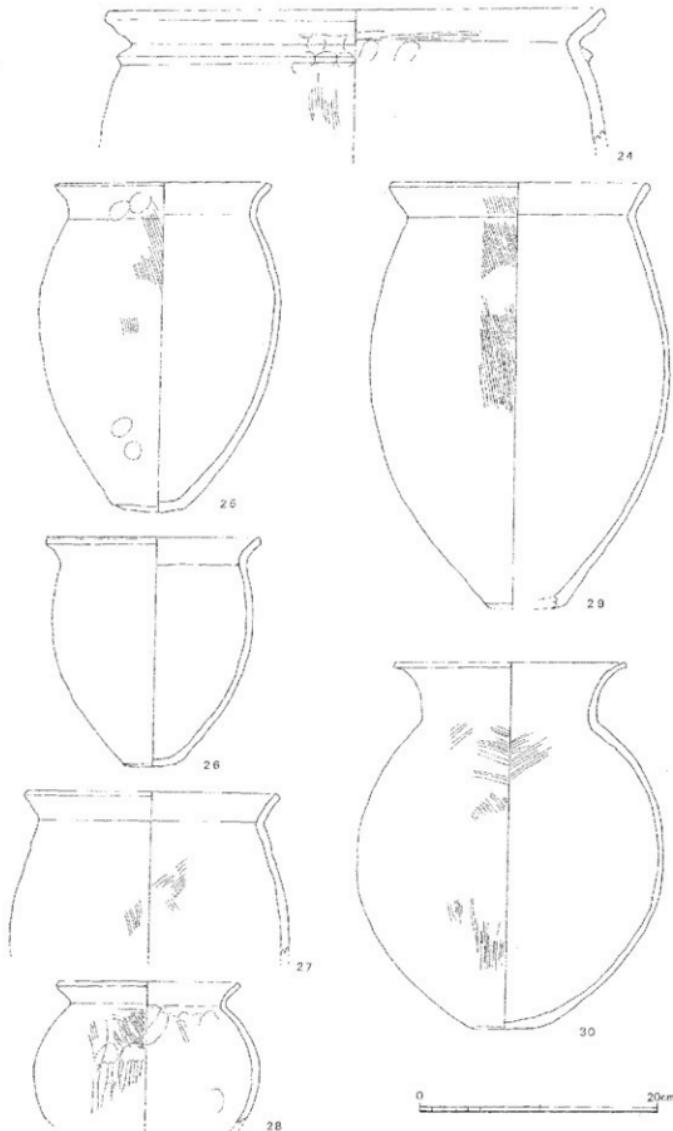
31は動形口縁をなす壺。大きく外反する頸部に口縁部の内端が突きだし、外端部は垂下する。32はレンズ状に近い平底から最大径をもつ胴部に移行し、頸部で縮まり大きく外反して口縁部へ移行する。口縁端部は丸味を持つ。外面に刷毛目調整を観察する。33はレンズ状の底端部から丸味を持って立ち上がり、最大径をもつ胴部中位に移行し、頸部で縮まり、口縁部は直立気味にやや外反する。口縁端部はやや丸味をもつ。外面に刷毛目調整が見られる。34は頸部が大きく外反して口縁部へ移行する壺。頸部下端に断面三角形の凸帯を付している。口縁端部は平坦となし一条の沈線を巡らしている。35は丸味のある肩部から縮まった頸部に移行し、反転して外反する頸部から丸味のある内傾した口縁部を形作る。また、頸部には正面に丸味のある凸筋を付している。口縁端部は平坦としている。36は頸部が大きく外反して屈曲気味の口縁部へ移行する。口縁端部は斜めに丸味をもつ。37は丸味のある肩部から大きく外反する口縁部へ移行する。口縁端部は平坦となしている。38は平底の底部から内湾して口縁部へ移行する小形壺。口縁端部は丸味をもち、外面ともに丹を付ける。39は丸味のある胴部から頸部で縮まり口縁部が外反する小型壺。頸部に小穿孔を行っている。40は狭い平底の底径部から卵形の胴部に移行し口縁部でわずかに屈曲する。胴部に沈線を巡らし、口縁端部を尖り気味となしている。41はわずかな底径部を上げ底とし、卵形の胴部へ移行して口縁端部を尖り気味に丸く納めている。42は尖り底の底部から卵形の胴部へ移行する。外面に刷毛目痕を観察する。

嵌入土器（第47図 43）

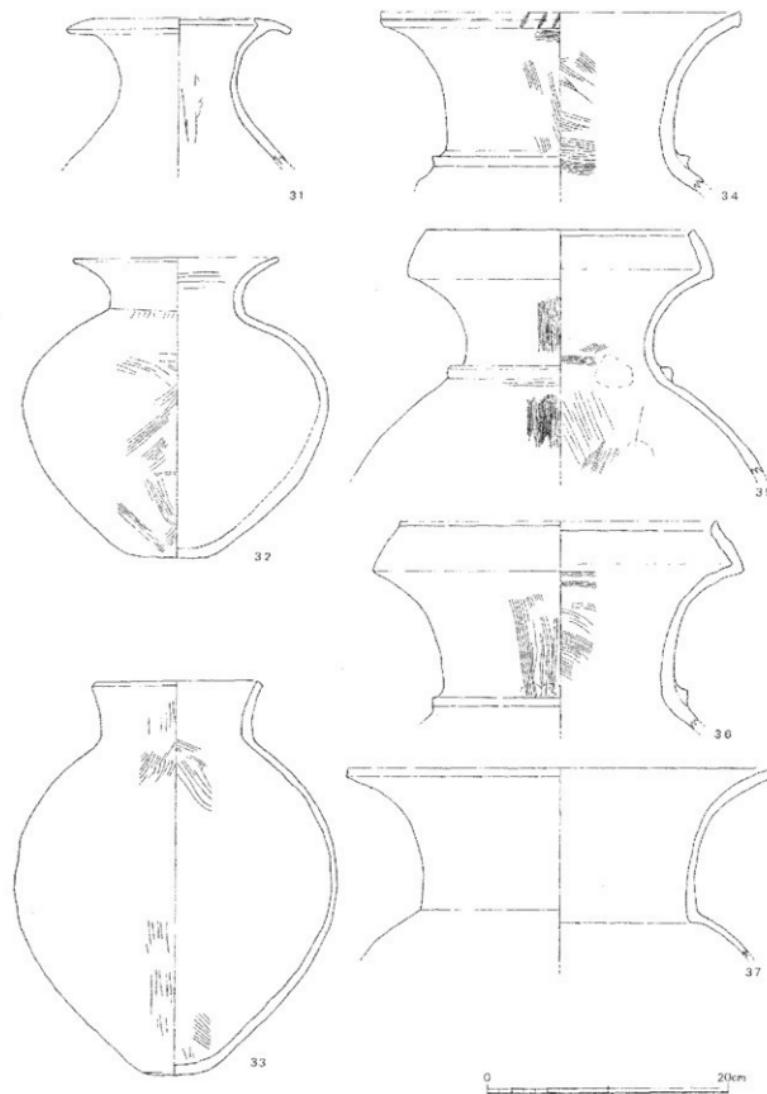
43は西瀬戸内系の土器である。粘土紐を渦巻き状に土器に貼り付けている。

高坏（第47図 44）

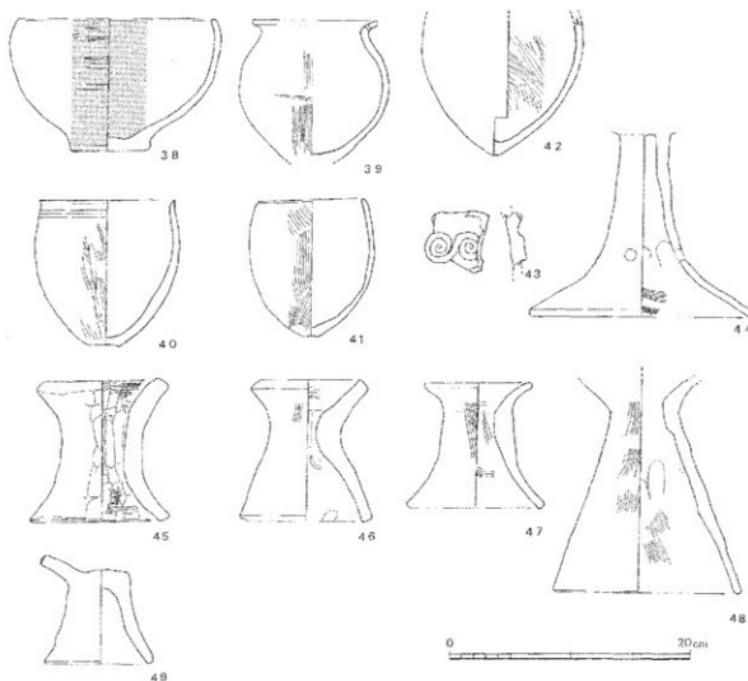
44は高坏の脚部である。裾部端に丸味をもち外反しながら脚中位で直立気味に立ち上がる。また、脚中位に小孔を穿っている。



第45図 SD 3 II層出土土器



第46図 SD 3 II層出土土器



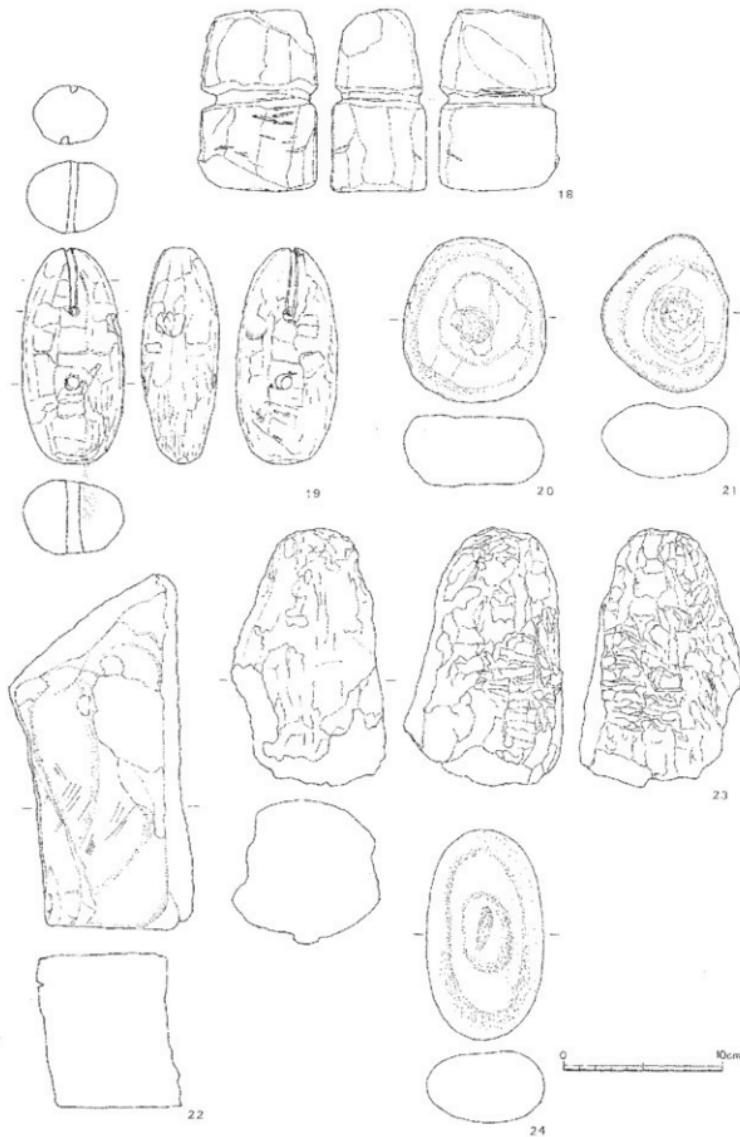
第47図 SD 3 II層出土土器 (43は1/3, その外は1/4)

器台類 (第47図 45~49)

45は脚上位と下位で外反する器台。内面は上位と下位に刷毛目調整し、中位はヘラケズリとしている。46は頸部を肉厚にして上下位を直線的に外方へ開いている。47は脚中位を肉厚にし、上下位を外反させている。48は脚裾部から直線的に頸部へ移行し頸部で反転させている。49は杏形器台。上部端に突起を付けている。上部中央の孔は作られていない。

SD-3 II層石器 (第48図 18~23)

18は輕石製の浮き。全面に作出の削りだし痕が残る。中央部の短軸に幅13mm、深さ8mmの溝が全周して彫り込まれている。19は滑石製の石錐。器形を卵形にし、盤状工具で整形している。正裏面の中央部は縦軸に沿って幅20mmを平坦とし、穿孔を2箇所設けている。中央部の穿孔は径が9mmで上位の穿孔は5mmとしていざれも貫通している。また上位の穿孔部位から長軸に沿って裏面貫通の穿孔部位まで幅4mm、深さ5mmの溝を彫り込んでいる。20は正裏面をスリ右と凹石の兼用で使用している。21



第48図 SD 3 II・III層出土石器 (22, 23は1/4, 他は1/3)

は正面に敲打による凹が明瞭に残るが裏面は敲打による凹が浅くなっている。22は大型の砾石。使用面が4箇所認められる。比較的きめの細かい砂岩をもついている。23は支脚。下部は欠損する。把手の作出が良くなく突起状に残っている。体部は堅い加工痕が全面に付いている。上部端はカットしている。

SD-3 Ⅲ層土器

壺類（第49図 50）

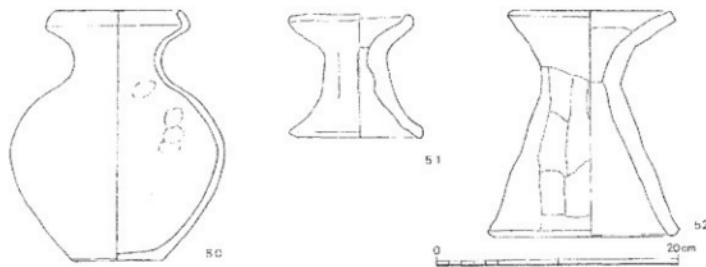
50は底の底部から最大径をもつ胴部中位へ移行し頸部で締まり、頭部が大きく外反し、丸味をもった口縁部と接続する。

器台類（第49図 51・52）

51は脚部上位で大きく外反する器台。頭部が肉厚で口縁部はやや屈曲している。52は脚端部から丸味をもって直線的に頭部へ移行し、頭部から大きく外反し口縁部は平坦な作りとしている。

SD-3 Ⅲ層石器（第48図 24）

24は正面の中央部に敲打によって梢円形に浅い凹がついており、凹石の使用が考えられる。



第49図 SD 3 Ⅲ層出土土器

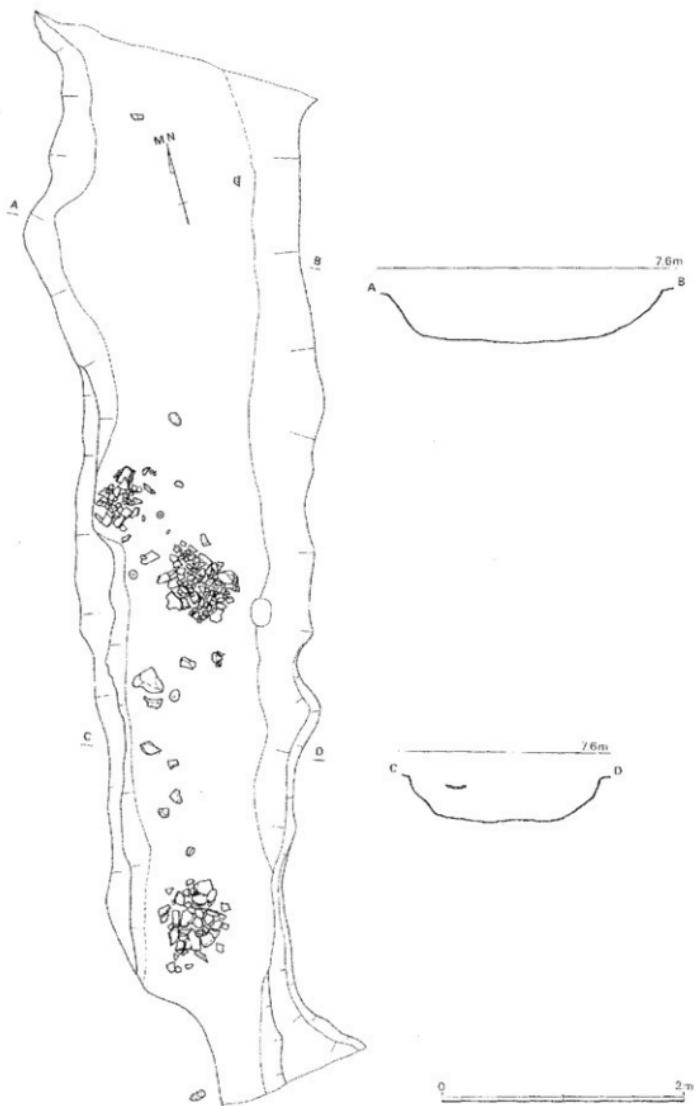
●SD-4 (第6図、第50図)

中央区SD 3と平行にSD 1に切られる形でSD 4を検出した。土層断面からSD 1が掘り直される前に北東方向から南西方向に直線的に掘られたと思われる。おそらく溝は南北方向にも延びていったと考えられるが、後の水田化による地山面の削平で南北では確認できなかった。途切れたところは地山が深く掘り下げられ、それに沿って打ち込まれた杭の跡も確認した。現状で、北東から南西へ約8.5mが残る。最大幅2.3m、最深約40cmを測る。量は少ないが弥生時代後期から古墳時代初期の土器が出土している。

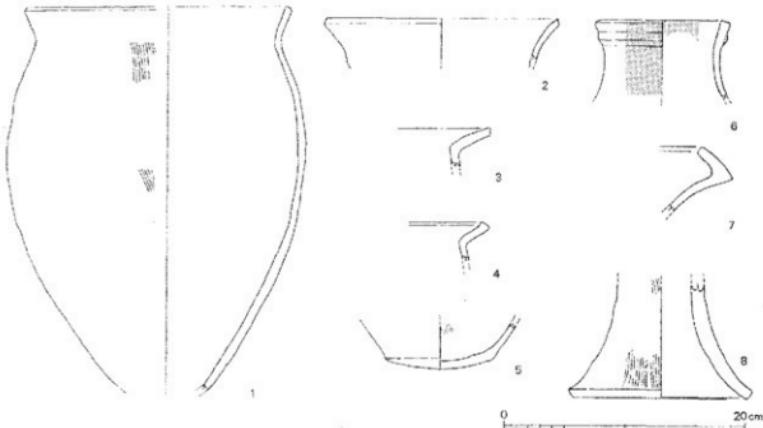
SD-4 I層土器

壺類（第51図 1～5）

1は長胴の壺である。胴部上位に最大径をもち頸部で屈曲し、直線的に外方へ口縁部が伸びる。口縁端部はやや厚味を増している。2は口縁部片の壺で、外反して口縁端部に移行する。3は壺の口縁



第50図 SD 4 遺物出土状況及び断面図 (1/40)



第51図 SD 4 I層出土土器

部片で頸部で屈曲し直線的に口縁端部が伸びる。口唇部に浅い沈線が見られる。4は屈曲した口縁部をなしている。口縁端部は平坦としている。5はレンズ状の底部片。

壺類（第51図 6・7）

6は直立気味に外反する口縁の壺形土器。口縁下に断面三角形の凸帯を付している。口縁端部は平坦としている。7は大きく外反する頸部に内傾する口縁部を乗せた複合口縁壺。

器台類（第51図 8）

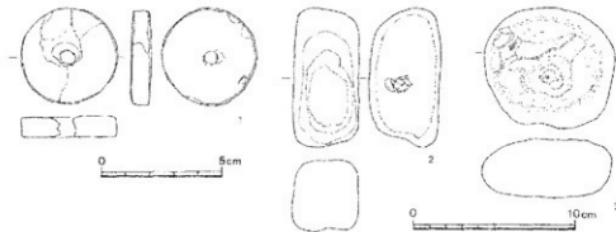
8は外反する器台の脚部で脚端部断面を四角としている。

SD-4 I層石器（第52図 1～3）

1は紡錘車。正裏面・側面ともに研ぎ出され表面は滑らかである。穿孔径は6 mmを測る。2は裏面を凹石として使用している。3は正裏面の中央部を叩き石として使用している。

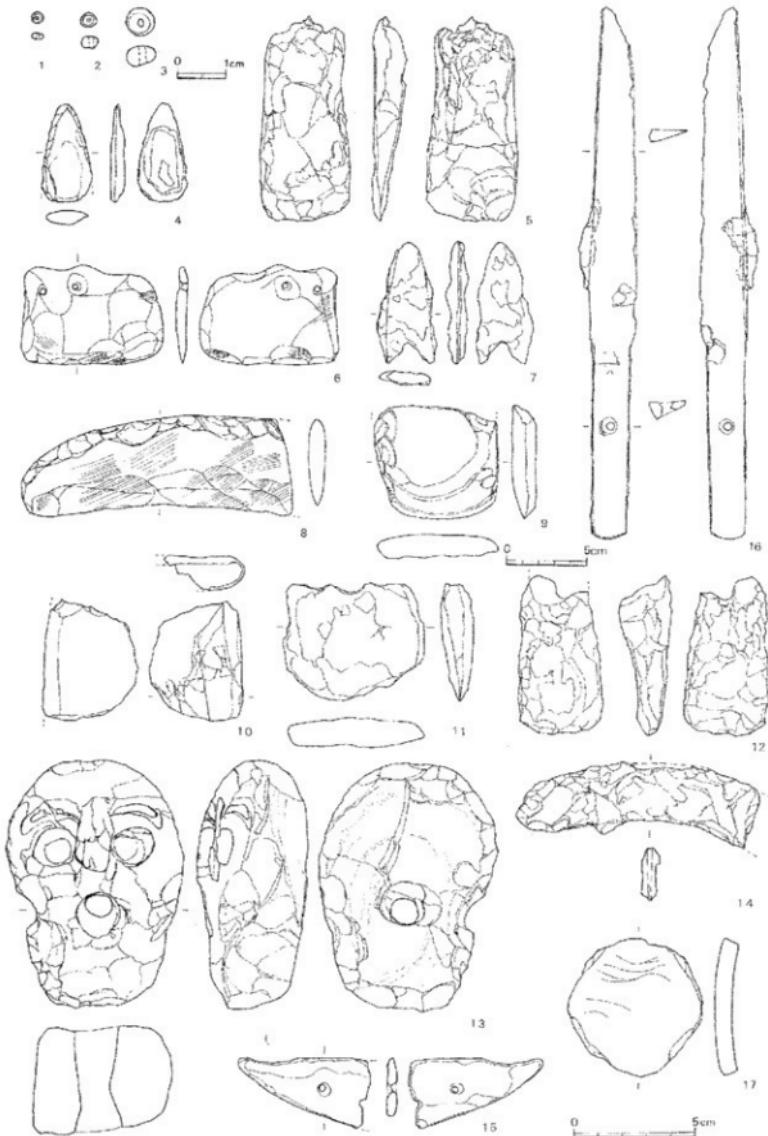
その他の壺及び遺構出土遺物（第53図、第54図 1～27）

1～3はガラス製の小玉。1が最小で径が2 mm, 孔が0.8 mmを測り、色調は濃緑を呈している。23区Ⅲa層の出土。2は24区Ⅲa層の出土。径が2.5 mm, 孔が1 mmを測り、濃緑の色調である。3は31区Ⅱ層下の出土。径が5.5 mm, 孔径が1.5 mmを測り、色調はライトブルーとなっている。4は24区Ⅲa層出土。磨製石剣の先端部分と思われる。風化が著しく調整痕は不明。5は2区Ⅲ b層出土。鍛造鉄斧で基部に鉄片の折り返しが付けられている。6は14区Ⅲ b層出土。上位2箇所に孔を穿っている。刃部は片刃としている。7は35区Ⅲ b層出土の鐵鎌。抉りのある無茎鎌である。8は36区Ⅲ b層出土

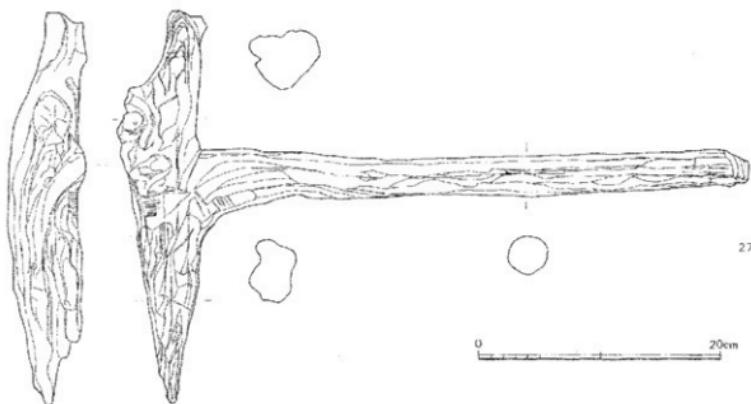
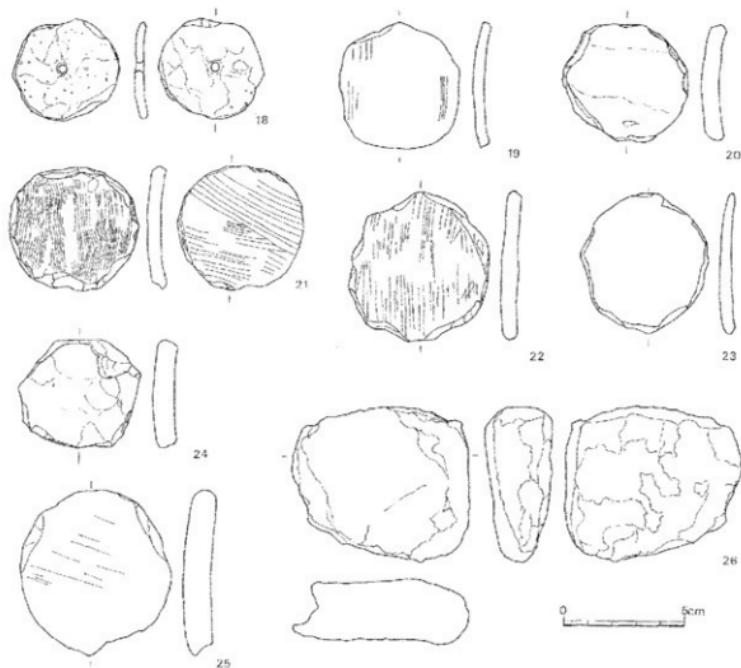


第52図 SD 4 1層出土石器 (1は1/2, その外は1/3)

の石鎌。刃部は正裏面から研ぎ出しを行って両刃としている。背の部分は剥離調整痕を残している。頁岩を素材としている。9は25区Ⅲa層出土の磨製石斧。風化が著しく研磨状況は確認できない。剥離は左側縁に認められる。10はSD-2区I層出土の鉄斧。基部の鉄片折り返しが残っている鍛造鉄斧。11は9区SD-2区I層出土。鍛造鉄斧の刃部片である。鋸のため詳細は不明。12はSD-2区II層出土。袋状の基部としている鍛造鉄斧。13はSD-2区II層出土の人面石。厚味のある凝灰岩を利用して作出している。大きさは、長軸10.2cm、短軸7.4cm、厚さ4.5cmの楕円形をしている。顔面は眉・目・鼻・口を明瞭に彫りだし、口は裏側まで貫通し、両眼はくぼませて頬の部分はやや細める加工をしている。14は16区SD-3区I層出土の鉄鎌。鋸による腐食のため詳細は不明。15は7区Ⅲb出土の石庖丁。正裏面ともに剥落のため研ぎの調整不明。孔を2箇所設けている。16は刀子で長さ21.7cm、幅2.0cmを測る。目釘穴1個、中茎が8cm、身が13.7cm。鋸文があるが判読できない。17から26は円盤状土製品等である。17は35区SD-3区I層出土。布留系蓋を転用していて、上位に波状沈線が確認できる。18は25区SD-3区I層出土の紡錘車。周辺を打欠いて円形に整えている。19は35区SD-3区I層出土の土製品。刷毛目調査のある胴部片を円形に加工している。20は35区SD-3区II層出土。胴部片を円形に加工した土製品。21は36区SD-3区II層出土。内外間に刷毛目調査のある胴部片を円形に加工した土製品。22は36区SD-3区II層出土。外面に刷毛目調査のある胴部片を円形に加工した土製品。23は35区SD-3区II層出土。丹塗土器の胴部片を円形に加工した土製品。24は23区Ⅲa層出土。胴部片を円形に加工した土製品。25は35区Ⅲa層出土。胴部片を円形に加工した土製品。26は35区Ⅲb層出土。刃部付近の鍛造鉄斧と見られるが、鋸による腐食のため詳細については不明。27は9区SD-3区Ⅲ層出土。木製斧柄の未製品で一木からなる曲柄にあたる。加工痕が幹の斧台部分と枝分かれした柄部分に確認される。



第53図 その他の層及び遺構出土遺物 (1～3は1/1, 9は1/3, その他1/2)



第54図 その他の層及び遺構出土遺物 (27は1/4, その他は1/2)

表4 出土石器一覧表①

図番号	出土区	機械名	材質	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	SD1 I層	石	頁岩	2.5	1.3	0.9	3.6	
2	SD1 II層	石	砂岩	11.25	3.3	2.1	165.1	
3	SD1 II層	石	砂岩	9.42	6.45	3.2	335.3	
4	SD1 II層	凹	石	玄武岩	10.45	10.1	6.1	1049.4 裏面はスリ石
5	SD1 II層	凹	石	玄武岩	12.3	10.3	4.4	920 裏面は叩き石
6	SD1 II層	凹	石	玄武岩	12	10.6	5	839.2 裏面も凹石
7	SD1 II層	叩き石	石	玄武岩	11	9	5.1	655 四面に使用痕あり
8	SD1 II層	スリ石	石	玄武岩	12.1	11.1	4.35	889 裏面は叩き石
9	SD1 II層	スリ石	石	玄武岩	14.4	7.9	7.4	1335.8 裏面は叩き石
10	SD1 II層	叩き石	石	玄武岩	11.5	9.2	6.35	1080 裏面はスリ石
11	SD1 II層	スリ石	石	玄武岩	12.65	8	5.5	735 裏面はスリ石
12	SD1 II層	凹	石	玄武岩	13.1	11.1	6.4	1484.2 裏面は叩き石
13	SD1 II層	支脚	石	玄武岩	15.9	15.95	7.9	1740
14	SD1 III層	叩き石	石	玄武岩	10.15	9.8	6.2	1011 裏面も叩き石
15	SD1 III層	凹	石	玄武岩	13.35	9.7	5	908 裏面は叩き石
16	SD1 III層	凹	石	玄武岩	11.3	9.45	6.85	1085.8 裏面を叩き石

図番号	出土区	機械名	材質	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	SD2 I層	スリ石	玄武岩	10.4	9.4	4.85	720	
2	SD2 I層	スリ石	玄武岩	11	9.5	6.3	810	
3	SD2 I層	叩き石	石	玄武岩	12	9.25	4.15	640 側面を使用
4	SD2 I層	凹	石	玄武岩	10.75	10.05	7.5	1158.6 側面を叩き石
5	SD2 I層	スリ石	玄武岩	11.5	9.7	6.2	1116.4	
6	SD2 I層	スリ石	玄武岩	12.92	10.6	6.3	1305.9 側面を叩き石	
7	SD2 I層	スリ石	玄武岩	12	9.35	5	843.7 側面を叩き石	
8	SD2 I層	スリ石	玄武岩	12.45	8.6	4.3	590.2 裏面スリ石、側面叩き石	
9	SD2 I層	叩き石	石	玄武岩	11.6	10.25	8.6	1511.3 裏面も叩き石
10	SD2 I層	スリ石	玄武岩	8.4	7.25	5.6	473.4 裏面もスリ石	
11	SD2 I層	凹	石	玄武岩	10.6	8.1	5.4	603 上部端を叩き石
12	SD2 I層	叩き石	石	玄武岩	15.2	11.8	8.4	2137.8 裏面はスリ石
13	SD2 I層	凹	石	玄武岩	8.7	6.3	3.9	293.2 側面を叩き石
14	SD2 I層	凹	石	玄武岩	11.55	7.05	6.05	745.2 裏面も凹石
15	SD2 I層	スリ石	玄武岩	9.9	8.75	5.5	771.3 正面・右側を叩き石	
16	SD2 I層	石	玄武岩	20.9	16.8	7.1	3800	
17	SD2 I層下	石	頁岩	5.2	2.3	1	21.1	
18	SD2 I層下	石	砂岩	12.45	8.6	4.4	702.4 側面を使用する	
19	SD2 I層下	凹	石	玄武岩	10.6	8.75	5.5	785
20	SD2 I層下	門	石	玄武岩	11.65	11.5	7	1320 右側を叩き石
21	SD2 I層下	凹	石	玄武岩	13.8	8.9	5.3	1019.2 裏面・両側面を叩き石
22	SD2 I層下	凹	石	玄武岩	8.9	7.95	5	560 裏面も門石
23	SD2 II層	切り手	石	玄武岩	2	2	1.4	7.3
24	SD2 II層	門	石	玄武岩	10.1	9.15	5	794 裏面も凹石
25	SD2 II層	凹	石	玄武岩	12	9.9	5.4	846 裏面はスリ石
26	SD2 II層	スリ石	石	玄武岩	10.75	8.85	5.2	773 側面は叩き石
27	SD2 II層	叩き石	石	玄武岩	17	7.55	6.4	1105 上部と下部の叩き石
28	SD2 II層	門	石	玄武岩	10.35	9.45	6.4	960 裏面と右側を凹石
29	SD2 II層	叩き石	石	玄武岩	11.3	11.5	7	1289.8
30	SD2 II層	叩き石	石	玄武岩	10.35	8.2	4.4	552 裏面も叩き石
31	SD2 II層	凹	石	玄武岩	15.6	7.7	5.1	860 正裏面とも2カ所凹石
32	SD2 II層	スリ石	石	玄武岩	13.1	6.6	4.8	581.8
33	SD2 II層	凹	石	玄武岩	12.2	9.7	6.6	1100 裏面のみ
34	SD2 II層	凹	石	玄武岩	11.7	9.6	7.8	1460 裏面も門石
35	SD2 II層	叩き石	石	玄武岩	11.3	2.8	3.25	133.3
36	SD2 II層	スリ石	石	玄武岩	7.9	7.3	4.4	351.9 裏面もスリ石後叩き石
37	SD2 II層	凹	石	玄武岩	13.9	10.1	5.1	1212.4 裏面も凹石
38	SD2 II層	凹	石	玄武岩	12.4	10.7	6.8	1249.2
39	SD2 III層	凹	石	玄武岩	13.85	9.5	6.55	1280 裏面も凹石、上下は叩き石
40	SD2 III層	凹	石	玄武岩	17.7	10	4.9	1347.5 裏面はスリ石
41	SD2 III層	凹	石	玄武岩	12.7	10.8	6.5	1235.1 裏面も凹
42	SD2 III層	台	石	堆積岩	20.6	14.2	9	3120

表5 出土石器一覧表②

図番号	出土区	種類名	材質	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	SD 3 I層	有刃器	頁岩	7.5	2.6	1.35	17.2	
2	SD 3 I層	石包丁	頁岩	4.4	3.3	0.3	6.9	
3	SD 3 I層	石斧	頁岩	6.2	4	1.4	44.5	石剣からの転用か
4	SD 3 I層	鎌	堆積岩	9.15	6.85	6.25	393.6	
5	SD 3 I層	浮き形	彩石	10.5	8.4	7.5	157.2	
6	SD 3 I層	叩き石	玄武岩	8.3	8	3.2	322	裏面と側面を叩き石
7	SD 3 I層	凹石	玄武岩	9.5	7.95	5.5	602.2	石礫を叩き石
8	SD 3 I層	凹石	玄武岩	12.8	9.8	6.3	1511.4	裏面は凹石とスリ石
9	SD 3 I層	凹石	玄武岩	10.8	8.4	5.4	706.9	
10	SD 3 I層	スリ石	玄武岩	17.8	10.3	5.6	1500	上部スリ石、下部叩き石
11	SD 3 I層	凹石	玄武岩	14.7	9.25	6.1	1269.7	裏面は凹石とスリ石
12	SD 3 I層	凹石	玄武岩	11.6	10.35	6	1133.1	裏面は凹石とスリ石
13	SD 3 I層	スリ石	玄武岩	14.7	7.2	4.7	733	裏面のみ
14	SD 3 I層	凹石	玄武岩	13.2	10.5	5.3	1139	裏面スリ石
15	SD 3 I層	石鍬	玄武岩	11.9	8.3	3	42	
16	SD 3 I層	支脚	凝灰岩	20.4	11.5	14	3080	
17	SD 3 I層	支脚	凝灰岩	24.2	12.9	16.8	4880	
18	SD 3 II層	浮き形	石	10.4	7.6	6.1	119.8	
19	SD 3 II層	石鍬	石	13.5	6.4	4.9	582.3	
20	SD 3 II層	スリ石門	玄武岩	10.3	9	4.4	730	裏面もスリ石と凹石
21	SD 3 II層	叩き石	玄武岩	9.8	8	4.6	521.9	裏面も叩き石
22	SD 3 III層	砥石	砂岩	29.95	15.6	12.9	8800	
23	SD 3 III層	支脚	凝灰岩	21.6	13	13.5	3220	
24	SD 3 III層	凹石	玄武岩	13.1	7.3	4.4	678.2	
1	SD 4 I層	紡錘車	頁岩	4.8	4.8	1.1	33.9	
2	SD 4 I層	凹石	玄武岩	10.3	5	5.2	488.2	裏面を使用
3	SD 4 I層	叩き石	玄武岩	9.8	8.9	4.5	520	裏面も叩き石

図番号	出土区	種類名	材質	長軸(cm)	短軸(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	34 II下	ガラス小玉	ガラス	1.2	1.12	0.82		
2	24 III A	ガラス小玉	ガラス	0.7	0.6	0.5		
3	23 III A	ガラス小玉	ガラス	0.5	0.45	0.29		
4	24 III A	磨製石鋸	頁岩	4	2	0.6	4.3	
5	2 III b 層	鍛造鉄斧	鉄	8.4	3.75	1.4	63.8	
6	北14 III B	石包丁	頁岩	5.8	4.1	0.5	18.6	
7	35 III B	鉄鍔	鉄	4.95	2.95	0.95	9.1	
8	36 III B	石鍔	頁岩	11.1	4.1	0.7	51.3	立石系
9	25 III A	石斧	頁岩	7.5	6.9	1.6	109.5	
10	10・SD 2 I層	鍛造鍛斧	鉄	4.95	3.89	1.45	34.2	
11	9・SD 2 I層	鍛造鍛斧	鍛	5.8	4.8	1.4	81.7	
12	11・SD 2 I層	鍛造鍛斧	鍛	6.6	3.5	2.2	50.6	
13	10・SD 2 II層	人面石	凝灰岩	10.2	7.4	4.5	320	
14	16・SD 3 I層	鍛鍔	鍛	10.05	3.5	0.85	28.7	
15	7 III b	石包丁	頁岩	5.45	2.9	0.4	7	
16	11-3層上面	紡錘車	土製品	21.7	2	0.5	81.3	
17	北35・SD 3 -I	無刺鍔	鍛	5.6	5.55	0.91	22.3	
18	北25・SD 3 -I	内盤	土製品	4.4	4.2	0.6	8.4	
19	北35・SD 3 -I	内盤	土製品	5.21	5	0.75	17	
20	北35・SD 3 -II	内盤	土製品	5.2	4.39	1	24.5	
21	36・SD 3 II	内盤	土製品	5.3	5.15	0.8	21.7	
22	36・SD 3 II	内盤	土製品	6.2	5.36	0.85	28	
23	北35・SD 3 -II	内盤	土製品	5.8	5.3	0.7	19.1	
24	23 III A	内盤	土製品	5.05	4.49	0.99	24	
25	35 III B	内盤	土製品	6.85	6.29	0.85	54.4	
26	35 III b	鍛斧	鍛	7.4	6.4	2.85	124	
27	第1回木製	木製品						木製品

●その他の遺構

南区や中央区の東側で柱穴や Pit を検出した。しかし、地山が大幅に削られ、深いものでも約15cm 程度しかなく、用途については不明である。

註文献

- 註1 『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 〈編集〉金関 勉・佐原 真
「2 九州地方の弥生土器」 2. 高三瀬式と西新町式土器 柳田康雄の土器型式基準に準じた。
- 註2 『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 〈編集〉石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎 「2 九州」柳田康雄の土器型式基準に準じた。
- 註3 『金海良洞里古墳文化』東義大學校博物館「161第280号 三耳附蓋(瓦質)」2000
- 註4 原の辻遺跡調査事務所が株式会社古墳境研究所に依頼した原の辻遺跡特定調査におけるプラント・オバール分析2002の資料を報告している。

参考文献

- 木賀麻成園録 近畿原始窯(解説) 奈良国立文化財研究所資料第36冊奈良国立文化財研究所1993
- 西新町遺跡Ⅲ－福岡県福岡市早良区西新町遺跡第12次調査報告書2－福岡県文化財調査報告書第157集福岡県教育委員会2001
- 千々賀遺跡－住宅隣地造成工事に係る埋蔵文化財調査－旗津市教育委員会 2001
- 『九州考古学研究』弥生時代編 小田富士雄 学生社版 1983
- 『土器からみた日韓交渉』武末純一学生社 1991
- 『古文化論集』下巻 森貞次郎博士古稀記念 「原の辻上層式土器の検討」高倉洋彰 1982
- 『原の辻遺跡』原の辻遺跡発掘調査報告書第11集 長崎県教育委員会 1999

IV. まとめ

1. 遺構について

本年度は芦辺町深江鶴龜触字八反地区的調査を実施し、環濠推定地の確認作業を行った。調査の結果3条の濠と1条の溝を検出した。また、3条の濠から出土した遺物は44,008点を数え、溝からは352点が出土している。以下に各環濠と溝の検出状況と時期について説明を加えて行きたい。

S D 1は調査中央区の東側にあり、現状で最大幅が約2.8m、最深が0.8mの断面U字形を呈する。S D 1は丘陵の地形に合わせるように丘陵裾の南側から中央部西側へ突きだし110度北東へ折れて丘陵に入り込む。また、濠は一度埋まつた後再度掘り直しを行い、月塗り上器等を大量に投棄している状況が確認された。

S D 2の濠幅は現状で約3m、最深約1.5m、調査南区から北へ湾曲し、調査中央区から調査区外へ出していく結果を得られている。検出した濠幅約3mは、濠幅全体を把握する調査区を設定しておらずS D 2の東西の濠幅は確認していないが、過去の試掘調査の結果ではさらに西側へ3m延びた位置に濠の立ち上がりが確認されている。このことから、濠幅は南区で東西約6mと予測された。また、S D 2はS D 3を切る位置に存在している。この濠は湧水があって水が常時溜まつてゐたかあるいは水が流れている状況を想定できる。遺物から判断できることは、水流による遺物自体の破損またはローリング等の状況は見られないといえる。埋まる行程としては、濠内の土層からⅢ層の弥生後期の遺物が出土する時期からしだいに浅くなり、Ⅱ層からⅠ層の古墳時代初期の時期に急激に埋まりだし、大量の遺物を投棄した状況を示している。

S D 3は調査中央区の南西側から調査北区の東側へ徐々に幅を広げながら延びている。調査中央区北側での濠の最大幅は約2.5m、最深で約1.2mを測る。S D 3も再度掘り直しを行っているが、調査中央区の中央部から西側付近は、近世から近年にかけての水田耕作により地山削平の影響を受けている箇所がある。このため濠上部も同様に削平を受けていた。調査北区は比較的上部の地山削平を免れており、掘り直し後の投棄土器が多量に残存している状況であった。現存の濠最大幅が約2.8m、最深が約1.3mを測る。濠の断面はU字形をしている。なお、濠を検出した上面に焼土の集中箇所を確認している。

S D 4はS D 1と切合関係にあり、新旧ではS D 4がS D 1に切られており、S D 4の溝がS D 1より前に掘られていたと言える。溝の全体については、調査南区が地山削平されていて溝が消滅し、調査中央区北側についてはS D 1によって切断されている状況である。現状で確認できた長さが北東から南西へ約8.5m、最大幅は2.3m、最深は0.4mを測り、断面U字形を呈する。

2. 出土遺物について

S D 1は弥生時代後期の遺物を中心に出土し、その遺物点数は7,479点を数える。Ⅱ層から出土し

た遺物は、弥生中期の須次II式の壺形土器や壺形土器が最も古いが出土数が少ない。これと比較して、後期の土器は多量に出土している。後期の壺形土器は、口縁部が「く」に頭部で外反し胴長であり、壺形土器は複合口縁に変化していることが特色であると言える。これに加えて、樂浪系の鉢形土器が出土している。III層は須次II式の壺形土器が出土するがII層同様に、弥生後期の土器が態勢を占めている。例として第14図44の後期3様式²⁴の「く」字状口縁に凸レンズ状平底の底部をなす壺形土器や壺形土器では、後期5様式にあたる直立した口縁部をなす複合口縁壺が出土している。IV層出土の土器は、濠の掘り返し部分から出土した資料である。口縁部は直線的に「く」字に屈曲し、胴部上位に最大径があり底部は平底とした後期2様式が出土している。

SD2はI層とII層に古墳時代初頭²⁵の遺物が大量に出土し、さらに三韓系瓦質土器²⁶が出土している。出土点数は、19,024点ある。I層下から出土の遺物は、在地系の壺形土器と外米系の壺形土器が混在した状況を呈している。例として、第24図1・3・4が在地系であり、5・6が外米系である。また、壺形土器は二重口縁の土器が出土している。II層は弥生後期5様式の口縁部が屈曲気味で輪郭をコ字に納めた壺形土器やタタキを外面に施した第30図40等の土器が出土している。また一方で、波状沈線文を配した布留系土器が出土している。三韓系瓦質土器もII層からの出土である。石器では、石鑿・砥石・凹石・叩き石・スリ石に加え切子玉・人面石等が出土している。III層以下は、弥生後期の4~5様式の遺物を中心に出土している。

SD3は弥生時代後期の遺物を中心に弥生中期須次II式の壺形土器と後期後半の遺物が出土している。出土点数は17,825点を数える。I層は口縁部がコ字形をなし頭部に断面三角形の凸唇を付けた壺形土器と後期2様式前半までに見られる丸味のある袋状口縁が第40図6が出土している。器台では胴部最小径が上端にあるものが多い。II層の壺形土器は凸レンズ状と凸レンズ状平底とがあり、口縁部は「く」字となる。壺形土器は、複合口縁の上器と頭部から大きく外反する上器が出土している。また、小形の壺は平底の無形・尖り底等が見られる。その他に西瀬戸内系の搬入土器片が出土している。III層は2様式前半の壺形土器の出土がある。石器では、滑石製の石鏃・軽石製の浮き・文脚石・砥石・叩き石・凹石・スリ石等の生活状況を窺わせる遺物が出土している。

SD4は弥生時代中期の壺形土器口縁部と後期3様式後半から4様式の壺形土器が出土している。出土量は極端に少なく406点を数えるにすぎない。石器では紡錘車・スリ石・叩き石等が出土している。

3. その他の

SD1とSD3の植物珪酸体によるプラント・オパール分析²⁷結果を報告すると、SD1は掘り返しを行っていない濠内覆土の10層にイネのプラント・オパールが5,300個/gと密度の高い値がでている。SD3は10層から11層の濠内覆土に3,800個/gの値がでている。また、イネ以外の分類群では、SD1の掘り返した3層と6層の濠内覆土にタケア科（おもにメダケ属）を多量に検出している結果を得られた。

図 版



調査区遠景（南から）



中央区 SD1・SD4 検出状況



中央区 SD1 II層 遺物出土状況



中央区 SD1 III層 遺物出土状況



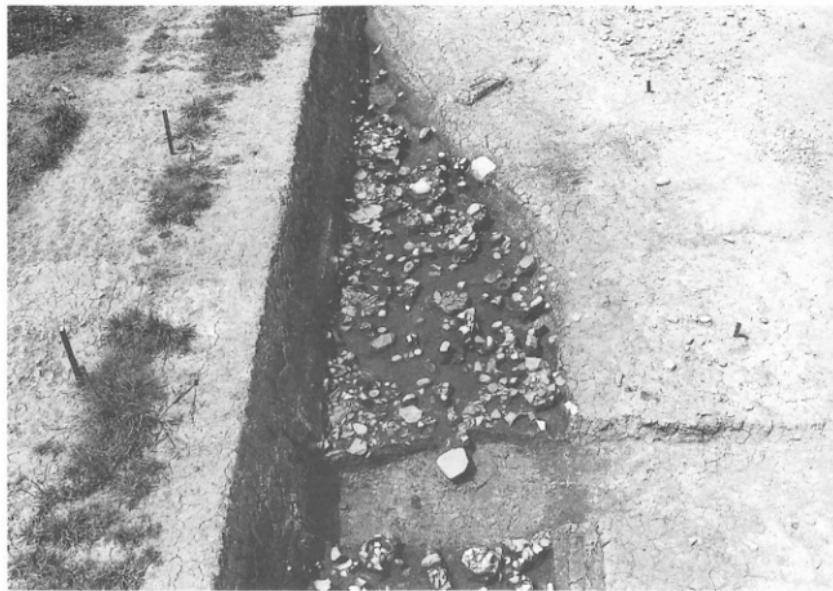
中央区 SD 1 横断土層



中央区 SD 1 横断土層



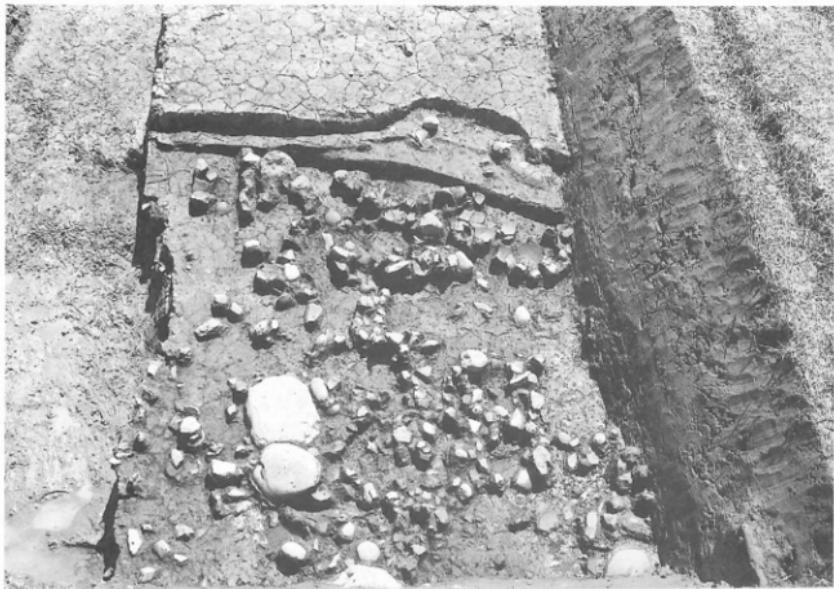
中央区 SD 1・SD 3検出状況



南区 SD 2検出状況



南区 SD2 I層下 遺物出土状況（南から）



南区 SD2 I層下 遺物出土状況（西から）



南区 SD2 I層下 遺物出土状況（西から）



南区 SD2 遺物 出土状況



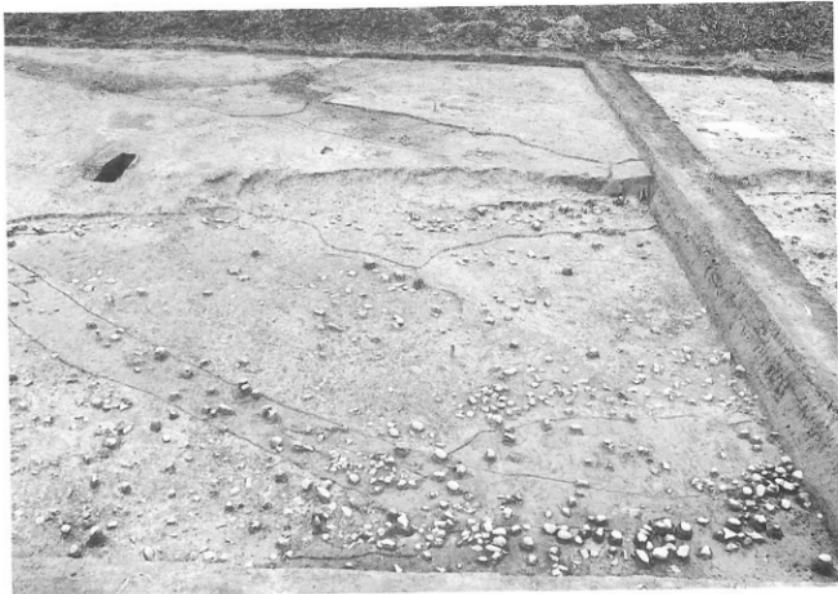
南区 SD 2 造構 検出状況（南から）



南区 南壁 SD 2 土層



南区 SD 2 遺物出土状況



中央区 SD 1・SD 3・SD 4 検出状況（西から）



中央区 SD3 調査風景



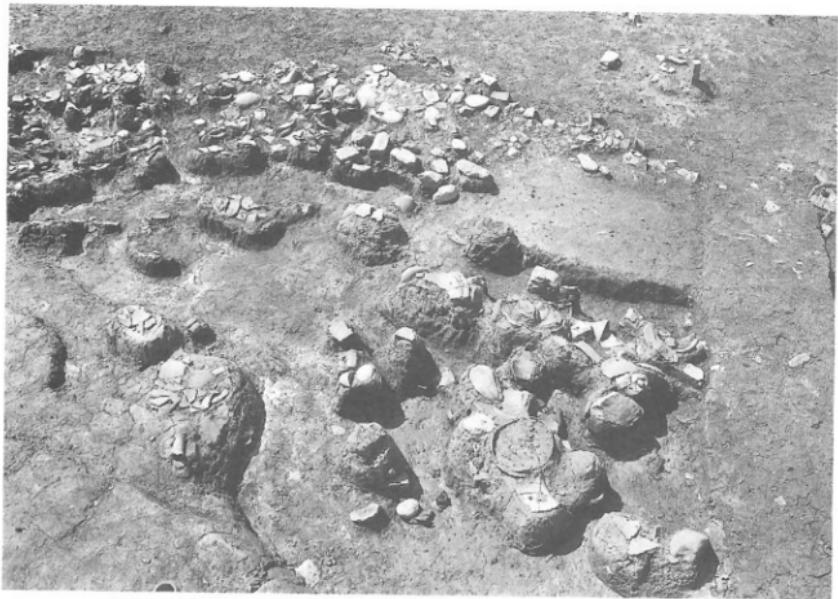
中央区 SD3 遺物出土状況



北区 SD 3 石群 検出状況（北から）



北区 SD 3 石群 検出状況（南から）



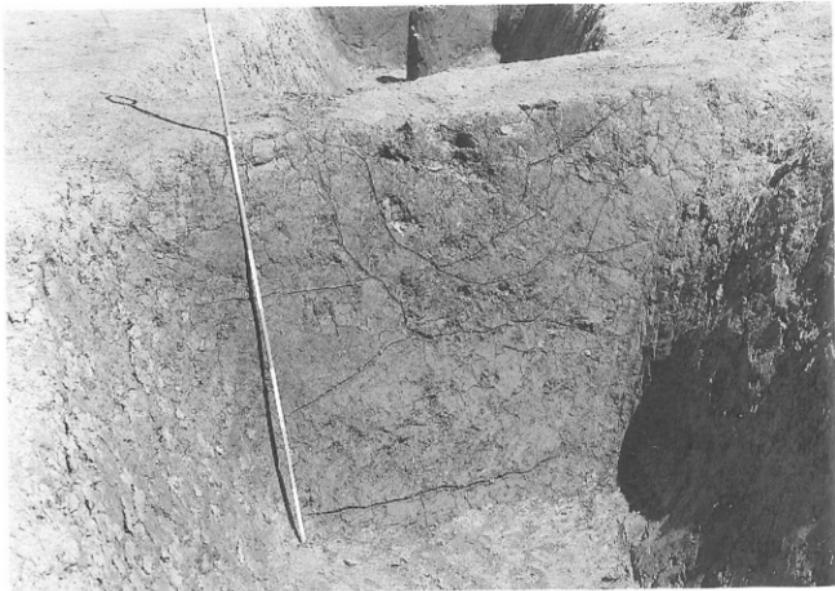
北区 SD 3 遗物出土状况



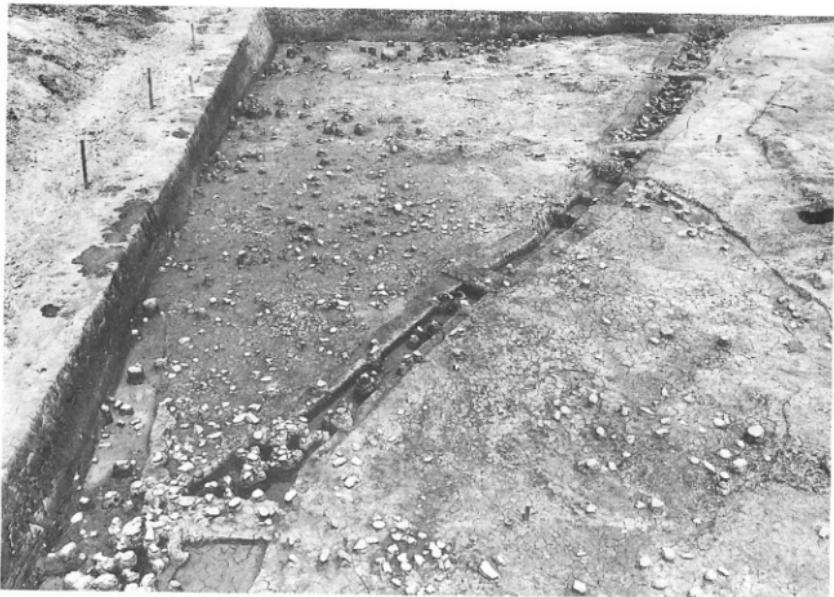
北区 SD 3 遗物出土状况



中央区 SD 3 横断土層



中央区 SD 3 横断土層



中央区 SD 2・SD 3 検出状況



北区 SD 3 検出状況



中央区 SD 4 遗物出土状况



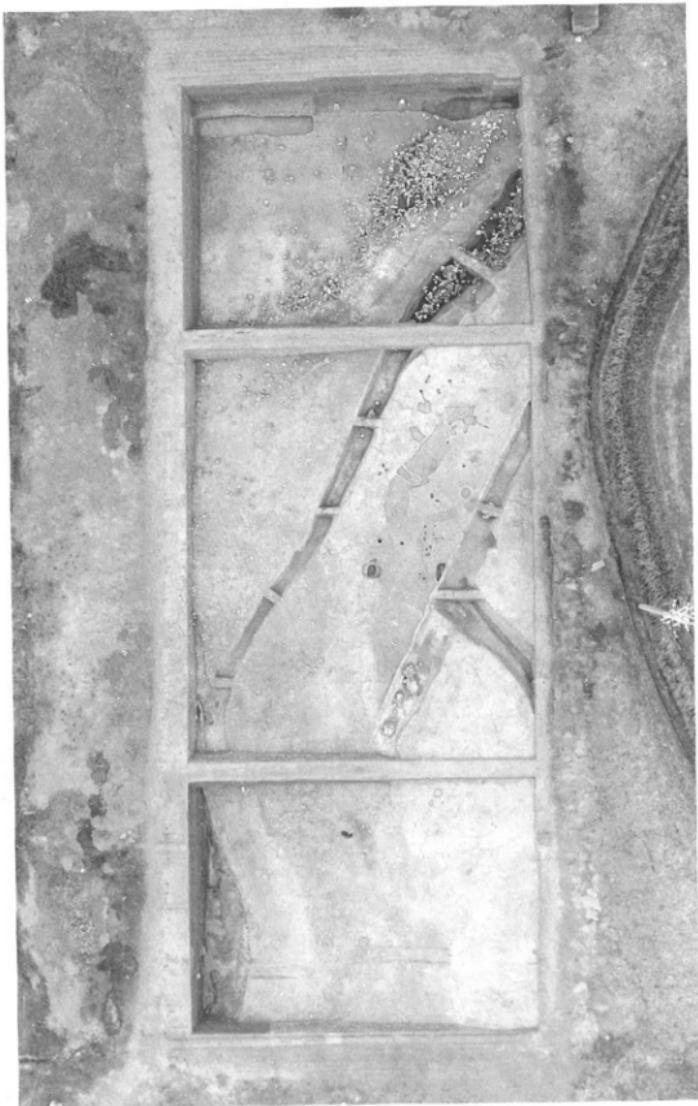
南区 Ⅲ层 刀子 出土状况



中央区 SD 4 検出状況（南から）



中央区 SD 1・SD 4 検出状況（南から）



調査区全景

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書						
卷次	IV						
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書						
シリーズ番号	第24集						
編著者名	町田利幸・藤村誠・中尾篤志						
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL09204(5)4080						
発行年月日	西暦2002年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所住地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡 芦辺町	42423	73-10	33°45'30" N 129°45'55" E	20000514 20010103	1,100m ²	特定調査
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠2条 溝1条	弥生土器 朝鮮半島系土器 打製・磨製石器 切子玉・ガラス玉 鍛造鉄斧 鉄鎌・鉄鎌 人面石			

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集

原の辻遺跡

2002. 3. 31

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂